

# 川柳塔

昭和四十四年一月九日 第三回創刊特別号  
平成四年六月二十五日 印刷  
平成四年七月一日発行(毎月一日発行)  
創刊大正十三年 通巻七八二号



日川協加盟

No. 782

同人特集・川柳と健康

七月号

～NHK学園創立30周年記念～  
平成4年度 **NHK学園** 全国川柳大会

- ◎開催日 平成四年十一月八日(日) 午後一時より  
◎会場 東京・大手町ていばくホール  
◎主催 NHK学園  
◎後援 文化庁、NHK、日本川柳協会
- ◎投句要領 ●宿題五題(事前投句)各題二句  
①「早い」②「立つ」③「三」④「充分」  
⑤「粘る」  
●席題二題(当日投句)各題二句  
投句料二、〇〇〇円 入選作品集代を含む  
投句用紙などは係へお問い合わせて下さい
- ◎選者 山田 良行(北国川柳社)  
齋藤 大雄(札幌川柳社)  
森中恵美子(番傘川柳本社)  
橘高 薫風(川柳塔社)  
仲川たけし(川柳まつやま吟社)  
竹本瓢太郎(川柳きやり吟社)  
渡邊 蓮夫(川柳研究社)  
坂本 一胡(NHK学園川柳友の会会長)  
◎この人に聞く 「川柳とわたし」 女優 加藤 道子  
◎シヨートスピーチ 「川柳、壁にぶち当たったとき」 齋藤大雄・森中恵美子・橘高薫風
- ◎賞 大会大賞  
NHK会長賞  
各題ごとに特選、秀作、佳作  
平成四年十月十二日(月) 当日消印有効  
〒186-01 東京都国立市富士見台二二二六  
「NHK学園全国川柳大会」係
- ◎大会参加をご希望の方は往復はがきで申し込んで下さい

第6回 川柳愛吟コンテスト 誌上全国大会

- ◎愛吟の部
- ♡テーマ 二次選者 一次選者  
山田良行 佐伯太郎 岩田三和  
大木俊秀 井上松実
- ♡作品 十句 用紙自由 住所氏名を明記  
♡会費 千円 発表は平成五年三月号  
♡賞(祝) 最優秀・優秀・秀・優句に図書券を  
二十～二枚贈る
- ♡心友賞 五名グループ、一～三位まで賞品あり
- ◎ジュニアの部(小・中・高校生対象)
- ♡テーマ 「怒」句数用紙自由、住所氏名を明記  
♡会費 発表誌一部五百円×希望部数  
♡賞(祝) 愛吟の部と同じ、ただし六～二枚
- ◎絵画の部(一般・ジュニア対象)
- ♡作品 一句を入れた柳画・マンガ・写真・書など、サイズ自由、白黒作品  
♡会費 千円(ジュニアは無料)  
♡賞(祝) 右記と同じ、作品は返さない
- ♡選 広瀬町文化協会役員で共選
- ☆締切日 平成五年一月二十日  
☆応募先 〒692-04 鳥根県義那郡広瀬町広瀬六三九  
広瀬川 柳愛吟会  
振替・松江三三四七二

# 社団法人 全日本川柳協会の誕生

## 西 尾 栞

一九九二年六月十四日に開催される、

第十六回全日本川柳和歌山大会は、俵いにも六月三日に認証式を挙げた社団法人全日本川柳協会の創立を大きく発表する大会となったことは、洵にご同慶の至りであった。

事前投句の三題の一つ「城」の選を私がやることになっていたので、五月十日に締切られた一、五〇九人の句、即ち、三、〇一八句が、五月二十日に到着したことは洵に幸であった。というのは、選は五月末日必着で入選百句、秀吟二句、自句一句ということであった。私はこの五月三十日から二週間オーストラリアの方へ旅行する予定だったから、三、〇一八句をゆつくり楽しんで選することがで

きたのは何よりであった。

城という題は、何回もこの句会でも出題されるので、同工異曲の句が多いため、一九八八年の第三回国民文化祭兵庫大会の田中好啓氏選の「城」を再度読んで頭に入れた。また、類題別番傘一万句集二冊と志水剣人編の高点句集三冊の「城」を通読して、類句、類想句を避けた。

選は創作だと人も言い、私も固く信じているので、この十日間の選は大変楽しい選であったが、好啓氏が選後評に言う「おられる如く、城は家の感覚が多く、兔小屋、父の城、母の城、寡婦の城が多く、特異な発想がなかったことは残念であった。

昨年、尾張藩六十一万石の愛知大会は七〇八名の大台に乗った入場者だったが、事前投句は千三百何十句と聞いている。今年、紀伊藩五十五万石の和歌山大会は、事前投句が千五百八句と上回っているから、今年の入場者は大変楽しみである。良い成績で有終の美を飾りたいものである。

瀬祭の片肱枕子規の城

漱石の城代家老無位の猫

天命断つて酒中の仙は杜甫の城

鶏頭の十四五本もあり子規の城

栞

〃

〃

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

他人さまが儲かる話聞いて飲み

住谷石舟

# 川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 社団法人全日本川柳協会の誕生

西尾 栞 …… (1)

六月三日

橘高薫風 …… (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 …… (4)

自選集

東野大八 …… (39)

川柳の群像 河村日満

東野大八 …… (44)

■古川柳 柳籠裏三篇研究(十三丁)

黒川紫香選 …… (46)

水煙抄

黒川紫香選 …… (46)

秀句鑑賞「同人吟」

新家完司 …… (43)

水煙抄

三宅保州 …… (79)

川柳と健康―同人アンケート

三宅保州 …… (79)

林 荒介・黒川紫香・仁部四郎・山口美穂  
小島蘭幸・藤村ノ女・内海幸生・岩佐ダン吉

河内天笑選 …… (72)

銀河系

河内天笑選 …… (72)

茴香の花

八木千代選 …… (76)

六月三日

橘高薫風

設立許可書

平成四年五月十四日付で申請のあった社団法人全日本川柳協会の設立を、民法第三十四条の規定によって許可します  
平成四年六月三日

文部大臣 鳩山 邦夫

川村恒明文化庁長官の音が、文部省六階の文化庁長官室に響き、仲川たけし会長、山田良行理事長をはじめ十八名の役員が緊張の面持ちでこれを受ける。午前十時三十分、歴史的な一瞬であった。NHKのTVニュース取材班がカメラに取める。私は、ご先祖様のお陰ですと、路郎先生ご夫妻を思いながら深々と頭を下げた。

路郎先生は川柳の社会化と質の向上に言うに言えぬ力を尽くされた。一生を捧げられた。昭和二十二年、岸本水府、中島生々庵氏とともに、「なにわ芸賞」を受賞された時、大阪の識者の中に、「雑俳にたずさわる輩になにわ芸賞を出すとは何事」と発言する人が居た。また、日本文学史に詩や短歌(和歌)・俳句は書かれていても川柳の項はない。朝日新聞に連載の大岡信の「折々のうた」にして

■ ひみこさろん「私の夏」	松本文子・山川克子	（78）
「栄える」	松永すずむ選	（80）
一路集「水晶」	小田川智重子選	（80）
「提灯」	寺井東雲選	（81）
初歩教室「無職」	吉岡美房	（82）
林瑞枝集「傘の浜」	政岡日枝子	（84）
■ 句集紹介 切り絵の味「傘の浜」鑑賞	東野大八	（85）
合同句集「さわらび」	春城年代	（86）
大空のころろ（19）	橘高薫風	（87）
各地柳壇（佳句地十選／井上照子）	高田博泉	（88）
■ 各地句会だより 川柳ねやがわ	久家代仕男	（100）
六月本社句会	久家代仕男	（104）
原独仙さんを偲ぶ	久家代仕男	（106）
柳界展望	久家代仕男	（127）
七月各地句会案内	久家代仕男	（128）
■ 編集後記		

座右の句

人恋し人煩わし波の音

私の句

孫と手をつなげば童唄が出る

（葉）

太田 幸枝

からが、柳多留あつて現代川柳は現れぬのである。川柳が市民権を得るのに今回の慶事は一步近づいたと思へもする。国語の教科書に現代川柳が採用される日を、われわれは期待し続けたく思う。それには川柳の人的増加に相俟つて質の充実が益々必要で、指導者の確固たる識見にあずからねばならない。

路郎・霞乃両先生の霊前に早速、社団法人全日本川柳協会の設立を報告申し上げ、今後の発展への加護をお願いした。

麻生路郎句集「旅人」を繙く。第一頁に、

二階を降りてどこへ行く身ぞ

がある。七七音の短句である。路郎先生は、数ある句の中で、何故にこの句を巻頭に据えられたのだろうか。私はふと、これは、路郎にとつての前句なのではなからうかと思つた。

二階の書齋を拠点にして、路郎先生の人生の万華鏡が展開するのである。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

行先はどうあろうとも火の如し

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

雲の峯という手もありさらばさらばです

どこへ行く身ぞ〳〵の七七音の底知れぬ前句のさびしさが、裏返しになつて路郎作品の奔流とほとばしり、絢爛と花開く。

作品こそ勝負の路郎精神を思うとき、近来の私など忸怩とせざるを得ない不肖の弟子なのである。



西尾 葉 選

熊本市 永田 俊子

脳の隙間広がったらしい忘れもの  
愛に迷うシャンパングラスの細い脚  
女みな耐えて通した針のメド

糸切り歯なくしてからの妥協ぐせ

脱税の庭に見事な石を据え  
いい方に映る眼鏡を大切に

松原市 小池 しげお

後列に並ぶと顎で数えられ  
神様は留守のようだが手を叩く

坊さんがスピード違反して行った  
糶種へ休耕のこと話すまい

自販機で百円拾いそのまんま  
出目金に睨まれている妻の留守

守口市 結城 君子

メーデーの朝 晴天は心地よし  
孫遊ぶ白馬あたりよ晴れてほし

テレビでのファンですけど武豊

みんな見て今日は朝から主婦専科  
かたつむり日本に生れ幸せな  
泰山木曰く いじめとは何か

堺市 板尾 岳人

人形をしっかりと抱いてやる情け  
まだ恋をする人間でありぬべし

下駄履いて男の論理考える  
バラ一輪なに考えているのだろう  
タンポポに愚弄されている文化

奈良市 宮口 笛生

なんぼ金あっても足らん都会の灯  
やき肉の匂い脱線してしまふ

五十年 妻に敷かれたままの幸  
空回りばかり歳をとり過ぎた

野球放送 妻も猛虎にひきつられ

朝令暮改減反やめると言われても  
無駄多いなと片べりの靴ばやく  
図に乗ってポトル一本キープする  
自分史の汚点を紙魚がよけている  
順風満帆乗っていたのは白日夢

下関市 石川 侃流洞

風向きを男の背に耐えて生き  
俺を彫るノミしっかりと抱いている  
大山を我が庭にして男生き  
実力と人気やっぱり違うんだ  
町内に退屈男の名で知られ

倉吉市 奥谷 弘朗

他人にはこうは出来まい口答え  
肩組めぬ男が一人浮き上がり  
我が生きた道をナメクジ光らせる  
こんこんと頭打たれた釘が利き  
握ったら握り返して星月夜

今治市 矢野 佳雲

雨垂れが刻んでくれる持ち時間  
鍋底の丸みに馴れて来た暮らし  
お陽さまも味方ばかりはしてくれぬ  
ためらえばのはほとんどん遠くなる  
賞味期間がある仏壇のお菓子

米子市 林 荒介

老いたるか夜になったら眠くなる  
僕の哲学 妻がへんくつだと言った  
酔っぱらった鬼に握手をしてもらう  
シルバースーツで眠っている赤鬼青鬼  
蛸焼きを長女と食べている童話

竹原市 小島 蘭幸

人生七坂耐えた膝小僧が痛む  
旧き佳き時代は消えて街濁く  
バブル崩壊 働く足が二本ある  
莫迦になり切ればこんなな肚がへる  
地に還る刻 一碗の水なりき

岡山県 嘉数 兆代賀

顔色を読ませはしない厚化粧  
はらはらと落ちる涙を信じよう  
凶星さされいびつになってゆく笑い  
重い日と軽い日がある肩パット  
泣きにゆく海荒れきみの方がよい

大阪市 西出 楓楽

ナポレオンの辞書借りているあほなやつ  
東京駅岡山弁にふりかえる  
知恵つけたクロコがちらと見えている  
出土品仮説否定し肯定し  
すべり込みセーフばかりとかぎらない

豊中市 安藤 寿美子

米子市 林 瑞 枝

陽が昇る島を神秘なものにして  
生き較べ庭のつつじは百歳に

薄紅で装う姑と言う美学

モナリザも絵を出て初夏の野に踊れ

スポーツ欄真つ先に読む子が起きる

和歌山市 西山 幸

亡父母へ合わす両手を見直そう

ときどきは生年月日たしかめる

迷いながら凡人という靴を履き

逢う時は少し遅れて行くことに

うしろ姿から本心が見えてくる

富山市 舟 渡 杏 花

戒めをおいしく食べる真人間

ロールスロイス君に倅せられますか

いくつになっても男が墮ちる花浄土

旅好きで誘いにのらぬ西の旅

ブランドの靴音高し妻の乱

神戸市 中 村 ゆきをを

性懲りもなく恋をして夏祭り

お返事を差しあげますと断り状

初夏近しトンボメガネを掛けた姉

感動があったあの頃原節子

福音を授けるドア少しあけ

廿日市市 林 野 甦 光

条件が揃って金がまだ来ない  
拝金主義ひとり仲間をまた減らす

手直し論 次次山が立っている

丁寧な階段降りる負けいくさ

叩いたら埃おとこの意気地とか

京都市 都 倉 求 芽

第九条を鷲ぬまに育てている政府

転職のすすめ天職は死語となり

衛星中継 山の彼方に幸はなし

人形屋に凜々しい武者人形がおらぬ

違い棚 春の日長の置時計

大田市 藤 田 軒太楼

後輩の愚痴聞いてやるワンカツプ

湯豆腐に晩酌心から暖まる

生者必滅もう後がないあとがない

うるさ型来るぞと口へ指を当て

我を通す頑老年金に支えられ

今治市 越 智 一 水

初蝶を孫が見つけて孫と追う

叱られてまわりが見えぬ愚かさよ

耕せば土は人より温かい

欲すてて生命を土の上に置く

香をたいて乱れを忘れ世を忘れ

島根県 堀江正朗

奈良県 田中紀美代

夢は夢 文明文化も闇の僕  
雨続く昔の雨の音と聞き

爆音も平和な風の音に乗り

日没も勤から外れていく恐さ  
ぶつかった痛さ心の中にしむ

島根県 堀江芳子

巻頭を祝う目刺しで昼の酒

戦盲の楽しみキッチンさばれない

辛抱で通し来た道ぬくい道

こんなとき夫のひとこと頼りきり  
ワンマンは淋しがりやで純真で

鳥取県 新家完司

みどり色の天使が跳ねている五月

草に寝てうるさいほどの緑かな

つくづくと鏡を見ないようにする

美しい街だが僕の椅子はない

神さまも味方の数に入れておく

藤井寺市 吉岡美房

うれしいね今年はミニが流行りそう

蜷船動かず今日も雨になる

饒舌な波よお前も淋しいか

愛嬌のいいたんぼの紋首刑

衣食足り刃傷沙汰が多すぎる

鳴門から若布が着いて初夏となる

立ち直り速い息子の食いっぷり

気にくわぬ車が時々来る向い

天気図と同じ流れでいる夫婦

気遣いと間抜け具合の似た夫婦

鳥取県 松下たつみ

握りこぶしが弱気になった運命線

噂には強い女のサングラス

切り札をちゃんと持つてる高姿勢

大きい声好きでしているわけじゃない

七人の敵に見せたい光る靴

松江市 舟木与根一

齡聞いてもいい女の齡になる

お隣の嫁をほめてる嫁いびり

夫婦喧嘩だって三日坊主です

但し書きには拡大鏡が要る

漬け物が味気無いのも休肝日

松江市 柳楽鶴丸

中国にもブルーシャトーがありました

白髪ではありませんへアースタイルです

地球儀を回して何処にしようかな

他人から見ればおもしろい夫婦かも

エイズよりこわい女が一人いる

島根県 西村 早苗

笠岡市 松本 忠三

花時計もう約束は忘れよう  
蟬しぐれしきりここから裏通り  
玉手箱どこへ置こうか娘の迷い  
浴室でついうとうとと昼の雨  
深呼吸故郷をほめた風の味

美禰市 安平次 弘道

アンケートの数字がひとり歩きする  
罪深い女へ揺れる縄梯子  
編集の苦勞あとがきさりげなく  
日々好日 金のないのが玉に瑕  
ある挫折 人生論の白白し

松原市 玉置 重人

外聞はもう気にしないふたりの絵  
定期買う古希憐れまれ羨まれ  
礼節は知らぬが衣食足りすぎる  
息子にはまだ見せられぬ貸金庫  
パーマ屋で男のハサミ指名する

堺市 高橋 千万子

咲く花も散る花もあり日日新た  
今日からは給料もらう靴の音  
おしゃれも貯金もしたい初任給  
完全を望まずほんとの人間味  
人に惚れ人に捨てられひとり逝き

落選のダルマ片目をどうする気  
気位が高く田舎に向きません  
藪でいい見立て違いであって欲し  
どさくさに紛れて一泡吹かす気が  
何時になく鉄砲玉が帰ってる

東大阪市 森下 愛論

適量を知ってるママに見送られ  
反省は猿にまかせて飲んでます  
たわ言を言うため飲みにもまた出掛け  
チビチビと貯めてドカンと旅に出る  
ローカル線 田毎の月が浮いて見え

西宮市 奥田 みつ子

冒険も少しはしたい回遊魚  
賢兄愚弟 昔のままの柏餅  
嘘ついた顔に化粧がのつてこぬ  
欠点もたっぷり享けた子の笑顔  
風薫る眩暈も熱も飛んで行け

柳井市 弘津 柳慶

均等法 男の方がすねている  
三十三年忌 孫に曾孫賑やかに  
ロケットもたまには言う事に反逆し  
マスコミに前夜の事をつつかれる  
受話器へ軽く会釈して切られ

倉敷市 小野 克枝

弘前市 真喜内 實

約束にいつも遅れる古き友

どしや降りへ無口な父の傘が開く

企みを捨てたてのひら陽にかざす

おふくろの心に遠く石を蹴る

辛抱と言う白い花赤い花

鳥取県 土橋 螢

愛別離苦の抜け穴を掘っている

すこしエッチなお話に耳を貸す

生臭い財布が五時を待ちぼうけ

良心を磨いた春の芝みどり

褒め役を左右うしろに従えて

名古屋 越村 枯梢

かくしカメラ意識している世辞笑い

どうせ嘘 日記は書いたことがない

狙われるいのちも金も持っていない

そう言えば福沢諭吉は他人だった

米櫃の底覗いても覗いても

西宮市 林 はつ絵

子へ譲る思想の今も揺れている

ライバルも真つ赤な傘を干している

置き去りにされそうしやんと背を伸ばす

三面鏡で今日の戦を練っている

今日の涙もやがて化石となるだろう

朝日出て春と耕土が生き返る

逃げるから追いかけてきて好きになる

後ろ掌を腰に組むから老いが急ぐ

朝日出ぬ間に苗心見て回る

病院で花咲かしてのおばあさん

弘前市 小寺 花峯

さあ誰か私に石を投げたまえ

手がかりが消えてしまった青春譜

満天の星から酒精誘い合う

可はないが不可もなかったほどの過去

風の色読み分けてから右をゆく

弘前市 村田 善保

眼を閉じて本の鼓動を聴いている

胸襟を開けば孤独風化する

感銘の書を読み一つ灯がともる

津軽三味 乳房二つが毬になる

終章にいまだ理想の絵が描けぬ

十和田市 斉藤 荔

先輩の自叙伝があり古本屋

ゆったりとお城眺める花筏

うつむきにまたうつむきに落椿

逆立ちも美学の形吊し花

貝割菜ほどの辛味を言うて行き

結婚の日から夫の株下がり

ビアホール男の座る席が無い

特売日 妻が勇者に見えてくる

飲むまでは百円さえも出し惜しみ

寝て起きてそしてまた寝る独り者

五所川原市 對馬 一閃

車座になると愉快なこけし達

口笛を吹くと愉快になるペダル

この町で終えるつもりの水が合い

ひとりでに頭が下がる奥の院

許すつもりで言いくいこともいう

五所川原市 加藤 彩人

ヤマセ吹く老父の猫背がひどくなる

うとまれる定めを抱いて杉の花

花ちりぬるを花は仏の意志で散る

たかが金と悟る和尚も金が好き

袈裟着ても鬼一匹をもてあまし

堺市 藤井 一二三

歎異抄生きる軌道を修正す

巨勢の椿が咲く泰吉の目が刺さる

風鐸の幽かに揺れて風光る

ドナルドキーンから近松をノートする

肚割って話してからの不仲なり

事勿れ主義が鬼門に念を押す

身勝手な打算術が無い

諦めるのは早いと右往左往する

譲られた席で年寄り顔をする

本音吐く口が段段重くなる

京都市 山本 規不風

可愛がり過ぎて後悔桜桃

受話器から上手な嘘が転げ出る

溜め息が出る土人形の濡れ場

ファッションの案内に姥桜が開く

泣き虫が舞台沸かしている喜劇

京都市 松川 芳子

忙しいほどの元気がありがたし

コーヒーの味も心の浮き沈み

躓いて一つ覚えた処世術

スキヤンダル風の噂は信じない

罪作る話は聞かぬ鬼あざみ

高槻市 川島 諷云児

学ぶことの難しさを知る広辞苑

一合で二人が足りるトロ口飯

運命と仲よく歩んでいる余生

銭金に換算されている善意

ぬるま湯に馴れて五官の錆が浮く

寝屋川市 江口 度

移転先物色して揚雲雀

埴輪発掘ジグソーパズルをはじめよう

内助の功がいつも詰まっている財布

匂いまで三面鏡に写らない

ずるい奴ずるい相手をすぐ見抜く

寝屋川市 稲葉冬葉

辛抱しいや息子ぐらいのセールスマン

地に足を空に真意を叫びます

悔っていた訳ではないが理に適う

三角の土地を耕すなす きゅうり

梅雨の晴れ間に回覧板が届けられ

寝屋川市 柴田英壬子

新茶入れころころ思い出し笑い

バラ一輪足して仏壇華やけり

そもそもは買彼られていたのです

さまざまな岐路へ鶯鳴くことも

道頓堀錦紗のたもと抱いた灯よ

和歌山市 堀端三男

掘り下げて話せば他人に疵が付く

ホールインワンのお裾分けなら遠慮せぬ

波かぶる覚悟が出来て気が軽い

自分に合った穴はとつくに掘ってある

作る人の心に添って花は咲く

和歌山市 福本英子

仲直り上手にします浪費癖

ジャスミンもバラも匂わず花粉症

春ごとに重い独りの芝刈機

日向ぼこ隣に母がいてくれる

バスの中からも拝める父の墓

和歌山市 内芝登志代

心棒となつてバランス母がとる

コロツケが十八番でまたコロツケ

割烹着つけると主婦の顔となる

好調な出足へ取らぬ皮算用

遅刻癖いつも上座にすわらされ

和歌山市 牛尾緑良

ひとまわりすると椅子からおろされる

かくれんぼ私の影を足元に

斜線ひく命が他愛なく消える

それぞれの年齢で聞いているわらべ唄

人間の条件 愛なら持っている

和歌山市 松原寿子

胸に描くドラマを回す風ぐるま

渦越えて波の蒼さに嘘はない

受話器おき熱い言葉がにくくなり

納得の胸をかすめて熱い私語

捻子いっぱい巻いて切り札葬ろう

和歌山市 桜井千秀

ジンスクスに足止めされて動けない  
胡散臭くて愛想笑いが気に障る

巻き添えになりそう回れ右をする

全身の力を抜くと言われても

以心伝心嫌いな人に嫌われる

和歌山市 木本朱夏

偶然とみせて仕組んだ恋の罫

花の名を教えなくなるひとがいる

一線を守るほんとに好きだから

マタイ伝 今夜のわたし裁かれる

逢う魔が時と言う美しい日本語

和歌山市 内田結実

想うてはならぬひと恋う雨しづく

あなたしか見えぬ眼鏡をかけている

子に孫に包まれ何故に満たされぬ

贅沢な愚痴きかされるさむい耳

わたくしを探すひとりの旅支度

和歌山市 細川稚代

会える日は雨ときめてる雨女

もう少し大人になろう桜もち

その余韻未ださめやらぬ浜の風

胸ツンと矢車草が咲き始め

頼まれた日から味方にされていた

和歌山市 山川克子

塞翁が馬を信じて闇に立つ  
言い知れぬ体験積んできた無口

横着もここまで電動ハブラシだ

せつかくの慰安旅行で聞いたこと

結局は自分の体ですからね

和歌山県 寺田裕美

村のため大勢産めと励まされ

タンポポの冠毛にひそむ童歌

大切にしまつて探すおおさわぎ

ツアアウトからの男が試される

田植機を畔で待つてるよい話

和歌山市 福井桂香

紫陽花やもう一年も半ばです

標的へきりきり弓をひきしぼる

緊張をほぐしてくれたラムネ菓子

脇役のあなたやさしい顔が出来

付け焼刃だつて磨いてやりましょう

和歌山市 田中輝子

避けて通れぬ悲しみがあり花暦

沈黙を守る寂しい戦する

群衆の中の一人が花粉症

古帽子むかしのドラマ離さない

味方の手を時折のがれ深呼吸

和歌山市 山田高夫

死ぬよりはましだと思ふことにする  
散髪屋もし狂ったらどないしよう

膝枕 男の兎戯が抜け切れぬ

フィニッシュの着地にあつた水溜り

手を組んでみたら疫病神だつた

和歌山市 青枝鉄治

この恋は実らぬとみた花時計

公園で求人欄がよく読まれ

ことわざも織りませ艶のある法話

落ちこぼれがすべて仕切つた村おこし

腹の児もいっしょに聞いている誓詞

米子市 小西雄々

僕と上司の間に一つ句読点

淋しい指で拾い集めて来た絆

ギャンブルを卒業させぬ友がいる

贈られた菓子不值踏みを妻とする

デートコースいつもの橋で引き返す

米子市 石垣花子

花野にも仕掛けてあつた落し穴

野から野へ客をおろして縄電車

バラの庭 女主のいい好み

二匹目の泥鰌探しに通うてる

洗濯もご飯もセツトしてしゃべり

米子市 青戸田鶴

さつき藤あやめ あじさい 花暦  
筋書きにない事ばかりつきつきと  
軌道修正ばかりしている兄の靴

なに着ても五月の緑には負ける

いい季節なのに友達病んでいる

米子市 野坂なみ

実印をお守りにして空の旅

背筋伸ばして毎日すわる只座る

仏壇の横で夕餉を食べている

そして今一人芝居のむなしさよ

出直しの墨が匂って濃くなる

米子市 菅井とも子

虫食いの柱が古寺を建て直し(安来 清水寺)

勉強をしたら遊べと母が言う

かくれんぼこのまま石になりそうで

机からもらった恩は返せない

人並に反抗もする娘に育ち

米子市 田中亜弥

童話から入り文学強くなる

通いつづけ価値観だけをつかみとる

虚しいが母の陽気に救われる

夫婦の乱なだめすかして夕茜

双方がずるくて話まとまらぬ

米子市 寺 沢 みどり

文学を追って道草摘んでいる  
余震にも怯えたらしい箱のずれ  
花冷えにまだ冬物が畳めない  
漬物の石が日毎に重くなる  
謎めいた言葉素直に受けておく

米子市 政 岡 日枝子

ポット洗って今夜の会話入れ替える  
くすかごに溜まる花の計 他人の計  
愛醒めて省く言葉が多くなる  
少し背が高いばかりに叩かれる  
負け犬を侮るカラスの軍団

米子市 澤 田 千 春

浜は絵を自由自在に変えてゆく  
吉報に細胞が皆立ちあがる  
傘の中 皆味方と思っまい  
縄電車浜でしばらく海を見る  
身の上を語り合ってる庭の石

米子市 新 正 子

ポーナスは知らない妻の手内職  
死に神を追い抜いちやった交差点  
いざの時以外はじやまな大太鼓  
目を伏せて反省してるひざ小僧  
役人にしたい太郎を塾にやる

米子市 金 山 夕 子

宇野千代の寿命めざして潔し  
乱れでしようか寝ころんでいるだけです  
B型でためらうことが多すぎる  
ひとり言なまむぎなまごめなまたまご  
プラスアルファ女としても生きる

米子市 茂 理 高 代

いい事があり星を見る目も潤む  
菜の花が廃屋でひそと種になる  
妖精か秘密を抱いた白牡丹  
同居して米よりパンが好きになる  
さよならはしたくはないが運命なら

米子市 中 井 ゆ き

七十歳未だ友情にあるジェラシー  
エンゼルが宿る遊んだいい寝顔  
ログハウス建ってモダンな山になる  
文学の余情大事に生きている  
分校のプランコ遠い子を探す

米子市 白 根 ふ み

依存心 別の自分の甘えぐせ  
妹が歩幅ゆるめる旅の中  
落慶寺 誘導旗が高ぶって  
入園児 次第に親を遠くする  
薫風に残り時間を気にとめぬ

米子市 光井玲子

母老いてどつと崩れる防波堤  
針箱がわたしのいくさ知りつくす  
四十を越えた息子をまだ案じ  
通いなれた道にもあつた落し穴  
時々は浜の無口にうちあける

唐津市 田口虹汀

旅人にされてバックは吉野ヶ里  
横に這う謂を蟹に聞いてみる  
蟹は月僕は神経痛で瘦せ  
良い柄だ母の晴着で出来た夜具  
思い出は臉の上と下に在る

唐津市 久保正敏

新緑に雨はロマンの化粧水  
オーブンにして企みを悟らせず  
そよ風の初蝶空に段をつけ  
蹴り癖の馬と比べる女癖  
すぐ溶ける雪も女も怖いもの

唐津市 仁部四部

連休は朝寝朝酒貯金帳  
再びはキグチコヘイに塗らぬスミ  
連れてきた彼女が先に決意述べ  
一生は長いぞ米は貸しておけ  
第一の趣味は読書と反り返り

唐津市 浜本義美

絵唐津に注がれ新茶の香が匂い  
旅好きの友に土産の借りが増え  
五月晴 庭の十葉芽が揃い  
一生がこのまま続く葉漬け  
風は春ボタン一つをかけ違い

唐津市 浜本ちよ

横道を歩く道草たのしいな  
三食をあなた任せの旅うれし  
もよう替えしてもわたしの狭い部屋  
グルメ狂そして肥満に泣く哀れ  
罪なこと軽口叩いてもめさせる

唐津市 筒井朴竜

日出ずる瑞穂の国へ米輸入  
風流を好むご仁と馬が合い  
見逃せぬ魚群はるかに魚見台  
逸脱より先ずスランプに体当り  
七山峡木霊は観音滝飛沫

大和高田市 岸本豊平次

干支からは相性悪い共白髪  
味方にも敵にもならぬ婿の知恵  
老後のこと話さないまま脳梗塞  
隣の子徹夜か消すのを忘れたか  
武器担う少年剣士に会う柳生

西宮市 門谷 たず子

虚と実のはざまで情け抱いている  
行間のまごころを読む愛を読む

故里に素足で渡る橋がある

曲線をたどると母の乳房かな

いく色を重ねても出ぬ亡母の彩

姫路市 人見 翠 記

四阿屋に憩えば藤の香ぞ渡る

連休でファミリー首都圏脱出す

クラス会痴呆症の兆見える友が居る

ディートリヒ偲んで夜通し歌流る

伴せは一人で旅のできるわれ

箕面市 坪田 紅葉

二人ならどんなにいいと後家は言う

連休に振り回されてる親の顔

瀬戸小島 人が住んでる煙たつ

絵心をふるいたたせる花みずぎ

学識はあるけどどこかぬけた人

高石市 浅野 房子

ミステリー読んで疑い深い妻

むなしさは拒否反応の出来ぬ妻

たつぷりと愛しています肥満猫

乱気流 妻のペースに乗せられる

共白髪まだお互いに謎がある

寝屋川市 岸野 あやめ

究極のグルメは妻の旬の味

食通を気取ってマナーわるい人

おばあちゃんと呼ばれた店でもう買わぬ

姉の忌の頃は卵の花くたしかな

受験パス合宿プランの五月晴れ

宝塚市 丸山 よし津

キャッシュユカード妻の虚栄を知っている

知恵の輪が解けると誰も振り向かぬ

米寿なお明日の講義の下調べ

カルチャーで再婚同士結ばれる

可哀相と言われたくない車椅子

八尾市 宮西 弥生

辰子姫あれから少女のままにいます(東北の旅 5句)

八甲田 後藤軍曹の仁王立ち

奥入瀬に興じてタイムスリップす

水芭蕉 今日幸福ありがとう

山びこも八幡平は雪屏風

八尾市 宮崎 シマ子

おでん屋へたまには妻も連れてゆく

この前も逢えなかったと花時計

お誘いが多いバラにもあやめにも

一人で居ると極楽になる小部屋

桑の葉が光る春蚕が肥りだす

八尾市 山下 美津留

乱れ打ちあばれ太鼓にあるリズム  
老母の耳聞えなんたり聞えたり  
米糠をたつぷり飲ませ牛の市  
お神楽の鈴で清めて新夫婦  
温かい心伝わる新茶着く

八尾市 古川 覚然坊

日々佗しい生活に天命待つ孤老  
横文字が殖えて政治がおろそかに  
不仕合せ交番交代事件起き  
新人類 親の希望の逆を往く  
程々に勤も鈍って夫婦和し

八尾市 高杉 千歩

放浪もここまでできたかバスポート  
線一本切れたか素直になつた鬼  
政権を握る手袋白すぎる  
フィルム三本 孫と三日を輝いて  
降るほどの星と話したひとり言

八尾市 鷺見 章

休日は唯々諸々に妻の使徒  
慇懃に値踏されてるチェックイン  
タイガース声を囁らした父帰る  
父からの電話飯場も雨らしい  
ジョギングのコース ピアノが洩れる窓

尼崎市 春城 武庫坊

七月の陽射し男の貌作る  
終電車ぎつしり思案詰め込んで  
税金の無駄の標本 歩道橋  
ポケットのメモは昨日のことばかり  
ばらばらの知恵を集めて老いを生き

尼崎市 春城 年代

明朝も七時を打ってくれますか  
不確かなあしたそれでも虹を描く  
母の日の老母にまごころだけあげる  
句会から戻った胸が晴れやらぬ  
美容室で問題になる葬式料

尼崎市 奥山 美智子

天の川言えぬ思いを抱いている  
寺の鐘 裏も表もなく響く  
鍵つけた子供の部屋が飢えている  
土地長者 城は藁葺き屋根のまま  
世にうとくきれいな泡を吐く金魚

尼崎市 田中 薫

幕切れはいろは送りに決めてある  
カタカナがあふれて辞書を嘲笑う  
大根の葉よ時の流れを嘆くまい  
本棚のマルクス誰が抜いたのか  
知恵の輪がもつれてからの一人旅

羽曳野市 田 中 透 太

一円のストレス溜る小銭入れ  
薬よりもつと歩けと処方箋

肩書で飲んだお酒は胃にもたれ  
切れ味がにぶり妻にサーブ権

連休を足止めにした計が届く

羽曳野市 榎 本 吐 来

連休もチャンネル権は妻にあり

チャンネル追う妻のセンスが見直され

いずれまた会いましょうやと下手な世辞

シナリオの前半にあるすれ違い

算盤をばっちり弾いている笑顔

羽曳野市 吉 川 寿 美

紙コップぐらいの思想で生きている

荒縄が亡母の形で灰になる

親友からの痛い言葉を裏返す

母の日に母の汗した豆御飯

豆のつる思案が果てぬ次女三女

姫路市 大 原 葉 香

血の濃さで香奠の額迷ってる

午前様と様付けにするからつけ上がる

みの虫の耐える孤独は本ものだ

ブラカード烏合の衆の盾となる

ゼッケンの別にスパイが一人いる

姫路市 丁 坪 サワ子

炎えた日の憶いを抱いて黄昏る

知恵袋の綻び知らず老いてゆく

箭寿司木の芽一葉が色香添え

不器用で連休の波に乗り遅れ

染みついた垢がとれない令夫人

姫路市 中 塚 遊 峰

曖昧な心でゆれる神経症

沙羅双樹たったひと日に命かけ

にっこりと罨にはまっているゆとり

日めくりが飛んで行くよな古希峠

義理の仲きれいに生活す大正っ子

奈良市 天 正 千 梢

愛読書中のひとつは時刻表

にぎにぎし社交場となる露天風呂

乙女盛り戦勝信じた心意気

政治屋も小粒になってゆれにゆれ

足跡はハバロフスクに残した酒の味

奈良県 長 谷 川 春 蘭

春愁かイニシャルだけの伝言板

葉桜の影ちらつきて辞書を引く

母の日に明治の母の歳かぞえ

花みちて心ひもじき夕まぐれ

天と地をつなぐ絆の雲猛る

香川県 松村 迷観子

乱気流エアポケットにある命  
短きと思えど長き一生よ  
お百度の石が願いをみとどける  
天気予報通りの雨に濡れてくる  
気くばりの中の倅せだつてある

香川県 木村 明人

自画像に笑顔を一寸加筆する  
栄えゆく地球も少し疲れてる  
ある打算コメて深ぶかお辞儀する  
初孫はヒナでも鯉でもご自由に  
栄転の花束一寸トゲがある

香川県 成重 放任

ママだつて週休二日はほしいのよ  
老夫婦同じ話をくり返し  
信仰をよそにレジャーの寺詣り  
カアチャンを避けて通ろう低気圧  
忘れぬよう結んだ指を忘れおり

香川県 永峰 伽名子

春風が誘いに来たよ手をつなごう  
バックミラーの角度少々気にかか  
さりげなく粧う年輪のいい感度  
若死にと言われた私が老いの坂  
ブライドはとつくに捨てた春炬燵

岸和田市 福浦 勝晴

アドリブで派手な諍いする夫婦  
みな褒めるからほめておくピカソの画  
論争の武器に一杯ひっかける  
猫一ぴき舗道横切る夜の底  
けつたいなカッブル素うどん食べている

岸和田市 植山 武助

長男は何時も利口な顔でいる  
幸か不幸か生命保険満期来る  
メダルでもくれそう納税ランク表  
忙しい人を羨ましいとも思う  
この野郎と思う男と馬が合い

岸和田市 古野 ひで

意地通す老いには深いわけがあり  
わきにいて微笑忘れぬ霞草  
雨上り山は大きく深呼吸  
区別などあるわけがない母の愛  
一期一会人を信じるこゝ悟り

岸和田市 清野 こう

人の心の優しさに触れ草花展  
筈をどざりと貫いうろたえる  
蔵王山はるかにのぞみ里帰り  
足腰の痛み妹達も齢  
河鹿鳴く声聞きながら山の路

岸和田市 原 さよ子

満開へコースを変えた帰り道  
ごまかして何か気まずいものになれ  
口べたの誠意へ好感湧いてくる  
快く食べ寝て瘦せる話する  
何気ない孫の仕草に通うもの

岸和田市 高須賀 金太

梅雨晴れの緑が痛い夜勤明け  
建て込んで燕すいすいともゆかず  
新参を怒鳴りたいけど我慢する  
無気力を丸くならしたと勘違い

岸和田市 岩 佐 ダン吉

ふわふわとタンポポの旅つつましい  
歩幅よんで盲導犬のやさしい目  
急所さけた母のパンチが効いてくる  
執刀の医師にもきつとある祈り  
思い切り言うて淋しくなってくる

岸和田市 芳 地 狸 村

遠景に大和三山浮かぶ道 (葛城古道)  
葛城の山背負っているお庭 (極楽寺)  
善悪を一言で言いわけする神 (一言主神社)  
年金を妻のプランで生かしてる  
あれこれと思案の末にうどん食べ

出雲市 園 山 多賀子

お人柄そのままの句碑除幕式  
幸せをこぼしてならぬ返し針  
春愁に死角に届かぬ矢を番え  
一石を投じ波紋の行方追う  
事勿れ主義も身につき皺刻む

出雲市 吉 岡 きみえ

枇杷の実が熟れたに記憶もどらない  
トンネルを抜けてあなたと逢う時間  
続々編まだまだわたし主役です  
鍵束をガチャガチャ忍ぶ仲なのに  
ほんわかほんわかジャガ芋芽がのびる

出雲市 金 村 青 湖

里帰り里の言葉になる三日  
沖繩の黒い二十に触れて見る  
ひと彩で素朴に老いて来た夫婦  
こんなのが幸せでしょう歩揃え  
残照の余情に負けた老いの愚痴

出雲市 板 垣 夢 酔

俺よりもハンサムかとはうぬぼれな  
パスポート持って忙しい日本蜂  
子雀に猫が催眠術をかけ  
仏様菜はなくとも湯気のめし  
おいしいと汗が言わせた握りめし

出雲市 久谷 まこと

世話好きが一つよけいにネジを巻く  
セールの言葉巧みにクモの糸  
便利さが老いの動きを疎くする  
せき払い一度はみんな振り向かせ  
検算をして電卓にすねられる

出雲市 竹治 ちかし

親馬鹿と言われて馬鹿に徹しきる  
傷跡にふれず夫婦の城守る  
恋人の頃は素直な妻でした  
調子良い言葉を酒が連れて来る  
子の病 親の予定など聞かず

出雲市 小白金 房子

地下足袋で男同士のうまい酒  
山門を守る仁王の古わらじ  
石段を登りつめると神の声  
せり市の活気子牛の目が哀し  
そわそわと牛発情の期がめぐる

出雲市 石倉 芙佐子

雨垂の下で展開するドラマ  
息子の海にひたひた満つる潮  
パブリカの村の中での出会い  
そんな時ユダの目になる唐辛子  
美しいからくり箱の罠に堕ち

島根県 小砂 白汀

よたよたと辿り着いたり誕生日  
バックスに愛されすぎた花の下  
お角力の汗ハンカチなど要らぬ  
農民の汗をなめくじ知っている  
蟻の列ひと言ずつの合い言葉

島根県 榑原 秀子

聖五月 空の青さを友とする  
鯉のぼり見上げる口を笑われる  
パラソルの派手母の日の宅急便  
母の日がなかった亡母へ灯をあげる  
すばらしい落日息を止めてみる

島根県 榑 みどり

留守番も馴れて明るい孫電話  
散る桜病床の心静かなり  
退院の日延べに天井高くなる  
病床で足踏みしてる虹の橋  
うぐいすの声欲望がわいてくる

島根県 松本文子

小さな傷小さなままでいてくれず  
欲すてた手に菜の花がよく似合い  
文学を語るとみんな若くなる  
送信機ばかり持っている男  
洒落た名を呼ぶと仔犬が飛んでくる

島根県 藤原鈴江

めくるめく女の性へ風みどり  
粧えばただいそいそと足かるい

枯れはせぬ未だ未だ見たい夢がある  
いつの日か心の底から笑いたし  
うとうとと散りゆく花の涅槃かな

島根県 佐々木芳正

牛に明けて牛のことばを知っている  
あけすけな鬼がわが家に二匹いて  
独生 独死 独去 独来 茜雲

同病のなじみをもらう待ち時間  
通天閣わいはなにわの顔だっせ

島根県 小田川智重子

母の日は忙しくて嬉しくて  
縁側でバードウオッチングと洒落ようか  
欠席のハガキが一番先に着き

足跡の大きき亡父の七回忌  
背の高さ同じになって仲良しに

竹原市 森井菁居

セールの自信に充ちた僕の影  
ああ故郷 母なる山の丸みかな  
気まぐれな太郎を待ってる砂時計

大学を出てこれからが正念場(次女)  
再会を固く信じている浜辺

竹原市 三宅不朽

よう来たなみんなお前の蓬餅  
鶏の声と朝粥ひさしぶり  
馬鈴薯の花地下水の彩を咲き  
塔を舞う鳩のかなたの月日かな  
おじいちゃんイタダキマスはと言われたり

風気ままその日その時貌を変え  
いつまでも助走して日が暮れる  
表札よお前も歳をとっている  
百歳になるまで歳は聞かないぞ  
お茶漬が食べたくなつた贅沢よ

竹原市 時弘一路

開店に産まれた孫は二十六  
飲めぬ酒 餅まで嫌いな損の質  
健康は希望が伸びて歳忘れ  
納得と許す心は別のもの  
好きな女 気ままでしょうるか遠い街

魔性なる姿で藤の花匂う  
吹き抜けるものあり菖蒲活かしている  
ささやいて星はいつでも味方です  
午前様自分の影にけつまずき  
大根の花も私も濡れて春

竹原市 岡本清水

竹原市 岩本笑子

竹原市 岩本笑子

竹原市 岩本笑子

竹原市 岩本笑子

竹原市 岩本笑子

竹原市 岩本笑子

竹原市 信本博子

まんじゅうの好きな男の言うお世辞  
投げキッス笑い話ですむ八十路

まだ燃えるものあり今朝の大きな陽  
逢えばすぐ別れを思う流れ雲

玄関でお多福の面付け替える

岡山県 二宗吟平

天勾踐 心を秘めてお茶を立て

不味流 茶に愛でられた高清水

水神に天下泰平祈願の碑

陸橋の足を支えて高清水

高清水 時の流れに逆らえず

岡山市 井上柳五郎

口不調法これも病気かながいなあ

老化へと手さぐり未知へ足さぐり

忘れたい過去抱いたままきょうも生き

偏見でいい子悪い子いろいろわけす

身の程を知りつつ懲りぬ尻尾ふり

岡山県 岩道博友

海へ来たたら昔を話そう友の事

島流しにされた気持で糸を垂れ

多趣味だが魚は捌けぬ愚痴を言う

コーヒーのお代り副題のドラマある

前後賞作ってほほ笑む場をもうけ

岡山県 山本玉恵

柿の花のつましき色や亡母恋し

白旗を揚げてまあるい母の城

ねそびれし耳に忘れぬ人の声

自由席でまだとびたがる羽づくろい

どじ踏んだ情けと知った今日の箸

岡山県 荻野 鮫虎狼

拳骨の届かぬ外に雑魚がいる

二十年ケチで通した椅子温い

濟みません一言女用が濟み

鮎を焼く炭を街まで買いに行き

ベレー帽ほんまの僕を取り戻し

岡山県 花田 たけ志

雑音が流れてこない島の春

恵方から見たい景色は島の蔭

汗しとど出せば浄土にかかる橋

あべこべに魚が食えば大騒ぎ

貝毒が追い討ちかけるさめ騒動

岡山県 小林 妻子

仏より先にビールが出してある

借金も添えて後継者に渡す

年金と独り善がりの仲のよさ

手前味噌だから自分史にこぼれ

神頼みついでに仏思い出す

岡山県 矢内 寿恵子

旅に来て一期一会のお茶の味  
美しいものを残して過疎すすむ  
定年という人生の使いすて  
昭和史の命の重さ軽さなど  
埋み火を燃やしてくれる風を待つ

岡山県 千原 理瑛

ワープロの文字に心は通わない  
切なさはつましき彩 野路菊よ  
自問自答 善意にとろう義理の仲  
バチプロの稼ぎを聞いて驚くな  
二十歳の企み水割り飲んでいる

鳥取市 両川 洋々

来るなら来い癌と四つに組んでやる  
電卓じゃはじき切れない恋一つ  
たかが女の嘘にヒクヒクしなさんな  
散りぎわの花は本音を語るまい  
憎しみのメニューヘトリカプトを入れる

鳥取県 林 露杖

咳一つしてから話す留守電話  
足腰の鍛練兼ねて蕨狩り  
漫然と起き漫然と飯を食い  
ハイレグの水着 女の夏が来た  
死は脳死 水着のライン気にかかる

鳥取県 土橋 はるお

コーヒーに上島さんがうるさいぞ  
養生所に毎日将棋さしにゆく  
降水確率一〇パーセントの鯉のぼり  
お隣と意見の合わぬ鯉のぼり  
パソコンで父を分析してみよう

鳥取県 江原 とみお

終ってみればいとも哀しき花遍路  
慰めを川をへだてて聞いている  
新緑にとり囲まれている無職  
少し遠くに人間をおいてみる  
束ねられて百合は己をうしないぬ

鳥取県 羽津川 公乃

船を売る話に夕陽赤く炎え  
散る花に有情無情の灯が揺れる  
ピンはねの消費税にも慣らされた  
軽くとも重い財布を任される  
無遅刻が自慢 楷書のような父

鳥取県 津村 八重子

活づくり磯の香りも盛りそえる  
竜巻きのようにさわいで孫は去に  
髪すいて仏の前に正座する  
ふる里を出てから心も強くなる  
時々知恵に充電したくなる

鳥取市 小谷 美つ千

意気地なしいつまで星を見ている気

よく喋る唇だから噛んでやる

八方美人すこし欲張り過ぎないか

脱皮して今年の夏の肌になる

誘惑に負けて女になりましようか

広島県 田村 新造

漂った死臭が部屋を抜け切らぬ雷のシベリア

アンペラを敷いてさむざむ捕虜の部屋

意識朦朧誰かが氷載せてくれ

痩せこけた顔が哀しい水鏡

病む戦友へ粟を盗みに行く決死

広島県 藤 解 静 風

おだやかな瀬戸を見おろす母の墓

除虫菊満開 島に子供が溢れていた

野良着まで美しかった亡母なりき

おいくつと聞いてびっくりしてあげる

セクハラ後ボクにも思い当るフシ

堺市 黒田 真砂

春盛り衣替えした花時計

衣替えするたび想い出す亡母のまり

葉桜になれば待ってた毛虫達

一人になった時の淋しさ思っ間

五月晴れフル回転の洗濯機

堺市 柿花 紀美女

お隣の猫がうるさい独り者

独酌は気楽老妻よく食べる

空振りが多く五月雨よく続く

ドライブフラワー遠い日の空ふと思っ

夫には内緒にしとく今朝の夢

堺市 一瀬 福一

タクシーの昼寝窓から足を出す

貧乏の底の笑いは美しい

戸袋へ一枚ずつの朝がくる

どてっ腹に穴あけられて山眠る

ソプラノで唄うナースの労働歌

豊中市 田中 正坊

カーキ色 戦火は遠くなりにつけり

500色えんぴつボクの色がない

ゆたかさは街にあふれるゴミの山

浅知恵がすぐに答えを出したがる

信長忌 人生わずか五十年

豊中市 吉田 あずき

五月晴れ皆命ある美しさ

商魂に乗せられて来たカーネーション

万国旗つなぐ魔力は手品だけ

無人駅よりも淋しい改札機

参ったとなかなか言わぬ古ミシン

西条市 片上明水

疑うているのか小さい方を取る  
雑巾の数を増やして季が移る  
瓶に一輪差して隅まで春にする  
窓みんな開けると人が覗かない  
初夏だから初夏の速さの水ぐるま

大阪市 河井庸佑

意に添わぬ話乗らねばならぬ義理  
付き合いで買った馬券の穴が来る  
占いの吉をあまりに信じ過ぎ  
残り物やっぱり福は残ってず  
半信半疑儲け話へちよっと乗る

大阪市 本間満津子

優しさにもろい私の涙壺  
体当り天が味方をしてくれる  
口動くほどには頭働かず  
自分一人抜けても良いと皆思い  
ほれごらん怠けて居たらつけが来た

大阪市 神夏磯典子

暦にも嫌いな月あり梅雨末期  
うぬぼれのファッション溢れ初夏の街  
思いきりが悪くていつも冷蔵庫  
期待かける花への肥料ほどほどに  
菜の花や月の出待っているロマン

大阪市 津守柳伸

針千本 女の園の花嵐  
スピーチは即席がよい宴まえ  
生き甲斐は厨房にある定年後  
天然の鯉一気にお裾分け  
一泊の余韻ビデオを巻きかえす

大阪市 北勝美

匂う花絵筆に難しライラック  
鈴蘭が咲いてうれしい花便り  
あれが花 少年の目にねぎ坊主  
夏蜜柑こんなに甘い世の移り  
一行詩ジャンルの渦巻き狂わせる

大阪市 藤田頂留子

バックミュージック付と国道ぎわ住人  
渡りに舟そんな話はウソツぱち  
そうだろなの口ぶりさては読んでたな  
噴水を背にしてジャズのアマバンド  
賑やかに亡兄が戻って来た祭り

大阪市 大塚節子

不機嫌な母のむすびの塩加減  
桜時雨で卒寿の祖母を見送りぬ  
好き好きに曲がった胡瓜で何故悪い  
クラス会取り残された独り者  
苺ケーキ最前列に子供の日

大阪市 井上白峰

高知県 赤川菊野

浅学の視野を広げる趣味の会

完璧な築山よりも四季の庭

止り木のグラスに浮かぶ明日の彩

人ひとり許すと丸い月が出る

悪友が寝てる子起こす電話口

寡婦の名を返上したい遠花火

サングラス掛けて妥協の彩を撰る

ぼっくり寺婦りは医者へ寄ってくる

核心を衝けば本音が逃げていく

来る当てもないに裏木戸開けて待つ

大阪市 板東倫子

高知県 小澤幸泉

貸金庫さしずめ入れるものがない

長老の扉が開かぬ土曜午後

レンタルの子宮は神を畏れない

子ら二人 父母がたずねたように生き

老人の性を揶揄する評論家

五月晴れそんな言葉が泣いている

悪いけど病室辞してホッとする

さしかけた傘一本の共白髪

はじっこを歩けば犬がついてくる

画布に描くわが青春の赤と黒

大阪市 榊本落児

高知県 北川竹萌

猫の目に嫉妬あるのをしかと見た

教え子に手習いうけるガスバーナー

汗の染み父の帽子が捨てられぬ

五月晴れ窓にすっきり高知城

あなたの名 九官鳥に教えない

草引きの昨日が残る爪を切る

車椅子あなた信用しています

人参種に宿を貸すなと蒔いてます

老妻の味がはにかむ露のとう

八十の手習い夢は自由なり

大阪府 榎山隆

松山市 谷真風

点景へ残す中央公会堂

大黒柱といわれ父ちゃん機嫌よし

日本の匂いが焼ける五平餅

安心の安心がある甘藷を食う

人と人争う知恵のないはなし

秋刀魚がうまいどここのさんまか知らないが

約束を破る約束たんとある

おでんやの木の芽田楽食べたいなあ

幕引いた私は鳩になりすます

塗りかえて天井も壁も白々し

呉市 横田英詩

前席は馥郁としてシヤネルの香

とても素敵と言われる髭を生やそうか

瓢箪から駒隣席が縁となり

喋りすぎ失うものがあるだろに

蝸牛ととても付き合つてはおれず

宇部市 平田実男

もう少し買うのを待とう世界地図

根回しがとても上手な札の束

身の上話をたんと持つてる赤い爪

開発を嘆く民話と童謡と

檜山のここでもしてる子の自慢

羽咋市 三宅ろ亭

さりげなく素顔を見せておくもよし

明日に延ばす癖 父の代からか

流行歌に反発こちらは都々逸派

二律背反 意欲実行と一緒せず

文案の広場に踊る独創語

西宮市 西口いわゑ

知恵熱か時々熱が出て困る

缶ビール古い話で盛り上がる

れんげたんぼ小さな恋のものがたり

一服のお茶と昔の良き話

酒とろり浮世ゆっくりばら色に

西宮市 秋元てる

自慢するように姑のボケのさま

親孝行しやすいように少しボケ

うっかりと子のない友に孫自慢

靴運も男性運もなく独り

雨の日の玉砂利踏んで神に逢う

倉敷市 田辺灸六

また一本歯が減りまして名残酒

生きざまを曝して口を尖らせる

このままでよろしい欲は捨てました

駆引の下手な父さん無口です

草むらで聞く空缶の怨み節

倉敷市 井上富子

困った事にカロリー音痴の飯茶碗

年金の皿を彩る鉢野菜

浅はかな女が叩く計算機

返済に追いかけられて霊柩車

唐突な挙式ウェディングマタニティー

富田林市 松本今日子

友達も重さ軽さのある手紙

椅子の背にガウンそのままふた七日

豊かさの溢れるデパート手ぶらで出

母の日にはるばる遠く来た手紙

城石の一つ一つに人の知恵

富田林市 片岡 智恵子

ナイフとフォーク底い合いつつふたり老い  
生きていま人生二流三流に

カルテとは別にいのちを繋られる

山積みのゴミに豊かさ慣らされる

また一枚薄着へ芽吹く風という

吹田市 山本 希久子

桃の実が熟れて初心はもう忘れ

カラスもハトも都会の水に憧れる

二十一世紀の音がすかなり確かなり

結び目をまたも確かめたい女

ちよっとしたはずみ結び目が解ける

吹田市 茂見 よ志子

子育ての理想に燃えた日は遙か

核家族言うてやらねば義理を欠き

紳士物売場は穴場女子トイレ

塩漬のまま春へも浮かぬ株

この話言うた気もする途中から

守口市 羽原 静歩

路郎忌に見る河川敷の白い雲

万国旗何やらどこやらノイローゼ

ニッポン中 山車囃子の風が吹き

夾竹桃ゆっくり昼寝をしています

素うどんにチルチル ミチル満ちている

守口市 森川 まさお

見覚えのある方へ行く繁華街  
怠けたい日もあるようだ鯉織  
葱坊主昔話の他愛ない

義理固い姉妹の意見くい違う

折りを見て孝行する気になるらしい

神戸市 山口 美穂

木洩れ陽はうれしく仔犬もたわむれる

忙中閑 燕の空中ショーを見る

弔ばかり忙しく故郷の土を踏む

白衣をぬげばただのおばさん帰路急ぐ

謙遜と自慢で自慢話する

七尾市 松高 秀峰

政治家の仲間六十まだひよこ

損得を計算しない農に生き

スランプに投函ポスト変えて見る

カラス鳴くまた一人逝き掲示板

一生を鞆も持たず逝った父

藤井寺市 福元 みのる

負けたとは言わず黙って手を洗う

決意した日から感じる向い風

風雨いとわぬファンにプロならこたえなさい

トラファンの父に家族はジャイアンツ

愛されている時娘美しい

寝屋川市 堀江光子

クラーにない草木の匂う風

一葉のはがきに容態持ちなおし

愚痴いわぬ父の近頃白い髪

その辞書に敬語の項のない如く

譲ること知って平和な胡瓜もみ

河内長野市 井上喜醉

日本をモグラ叩きにする世界

平凡で人間模様を持つ夫婦

花活けて豊かな気分妻の午後

スーパードも散歩のコース万歩計

旅の駅もう酒好きが酔う話

茨木市 堀良江

フィフティフィフティだけど夫を立ててます

どうしてかいつも待たせてしまいます

口笛で赤い車を洗ってる

波風も今はなつかし古日記

窓の風四方のみどり集めて来

阪南市 坂口公子

羽衣のかくやあらんと芥子は散り

花みずき甘い乙女の恋の味

はからずも組んで分かったあたたかさ

笑顔して老母のお話聞いてます

組み紐のどれかが拗ねて渉らぬ

町田市 竹内紫鏘

着陸の樹々の流れに旅ごころ(欧州ツアー)

壁画仰ぐ老妻はその母に似て

孫の数 筆談で金使い切る

わが町のパスをイタリヤにて掬られ

日伊交歓 夜はフニクラの大合唱(カンツォーネの夜)

京都市 山海友熙

気移りを叱られているソファア

バルセロナへの切符がほしい神だのみ

いい事がありそう盆石の砂光る

亡姑の墓参に傷口の潮引いてゆく

プロポーズまでは頭を下げない娘

海南市 三宅保州

焦点を合わすと視野が狭くなる

もうひとりの俺がいちばん気にくわぬ

上向いて歩こう涙落ちるから

多情多恨ためらい傷が燃えている

唐辛子のように主張をしてみたい

東大阪市 崎山美子

生活のマニユアルがある父の背な

マイホームの値崩れ許さぬむしろ旗

百歳の笑顔に茶の間はげまされ

何歳になっても姉は姉である

虫干しに亡母の匂いの風やさし

福岡県 横地正好

平等主義村の区長も回り番  
上り坂単身赴任に耐えさせられ  
裏の裏知った刑事の調室  
ライバルは鎧をつけていなかった  
仏壇の造花も亡母の耐える性

玉野市 小谷仙山

先のさき読んでよまれて囲碁の友  
農薬がどうのこうのよキリギリス  
一步先あるいて緑風の愚痴を聞く  
平凡と言う幸せ庭の草をとる  
底辺に生きるボーフラの浮きしずみ

箕面市 岩津ようじ

阪神が勝ち輪転機忙しい  
医者にもろたクスリを全部飲む勇氣  
思ひよう老残枯淡紙一重  
望楼の上から花見消防署  
いうことはない嫁ながら酒豪なり

倉吉市 渡辺菩句

フランスに行かずフランス文学が好き  
まもなく来るぞ女御輿の音がする  
風が構曳してるからさくら散る  
天地曼陀羅ころ優雅にくらしたい  
からくりがあるからチューリップひらき

伊丹市 山崎君子

城自慢 大阪弁と名古屋弁  
朝顔も南瓜も双葉初夏の風  
五月晴あなたの風を抱いている  
化粧品夫の分も買っている  
チューリップ燃えないままに散ってゆく

和泉市 西岡洛醉

万歩計 年金の朝を友として  
擦れ違う匂いは妻と同じもの  
髭を剃る日課が続く幸せよ  
日曜も休めぬから天職と言う  
大阪の女で強情が取得とは

有田市 松井かなめ

口調まで夫に似た子謀反する  
父母の愛深くえにしは薄い子よ  
遠慮がち二泊三日の旅に出る  
一願寺どれを頼むか迷ってる  
彼岸参り兄嫁もちと腰曲がり

今治市 野村京子

肩書きを外してからの肩の冷え  
雑草って母の匂いがするんだね  
夏帽子顔の小じわをよくかくす  
もう年かな道の段差へけつまずく  
挫折感さらさらなくて蘭の花

静岡市 蘭 田 猷 杏

退院をしたらと農のプラン立て

頂上を極めるまでの坂がある

船を降りやっぱり陸で安堵する

病気より人まで診れる医者が居る

富士宮市 渥 美 弧 秀

病む妻の寝息の高く安堵する

富士仰ぐ体操一二梅雨明ける

逆境の友の便りが胸に沁み

喜寿からは亀の歩みがよい暮し

八尾市 片 上 英 一

都市砂漠 ガラスの城へ通う蟻

ハイヒール外反母趾に気をつけて

音楽は苦手でしたと言う演歌

縄文杉樹齡一〇〇〇年以下小杉

八尾市 吉 村 一 風

おしゃべりも過ぎると小さく見えてくる

生き方はうまくはないが目がきれい

熱い茶をすすり考え変えてみる

仏像に似てシンクロの花開く

吹田市 栗 谷 春 子

とびつきりいい名の地酒おみやげに

三月の椿たわわに閑谷校

もうあがる雨です珈琲館の午後

五月ですその溜息は似合わない

吹田市 井 上 照 子

昼寝など夫はきびしい二度の職

ブライドはまだ捨てられぬ爪を切る

繋がれたジャンバルジャンにある論理

辛いから日記は真白書けずいる

吹田市 瀬 戸 まさよ

先生と呼ばれたくない元教師

つまりけば気をつけなさい年のせい

和服美に百万の値もたじろがず

セクハラに鈍いお人の多いこと

十和田市 阿 部 進

親離れしない夫に泣かされる

こちこちで食べる馳走に味がない

口につぐ達者な足を持つている

頑固爺駄目は駄目だとゆずらない

仙台市 川 村 映 輝

心配の種は酒好き車好き

暖冬異変春は寒くて雨しきり

贅沢な食物栄養不良にし

水虫は夏を忘れずやってくる

貝塚市 行 天 千 代

あたらしく畳替えして心満つ

帰省した孫とたのしく買いに行く

嫁二人カーネーションやお寿司来る

母の日も母それなりに用があり

うら若きカップルカップル海遊館  
桜咲く選抜賛歌甲子園  
西宮市 瀬尾 六郎太

時空超えアンデスふもとエルドラド(黄金郷)  
しもくれんランブ逆さま春を呼び

宝塚市 吉田 笑女

四十年仕事一途な亡夫の靴  
考えの甘い息子へ釘をさす  
狭くとも花を育てる庭がある  
不機嫌な母へ取りつく島もない

岡山市 池田 半仙

年金に痛い冠婚葬祭費  
臍痛が一寸ためらう水溜り  
連休のプラン承知をせぬ財布  
雑学の蓄積万事ためらわず

河内長野市 植村 喜代

ほしいほしい何でもほしい物溢れ  
少し若いと強いことも言い切れる  
信じられる杖が今にほしくなる  
チューリップ背伸びしすぎて落ちつかず

高槻市 竹内 花代子

四五日は留守をしますと春苺  
厨房に去年のカレンダーの献立表  
死ぬ思い乗ったリフトの恐怖症  
ばあちゃんに上げてが食べれず病んでいる

商魂が育てた父母の日こどもの日  
胎内で親孝行をした赤子  
和泉市 岡井 やすお

熊楠も所詮人の子恋の歌  
欠陥はみな下請けの所為にされ

唐津市 山口 高明

還元のセールへ夫も狩り出され  
血の絆一族みんな口閉ざす  
口の津の海で男の夢育つ  
鎌倉の夜風別れた妻想う

境港市 細木 歳栄

五月晴れ今日はみんなみな許しちゃう  
カア子二世またまた我が家にやって来た  
しゃべりたいそれでは秘密になりませぬ  
初めての秘密なんだか楽しくて

米子市 川上 より子

遙かにて内なるものよ子を宿す  
胎児十月 母を有神論者にす  
満天の星あすのスケジュールが決まる  
高齢化社会に君の花は咲く

島根県 石田 清泉

伝来の田圃が宅地に変身し  
増築がそろそろ隠居にする構え  
他人様の癌の話にお茶も冷え  
山椒を効かして筍膳に乗り

島根県 北川 民子

夕焼に帰る鴉の絵のごとし  
雪解けの古里恋し芽が育ち  
そんな時馬鹿になるのよと亡母の声  
点鐘にあくびも添える春の宵

島根県 高野 律子

陽だまりで猫の一日姑いとし  
仏壇を開けて仏に近くいる  
古里で心の窓を開けて来る  
家計簿の赤字にわたしの独り言

島根県 加本 義良

陽を浴びていのちを洗うにぎりめし  
バブル崩壊踊り疲れた影法師  
皺の数辻褄の合う星の数  
酸欠の鬱を溜めてる不整脈

島根県 石飛 水煙

母となり亡母の言葉が今わかる  
文字知らぬ母だが礼儀だけは持つ  
人生の花道開花もなく朽ちる  
自然界好きで都会捨てました

鳥取市 西原 艶子

追うてくる暮しに負けて紅ひかず  
米櫃を満たせぬ日にも本を買い  
哀しみを洗ってくれる詩もあり  
米を研ぐひととき母になり切つて

鳥取県 谷口 次男

言葉にも白髪混じって重みある  
正直で政治家の顔してません  
ボケ混じり大人になったと錯覚し  
本当か鏡の顔は俺なのか

鳥取市 岩原 喬水

敗戦のお粥に米が浮いていた  
心経で静かに余生過ごします  
作戦か妻の黙秘がまだ続く  
病棟の苦悩に連休などはない

鳥取市 春木 圭一郎

落ちこぼれ俺にびつたり当てはまる  
身辺を洗えば誰もポロが出る  
新聞があつて早起き苦にならぬ  
憎いのに許し愛だと言ひ聞かす

鳥取県 石尾 かつ乃

郷愁を誘う便りにつつじ咲く  
下戸同士負けてはならぬ千鳥足  
趣味いくつこなすファイトの朝の靴  
ハンカチを洗う昨日のあの涙

鳥取市 美田 旋風

ネクタイを外せば自分らしくなる  
丸い石ばかり並んでおもしろない  
総論だ目くじら立てることはない  
肩書きがつくと他人の顔になる

鳥取県 乾 喜与志

嘆れた声張り上げて敬老会  
若奥様のお酌を受けて敬老会  
向日葵の陽に向くままの成長期  
虜囚の身の窓に北極星みてた

鳥取県 上田 俊路

欲得を捨てて愚直な首洗う  
無宗教 太陽だけは信じてる  
陽の当る坂道愛を支え合う  
人生は予定どおりでないドラマ

鳥取市 前田 一枝

若い事故逝く順番を狂わせる  
困り事頼みに行つて愚痴もらい  
五月晴れ万歩計にも弾みつく  
洗わずに置こう握つた手の温み

鳥取県 西川 和子

沈没をしそうな船に乗り合わせ  
定休日今日のはうるさい人が留守  
細ぼそと囲いの中に生きている  
孫二人ばあちゃん手抜きうまくなり

鳥取市 武田 帆雀

飯がよけい食えてよけい仕事する  
筈の器量は土の底にある  
大祖父の年輪がある杉を切る  
山峡のお別れ再度水を飲む

和歌山県 西口 忠雄

鉛筆の芯がまあるくなつた恋  
これからは無職の風を抱く余生  
バス停を病院前にする福祉  
妻までも大屋政子の真似をする

和歌山県 岩崎 瑞穂

春眠を無言電話に邪魔される  
逆転打 春風にのり柵越える  
鬼やらい神妙にする父も老い  
程々のエッチ罪のない和を作る

和歌山県 北山 好笑

母さんとは聞くが父さんとは聞かぬ  
煮え切らぬ気心裏が読めてくる  
口だけは達者でこまる跡始末  
蟻の列追いつ越す蟻よなせいそぐ

岸和田市 三輪 通彦

非難して援助求めてくる矛盾  
逃れ得ぬ地球へフロン酸性雨  
里帰りした娘に弾む市場籠  
お中元義理と思惑詰め合わせ

大阪市 北山 悟郎

靖国の桜に涙戦友の会（四月二日靖国神社桜満開）  
追銭は焼石に水と知りながら  
母親に嘘一杯並べ置き土産  
戦傷が障害者の枠に入れられる

大阪市 中西 兼治郎

必勝と書いても勝てぬ選挙戦  
親戚を止り木にした子の連休  
娯楽室完備ピンポン台一つ  
あつてないルール プロレス盛り上げる

大阪市 渡部 さと美

はるか息子の住む地をおもう時差を繰り  
パーマ屋にスズメの巣にされこもりきり  
みそみやげもらい同郷人と知り  
家一軒こわすと広い空がある

大阪市 寺井 東雲

十年先医者が頼みにサービス券  
バッグと服買い続けてる妻怖い  
鯉のぼり隣べランダ出入りする  
電車の中見て見ぬ振りをした時

大阪市 上田 柳影

どて焼の味噌の匂いの新世界  
キャンセルしててよかった遭難機  
定退の財布しつかり妻握る  
藁かぶり牡丹おまえのニユールック

大阪市 岡田 ふみ

笑い声いっぱい長男嫁きまる  
猫までがそわそわしてる結納日  
留袖に老母が口出す鯨尺  
好きやねん大阪みんな良い人で

大阪府 富岡 温子  
出てくるといらいらしたす故郷の母  
陽気げに接してガンの母送る

先輩の布石が生きる過疎の街  
消化不良の文化に自分見失う

大阪府 稲本 凡子

押入れがすつきり未練みな捨てて  
一日が長いと思たことがない  
晴耕雨読無理せぬように生きて  
時どきは忘れたふりも出来る歳

大阪府 町田 達子

幻の貴人追うてる通り雨  
古疵を許せば悠悠空の鯉  
ダイートリヒ死す幻のコンサート  
ジューンプライド真珠の涙おいて発ち

出雲市 小玉 満江

急ぎ足むかでも用事あるらしい  
公開の出来ぬ手紙を持っている  
花も良し雪にも自慢の城がある  
先妻の子供が父とまだ呼ばぬ

出雲市 伊藤 寿美

古里の釣瓶の水が喉で鳴る  
恍惚の小さな老母を抱く重さ  
勲章と頑固が祖父の蔵にある  
波長の合わぬ新人類がいる隣

出雲市 島 祥庵

美しい嘘には神も許してる  
毎日の解答欄に母の顔  
ほんとうの涙に無口美しい  
頂点に立つといつも亡母がいる

寝屋川市 平松 かすみ

勲章も並べてのんき露天商  
公園でホカ弁食べて老い仲間  
黙ってる居眠りしてるよいお酒  
忘れてもジョークにみせて年の功

箕面市 椎江 清芳

割り勘の銚子の底に溜まる愚痴  
口下手も唄えば酔わす喉を持ち  
抱いた愛抱かれた愛も夢の中  
陽溜まりに話の好きな顔と顔

奈良市 米田 恭昌

茶碗むしの味ひきしめる柚子の自負  
姑としてまだ出る幕のある安堵  
古里に本家の眠るダムがある  
遊び方知らない父の五連休

尼崎市 住谷 石舟

隣まではなし筒抜け浜育ち  
他所の杜の儲かる話聞いて飲み  
トラバークユする職安の固い椅子  
足して二で割るお粗末な政治論

川西市 松本 ただし

ありがたい国だと思っ爪を切る  
手を振って歩くと湧いてくる自信  
尻馬に乗って待ってる明日の風  
蚊にすれば命をつなぐ羽の音

豊中市 三宅 つえ子

経机父の眠りが深くなる  
笹の餅母の写真がよく笑う  
車椅子あたたかい輪の真ん中に  
陽のあたる隣へ猫が越してゆく

伊丹市 梅田 宣司

男手でオシメ干してるある事件  
陽炎にくにやくにやくにやと車去り  
逆光で撮るのは美人過ぎるから  
野のすみれ見つけ少女に戻る妻

大和郡山市 坊農 柳弘

札幌へ梅雨を逃れてフルムーン  
初恋を思い出させるつばめ来る  
出直しがきく年でない万歩計  
野次馬の中で己を振り返る

藤井寺市 中島 志洋

京訛り芯の強さは母ゆずり  
再会の愛を育てる盆おどり  
冗談は言えても好きと未だ言えず  
金魚すくい子より父親意地になり

加賀市 細呂木 魯木

歩調を合せてボケを介護する

フアッションへ面子と虚栄を重ねてる

ライバルと歩調にこだわる棒グラフ

鳥取県 幸家 單車

へソ曲りだから逆手に攻めてやる

そんな日が来ればいいねと笑い合う

パチンコに勝ったくらいで威張るなよ

鳥取県 乾 隆風

仏花立てかえお供え頂戴す

わたくしの困いを取ったのは法話

極楽へひっこす荷物処分する

大阪市 松尾 柳右子

旅パンフいずれ行こうと励む職

正直に生きて長屋に根を下ろし

タコヤキと言えぬ行列繁華街

鳥取県 田村 きみ子

残り火を燃やす趣味です仏さま

正直に生きて情けをもらってる

バカヤローと言いたくなって浜に出る

池田市 岡本 吉太郎

戦前の地図 日本は赤い国

年金で筍生活逆もどり

昔から正義の味方よく負ける

大阪市 清水 利武

尻軽な女は口もよく動く

七十五日人食い鮫も忘れられ

たこ焼で娘三人よく喋る

箕面市 中嶋 田実子

古コート黒の似合った頃もあり

日溜りに似て故郷は胸の中

叱られてみたい姑の七回忌

茨木市 藤井 正雄

達筆は奥さんらしい葉書くる

よそ見して涙拭く間を待ってやる

感激の涙のあとのいい笑顔

豊中市 滝北 博史

誘われて戸惑うしぐさ板につく

好奇心ただそれだけで母になる

当確はさもうまそうに水を飲む

鳥取県 黒田 くに子

あやまちを妻は時効にしてくれぬ

一言を胸におさめて畑を打つ

手から手へ我が家のスターだかれぐせ

出雲市 富田 蘭水

よいうわさ信じた割にはひろがらず

人違いふつと吾が子に見えてくる

雑音をさけて無心に土いじる

# 自選集

工藤甲吉

娑婆はよし金ある無しにかかわらず  
(五月九日  
五十三日ぶりに退院)

病み上がり匂う若葉の風に立ち  
朝々を瘦せおとろえた腕をなで  
新築の隣の古いのが我が家  
故あつてある日酒豪は酒を断ち

本田恵二郎

古里の土を着て来た山大根  
ペンキ臭い玩具のような新世帯  
困らせて困りますわと惚けられ  
さも苦労したかのように自慢する  
土臭い里の訛りのなつかしく

水粉千翁

招かれる思いで沖へ櫓がきしむ  
木から落ちました思いの詫びを入れ  
わたくしを信ずる長いひとり旅  
ふり向かぬ旅の未来と語り合い  
ばた・ヤンに男音痴の涙拭く

八木千代

駄菓子屋へ祖母の消息ききに行く  
飴玉と替えてしまった柿の種  
置き去りになる綿菓子を持たされて  
橋のたもとで羊羹厚く切っている  
銘菓供えて仏を下戸にしてしまふ

兎島与呂志

湯上りの汗拭きながら妥協する  
七月の汗は女を急かたてる  
鈴の音させて女の京訛り  
今頃になつて祭の焼きするめ  
斜に切る西瓜の種も斜になり

岩本雀踊子

男の名で渡る川の幅がある  
納得のいくまで女泣かせとく  
歩を合わす妻と私の影法師  
不器用な生き方してる足の裏  
悲しみを試練としている不仕合せ

野田素身郎

不自由な手で釣銭を握り締め  
女ばかりある日のファミリーストラン  
地球規模の話題になつて座が白け  
週休二日主婦には縁のない話  
出る者が出て幕となる時代劇

野村太茂津

双肩で重荷担いで自問する  
プライドも捨てた帳尻合うている  
誰かがいつも見てる背骨は曲げられぬ  
反省の汗を拭うてくれるひと  
万歳三唱手締めで楔打つてある

金井文秋

城落ちた哀しさ少し店を閉じ  
閉店をねぎらう人と惜しむ人  
お釈迦さんの爪の垢ほど悟れそう  
平均寿命越したゆとりを世の為に  
亡妻への想いか夢にフルムーン

松川杜的

乾杯も好き万歳も好き男です  
葉桜もまたよし哲学の道散歩  
俗名で起こし仏と対話する  
地藏さま拜む孫の顔ダブらせて  
日本はいいな山があり川がある

波多野五楽庵

たかがスキヤンダルされど手強いスキヤンダル  
父にはぐれ母にはぐれた笹の舟  
狂い咲く花のあわれが見えますか  
野仏もほほえんでいる蓄なり  
サヨナラとシビアな人になっている

有働芳仙

浴衣から金魚掬いの手がきれい  
番犬も口止料へうなずいた  
都合の悪いことは補聴器パスします  
夫婦仲手本にされている甘さ  
口許が可愛い嘘に手をかまれ

久家代仕男

理詰めでは人のところが溶けませぬ  
癌という噂あれから二年経ち  
罪のない声で蕨を摘んでいる  
床の間の軸を抜け出て来た美人  
無縁ではないぞ老人ホームの灯

遠山可住

広島で拾うた運を抱く余生  
堂々と建つ淋しさよ忠魂碑  
編みかけの針が止つて恋が去り  
貧しさに生き残飯が捨てられぬ  
百まででは行けそうえらいことになり

谷垣史好

これは不覚眉毛一寸ほどに伸び  
ナマケモノという動物がおり安心す  
歌仙巻く夢を見果てね夢として  
法律の隅で化石がぬくぬくと  
物量に負けた戦を想うなり(小錦の相撲)

大矢十郎

功五級哀れ佗しい値で売られ  
連休明け役所休まぬ顔で出る  
死守せよという竹槍へきのこ雲  
ローン追うバイトへ決意ミニニを穿く  
ご長男の嫁よ何処にいらっしやる

正本水客

水仙のないしよ話をしてあきす  
盆梅はうわさ話を聞き流す  
紅しだれ心の重さ大事がる  
かいどうざくら散りそめてから雨になり  
藤のふさ幸せな顔みせじとす

恒松町紅

星一つの青春アルバム赤茶ける  
納豆のねばり囲んでいる絆  
五月晴れ今朝もボタンのかけ違え  
あれからのしこりが解けぬ鬼瓦  
鎌の柄に老いの汗ばむ青葉風

小林由多香

反省の酒が静かにきいてくる  
転勤へ上司のくせも聞いておく  
母の日も母が起きねば朝がこぬ  
口だけは深くお詫びをいたします  
毎日が日曜 趣味をはしごする

辻白溪子

悪友の良さが妻にも分かりかけ  
お喋りで診察待ちの間を持たす  
駅前が立ち退きバスが広く着く  
混浴へ男の入る場所がない  
断崖の風がドラマになる二人

藤井明朗

ふるさとの大地に遺蹟顔を出す  
バンガローみどりの中に甘い風  
森林浴みどりに染まるテント小屋  
義理人情使いたくない世相なり  
山崩す姿を変える町づくり

黒川紫香

焼鳥の串と一緒に愚痴溜る  
嫁さんに弁当貰う山のバス  
章魚提げて手を振る島のおばあちゃん  
用水路きれいにさせた文化かな  
静岡と宇治から新茶届けられ

月 原 宵 明

養命酒のんで頑張る父である  
葉桜に信ずることの愚かさよ  
ライバルにはつきり負けた奉加帳  
相合傘濡れて悦ぶのは男  
巻戻しきけば人生楽しかる

藤 村 女

小言聞き朝の弁当つめている  
母の味たっぷり見せて茄子の色  
女が女賞める言葉に刺を持つ  
偶然の出合いに揺れるイヤリング  
瞳千両美人でないが魅力持つ

高 杉 鬼 遊

釈尼妙寂ことしも母の忌を迎え  
大切ないちにち何もせず昏れる  
無理をいう血のつながりがありがたい  
階段をこらげて光る斬られ役  
影だけはとことん従いて来てくれる

植 村 客 遊 子

再会がもやもや消して肩をだき  
文恩の師の懐かしい声を聞き  
ナイターは巨人が勝ってよく眠れ  
お百度へ身替りさえも祈る母  
姉の忌へ達者でつせと香を焚き

小 出 智 子

わたくしの原点に置く洗濯機  
夜も十時ひとりの闇をもてあそぶ  
伯母さんが来る漬物のつかりごろ  
ふりだしに戻って軽い靴を履く  
何処へ行っても空缶が落ちている

西 田 柳 宏 子

席譲る遠慮へ他人に割り込まれ  
肚割った話結局飲んだだけ  
土俵際 体が覚えていた捨身  
忍従の人生哲学もった亡母  
尻尾切りみたいに管理職左遷

阿 萬 萬 的

価値観の違いへ妻の黙秘権  
まだ若い心算へ煩惱つきまとい  
世をすねた訳ではないが無位無冠  
ここいらが転機かもねえ肩が凝り  
君見たまえ葱坊主にも花がある

河 内 天 笑

自画像に馬鹿さ加減が見えてくる  
ええ加減な腰でゴキブリ叩けない  
飯の世やくる日くる日もみな宴  
宴からころがり堕ちてゆく影よ  
呉越同舟ひとときを和まんか

一人吟

# 秀句鑑賞

—6月号から

新家完司

空の青選び抜かれた駿馬たち

西口 いわゑ

鮮やかである。草原や青い空は人間よりも駿馬たちのほうが良く似合う。

街で会うと長女も二女も美しい

小島 蘭 幸

やがて見知らぬ男にさらわれる美しい娘たち。上六の「と」が効いて自慢に流れるのを防いでいる。

てのひらに桜見てきたうまい酒

堀江 正 朗

心に余裕が無ければ桜が咲いても月が出ても目に入らない。目が見えても見えていないのと同じである。実感句は強い。

女ひとりをかからかうように雨が漏る

西山 幸

雨漏りはいやなものだ。雨が漏ったくらいで死にはしないが、ひとりぼっちの心の中に

までしみ込んでくるようである。前へ上へ競ってみんな楽しそう

金山 夕子

闘争本能に支えられた競争の原理が、あらゆるものを向上させる原動力になっていることは否めない。しかし、前へ上へと競うあまりに大切なものを失っているのではないか。

その時になって電池を買いに行く

浅野 房子

非常用の乾パンも水も電池もときどき新しい物と取り替えないならぬ。いざその時に泰然としておれるのは何人ぐらいだろう。責任を果たしたように歯が抜ける。

本体の寿命は伸びているのだが、部品が壊れてゆく歯も抜けず、膝も痛まず、天寿を全うすることは難しい。

金村 青湖

肩のこり夫婦喧嘩をしてなおる

天満 三千代

喧嘩にはそういう効用もあるのか。ただし夫婦喧嘩で絶対口にしてはならない言葉、妻には「ブス」、夫には「甲斐性なし」。

友もまた少し不遇と聞き安堵

上田 俊路

悲しいけれど同感。同窓会をやりがっているのは出世した男たち。

バス停まで私とバスの走りっこ

横田 英詩

「おうおうガンバレヨ」と心の中で応援しながら見とれてしまふ。運転手は親切で少し待ってくれる。街路樹が風に光っている。ありがとうありがとう電気毛布を仕舞う

谷 真風

ありがとうの繰り返しの繰り返しに真実味があふれている。真実の叫びの前には、破調によるリズム感の悪さなど問題外である

網電車お隣さんも二人きり

平田 実男

二人とも元気な間は良いが、どちらかが倒れたり他界してからが問題だ。いま大家族の良さが見直されようとしている。

汗かかぬ人がテーブをカッとする

青枝 鉄治

トンネルや橋等の難工事では必ずケガ人や殉職者が出る。最前線で苦勞した作業者や、殉職した人の遺族がテーブカッとするのが本当だろう。石ころひとつ運ばなかった男たちが並んでハサミを持つ光景は見苦しい。

フィルムが残ればいつも祖母と猫

岡田 ふみ

脚痛や母とおんなじように這う

野村 静雄

川柳太平記 (170)

川柳の群像

# 河村日満

東野大八

「私の句に『仁義礼智信私も好きな道』

というのがある。昭和46年の路郎先生七回忌川柳大会で、三条東洋樹先生に抜いていたのだ。句だが、これは勿論、恩師故路郎先生の『古くとも僕には仁義礼智信 路郎』という句から想がはしったもので、私自身も好きな御作である。(中略)

ところで私は、路郎先生の名が出ると不思議に想い出す句がある。それは勅題「朝陽映島」(ちようようしまにえいず)であり、

朝陽映島膺懲の船西さして 路郎

である。昭和何年だったか、記憶も虚ろになつてしまっているが、おお、という感動を覚えたことを現在でもはつきり覚えていて、

そしてこんなのを名句というのではないだ

ろうかと思つとともに、勅題でこれだけの句が詠める路郎先生を、やはり非凡であり、奇才であると尊敬したことである。

以来、この句が私にとりついて離れぬものになつているが、昭和48年夏の州本で、寝床から窓越しに朝日の昇るのを見て、早速、朝陽島に映じ恩師の句が浮かび 日満

と詠んだものであるが、駄作は誰の目にも駄作らしく反応はなかつたが、私の胸の中を何かホツとしたものが走つただけでも楽しい想いがしたものである」(『川柳塔』S.57・5刊)

この一文は、日満の死の前年のものであるのだが、妙に筆者には心に残る。それは、

「ボクは晩年になつてしきりに、路郎先生のことばかりで、こと川柳になると頭がいっ

ぱいになる」

という筆者あての最後の書簡の一節が頭に残つているからであらう。

日満は昭和50年の第二回大陸川柳同窓会で顔を合わせたのがはじめてである。その折、

「あなたは、満州の兵隊さんでいた折、陣中にバラ撒かれた『月刊満州』を知つておいでか。この雑誌の柳壇の貴方は常連だった」というところの相手眼を丸くして後が出ない。

「この雑誌の柳壇選者は石原青竜刀と井口呑湖、その頃のあなたの柳号は日満子で、子がついているのでヒマコという女の子と勘ちがいされたこともあるよね」

そういうところの相手、大きな両手でかつちりとこちらの手を握りしめて言葉も出ぬ。やおらあつて、懐旧の念いと深き面持ちで

「そうだ。わしが関東東軍高射砲隊で北満州にいた頃だ。恤兵部から毎月くる『月刊満州』柳壇のそつだ常連寄稿家だったんだ」

「その雑誌の記者がボクで、柳壇を新しく設けたのも何を隠そうこのボクだよ」

と筆者が口走つた後、こうしめくくつた。

「終電車私一人へよく走り」というあなたの句が『川柳大陸』誌に載つたのは昭和15年11月号で、青竜刀さんが激賞してね。そんな

ことで、この句は今もつてばくの頭から離れないで大困りだ」

とつけ加えたので、彼の感激は頂天に達し、「一杯のもう、冷奴で……」  
とまともや痛い握手である。

本名河村石太郎、大正3年11月18日鳥取市生れて、大阪へ一家は移住、大阪市四貫島小学校高一を出て、地元の住友職工養成所に入り、直ちに大阪住友製鋼社員になった。甲種合格で兵役につき満州派遣。昭和15年除隊して貞子夫人と結婚して応召。

「日満さんの本職は鉄鋼部門であった。大阪で住友金属に勤め、戦後帰郷して日の丸自動車の本社大修理工場に転職された。その後日の丸労組の書記長、さらに委員長に推された。大阪時代から民社党の西尾末広氏の影響もあって右派的な考え方の持主であった。

しかし、やむを得ずストライキを指導しなければならぬ場合もあったようである。その後、鳥取市会議員（社会党）になってからも、いたずらにイデオロギーを振り回すことなく、市民全体の立場に立って、川柳を通して地元の文化振興に努力された」（河村日満氏を偲ぶ川柳大会にて福田多可志挨拶）

鳥取市議は、四期十二年をつとめ勇退した

が、その選挙の折の街頭演説は、川柳にはじまり川柳でしめくくる川柳演説だった由。

鳥取川柳界といえは、故森田若人を切り離すわけにはいかない。若人は鳥取県警本部を退職後の昭和29年日満、小林由多香らと鳥取川柳会を結成。『川柳鳥取』を発刊、翌年には鳥取市火災復興山陰大会を催し、麻生路郎夫妻を招き、川柳雑誌一色で活躍。またこの間、日本海新聞柳壇を開設し、五年後の同38年には二百数十人の川柳人を育てあげ、日本海川柳友の会が生れ、日満の協力を得て若人中心に「うみなり川柳会」が誕生したのは昭和50年であった。

森田若人遺句集「風のいと」の序文に、昭和51年8月他界したこの朋友をころから讃えたのを置土産に、日満も昭和58年10月31日昇天した。享年69、勲六等旭日章受章。

川柳塔参事で「川柳塔とつとり」を結成し鳥取県川柳作家協会会長が趣味面の肩書。

雨垂れにひとは上手な句を作り 日満  
の白い句碑が雲山文学散歩道にある。

「戦後世情の混乱している時期に、得意のハーモニカを持って日曜たんびに保育園を回りなつかしい童謡や、よく知られた軽音楽などを演奏して園児たちを喜ばせていられた日

満さんのやさしさに溢れた行動であったと思う。二丁の愛用のハーモニカを駆使したすばらしい演奏ぶりであったことを記憶している。工場でも何人かを養成してハーモニカバンドを編成して演奏して回られた時期もあった。

酒と女ではなく酒と川柳、川柳談義、奥様思い、社会党市議としてのバイタリティーでハーモニカの名手、氏にまつわるエピソードは語りつきない」（同上・福田多可志）

「ハーモニカにオルガン、こいつは日本人のこころの童心をかきたてるふるさとの楽器だ。大正生れの人間は、みんなこいつに弱いんだな。ところで若人君と、大正三年の五黄のトラ歳を集めて「寅会」を作った。われら二人と同一歳、どうです入会しませんか」と大陸同窓会の皆勤組の彼からそう声をかけられたが、鳥取県在住でないので断つたら

「今に全国トラ会にしますよ」と笑って、さかんに湯豆腐をパクつき、コップ酒で気焰をあげていた。無類の豆腐好きなこと、彼を知る人々の間では有名。

大陸に四季あり兵としての過去 日満  
うたた寝の妻に涼しい風よ吹け  
友多き幸ししみじみと選挙戦

▼次号は「市場没食子」

# 柳籠裏三篇研究 (十三丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

218 湯屋喧嘩へのこのふるがごとく也

紀内 普通の喧嘩ならば「血の雨がふる」のであるが、真つ裸での刃傷？では、まさに「へこのこがふる」ようであらう。「へのこ」「ふる」の縁語？仕立ても面白い。

ゆ屋けんくわへのこのないハゆばん也

末二二九

落語にも、湯屋のけんかで「太の字」なり  
にのびちやった、という洒落がある。

西原 贊。

抜身の中へ飛込ハ湯番也

宮二二二

湯屋喧嘩番頭の外皆抜身

二二二別 27

岡田 同。

219 井戸端でかんきんをするげびた事

紀内 経を読むならば、やはり仏前でやるべきであつて、井戸端での読経など、そぐわない、様にならないという、それだけの意。

西原 贊。信心深い老婆は、道ばた、井戸端、

川端等どこでもしゃがんで念仏をと覚えていたもの。長屋では共同の井戸端しかないから、そこです。それが目につく。

青木 夫婦喧嘩の果の、女の狂言自殺ではなかろうか。そつたとすれば、この看経助けを呼ぶ為だから大声では気が引けるが、人に聞こえなければならぬし、タイミンクもあるだろうから、その辺の呼吸は難しかろう。

佐藤 青木説に賛。狂言自殺というのではなく、井戸へ飛込み自殺をしたとか、子供が誤つて墜ちて死んだとかといった場合。

七久保 バレ句のように解していました。井戸端ではよく女たちが洗濯をする。その折り、ちよつとした裾の乱れで女性自身をご開帳におよんだのをタイミンクよく拝見して「もつたいなや、有り難や」と合掌しているのである。

岡田 七久保説のように解していました。

220 おもしろさとぼ口でらんまんと咲

紀内 これもまた駄労解を記す。吉原仲の丁の桜の句。茶屋の門口、家の軒先に桜が咲き乱れている面白さを詠んだものと思つ。

とぼ口でちわわをしている中の町 傍三三三

西原 贊。

桜からさくらへこける面白さ 二二五

青木 贊。主題句の「面白さ」は引用句の「とぼ口でちわわをしている中の町」の「痴話」を言っているのではなからうか。

岩田 贊。「面白さ」はやはり礎稿の如く、「色事の面白さ」、特に「吉原での遊興のうかれ」を詠んだものが多い。

岡田 同。

221 居なじんでへのこ咄しを松ヶ岡

紀内 〓 「松ヶ丘」は鎌倉東慶寺。別名縁切り寺といわれ、女の方から離縁したい場合は、この寺に三年厄として生活すると、夫から離縁状が取れたという。

はじめはかしこまっているが、そのうちに仲間同士で茶飲み話、寝物語に亭主との房事の話、一物の話等も出るのであろうとの句。

佐藤 〓 贊。「へのこ咄し」は、「下がかりの話」の極限的表現である。

七久保 〓 女などはあまり面識がない場合だと気取って乙にすましているが、一旦気心が知れるようになると、身の下話も平気でする習性を持っている。この点は男よりも大胆だ。

岡田 〓 同。

222 兼好が居た所から夜たか出る

紀内 〓 「徒然草」の作者卜部兼好は、京都吉田の里に住んでいたので、吉田兼好といわれた。また夜鷹は江戸吉田町に多く出没したといわれる。

主題句は、この吉田をとり合わせただけの句。

鈴木 〓 贊。つまらぬ句。

岡田 〓 同。

223 私にさせて新造しかられる

紀内 〓 遊廓で馴染の客がかち合った時、後から来た客には、その遊女の妹分の新造を代理として客に出して置く。この新造を「名代」という。

尤も、代理とはいえ、その方の代理はしない。しかし、中には内緒に一つ寝することもある。その結果、客は不粋の烙印を押され、新造は姉女郎に小言をくうのである。

やぶれかぶれて名代をおつかじめ

あまりむごさに名代はさせる也

あの子もあの子ぬしも又ぬしざんす

安四智 5

九〇三

青木 〓 主題句、表面的には大尾句かも知れないが、内容には人間味が感じられる。

佐藤 〓 贊。実際には、名代に出た妹女郎の新造に、大事の客を寝とられるというようなことも割合にあつたという。それを防ぐために、姉女郎は「見舞い」と称して、しばしば名代部屋を覗いたようである。

岡田 〓 同。

224 能イ程に柳のうごくうら、かさ

紀内 〓 他意はない。只これだけの句と思う。

まっすぐな柳みて居る暑い事 一八二二

柳さへたるたま、いるあつい事 一八二八

佐藤 〓 贊。「麗かさ」とあるから、夏の季節ではなく、春の季節である。柳の新緑が揺れるともなく動いているのは、一種の風情がある。

岩田 〓 贊。先行吟に、これは俳諧であるが、

よいほどに柳うごくやころもがへ 芳室

（「古今俳諧明題集」夏・宝十三）

がある。あるいはこの句の剽窃か。

俳諧では「うららか」「柳」ともに春の季語である。

鈴木 〓 贊。春風駘蕩の景。

岡田 〓 贊。岩田氏の俳諧に引用、結構です。

おそらく盗句。

川柳塔唐津支部十周年記念川柳大会

とき 11月2日(月) 午前11時半締切

ところ 唐津シティホテル(唐津駅前)

懇親会 11月1日(日) 午後6時から

◎詳細は次号に掲載いたします。



黒川紫香選

浜田市 中尾 まゆみ

人魚の唄聞こえてきそう海の蒼  
ばばさまの背に童話が棲んでいる  
大好きな人の星座と対話する  
描く愛一途な彩が冴えてくる  
てのひらに伴奏がある視野はるか

八尾市 秦 正子

春がすみ記憶力まで薄れゆく  
気休めにもならぬへソクリ温めてる  
疑心暗鬼 豊かな国で飢えている  
複合汚染気絶しかかっているモグラ  
人々 ひとを見に来た訳じゃなし

和歌山県 小倉 アサ

姑の背に甘えて弱くなる手足  
宝石は心の中に抱くつもり  
昭和史の尻尾にしがみつくとロマン  
身に余る言葉に触れてから下降  
雑草のささやき聞いている回路

松山市 宮尾 みのり

自意識は過剰に持っていて内気  
三枚目の顔に生れて三枚目  
先生にあこがれてます健康美  
しこり一つ一つの心を離れない  
廃校の隅にかすかに土俵跡

富山県 高島 五月

ああ平和花屋の花に四季がない  
芋蔓の意地が経済大国に  
ランドセル重くて道草できません  
知性派の友が過労死した便り  
いい嫁で鬼千匹の出番なし

名古屋 藤井 高子

星は流れて父母在した日へ誘う  
あれをご覧 星が祈りを負うて散る  
単彩にいろ塗り替えて老いへ向く  
責めの面脱いだ時から軽くなる  
コンパスの輪からはみ出せないままに

広島市 流 奈美子

やわらかい風と遊んでいる童話  
悲しみの過去を抱くのか泣き砂よ  
綿帽子 明日の行方は風まかせ  
暫くをおんなにさせるウインドー  
煙幕の中で女が脱皮する

富田林市 池 森子

転んだ日蟻の目線でみた情け  
母の日に行方を探す父の影  
やさしさを探すのは男

とっておきの笑顔に鬼が落ちてくる  
啖阿を切ったのは男ではなく女

兵庫県 森 脇 和子

ちぎり絵の雛人形と春の宵  
自分史のドラマにひとり酔うてます  
合言葉忘れた日から医者通い  
金婚の祝いに行つて励まされ  
原点に戻る歩幅をよび戻す

和歌山市 岩 本 美智子

かげろうの群舞に息がつまりそう  
夫婦喧嘩一幕物でちょうどよい  
破られた絵はそれぞれの過去をもつ  
あでやかにそしてしたたか生きる女  
壮麗な古墳に眠る謎の主

松山市 白石 春嶺

廃屋の木かげで瘦せた枇杷が熟れ  
重箱の蓋が浮いてる里のすし  
ワンテンポ置く山彦の口答え  
分校のピンチ生徒があと一人  
看護婦も無謀を論すオキシフル

尼崎市 児玉 歌子

もう少し歩こうと言う別れ道  
すぐに効くお世辞時どき用意する  
飲ませたら厄介になる泣き上戸  
権力で握り潰している野心  
低姿勢相談ごとを匂わせる

熊本市 大川 幸子

留守番電話弾む心をダウンさせ  
女だてらに等といわれるかも知れぬ  
履きなれたベタ靴ばかり頼ってる  
背中あわせどちらも待っている妥協  
小さな嘘が幸せ保ってる

熊本市 宇野 昭代

いやいやで来たとはおくびにも出さず  
横断歩道でちょっと迷ったのが不運  
喪が明けて春のスカート縫い始め  
新しい恋の子感の風が吹く  
父と子と黙って見ている遠花火

砂川市 大橋 政良

来世より今どうしよう仏さま  
この胸を涙の枯れるまで貸そう  
ソロバンの玉に甘さを叱られる  
十指みな利己的でいて助け合う  
借りた傘返さぬうちに雨になる

旭川市 朝倉 大柏

ドイツ語が読めたらカルテ怖いだろ  
さよならへうっかり振ってしまつた手  
迷路また鬼に出会ってばかりいる  
雪月花 女はいつも米を研ぐ  
仏さまに聞いて貰ってよく眠れ

静岡市 沢田 きん

五月晴れ大きく息を吸ってみる  
墓石へちよこんと座る青蛙  
さまざまな風に出会つた恋の花  
降る雨へいろんな事を考える  
春風にそつと甘えてみたくなる

今治市 渡辺 南奉

捨て石がじわりじわりと光り出す  
知っていて毒へ毒へと引かれ行く  
鍋磨くストレス解消法という  
目玉焼きうまく焼ける日焼けない日  
石橋を三度叩いて後手ばかり

久留米市 鶴久 百万両

旗を振るチャンスだ俺の名を売ろう  
青春へピリオドをうつ火の女  
思慕ひとつ火になるものが欠けている  
この恋は最後と思う赤を着る

尼崎市 森 安夢之助

天井へ句が羅列して眠れない  
別居をしたなと悟る洗濯機  
仲間から外れ小銭を溜めている  
雑音になることもある咳一つ

尼崎市 野瀬 昌子

穏やかな顔で嫌味を聞く店長  
お隣が空地になって日が温い  
孫の観たウルトラマンが夢に出る  
暇がない言いつつ茶飲み話する

尼崎市 長浜 澄子

ハーモニカ吹くと故里そこにある  
人の良さそのまま出している電話  
穏便と言う建て前の片手落ち  
長距離の車休めているコーヒー

尼崎市 山本 すみ

もう許す事にして聞く雨の音  
盃の底へ沈んだ恨み事  
ライバルの自信に満ちた笑い貌  
幻想の中でオーロラ渦を巻く

撰津市 木下道子

山頂のポストへ旅の花便り  
ときどきは脱線をする旅もよし  
暗号のようなメモ来る会議室  
いつか芽を出すと信じてくれる母

熊本県 岩切康子

春の小川目高消えてる悲しい日  
逢いに来し墓園の藤は遅かった  
飛行船人と綱引きして降りる  
バランスを崩して個性主張する

藤井寺市 高田美代子

逆転があるかも知れぬので立てぬ  
下り坂いけずな風が押しにくる  
水襲をちよいちよい覗く苦労性  
威張ったら影も一緒に反り返り

尼崎市 的場十四郎

甘えたい女心のイヤリング  
春ロマン去って緑を待つ素足  
砂浜の素足に戻る童唄  
天守閣登って城主の顔にする

尼崎市 尾宮弘治

姿見を師にして手話を身につける  
母逝って父の脆さを垣間みる  
花の道避けて母娘の車椅子  
お茶漬けが性に合ってる花疲れ

河内長野市 大西文次

仲裁を頼まれ喧嘩して帰る  
手話でなら好きだとと言えるかも知れん  
矢印の方へ曲らぬ二人連れ  
叩き売りたい娘が一人いる

米子市 足立由美子

不景気に靴音さえも重くなり  
五月晴の下で良い事考える  
老いたのか思い出ばかり追っている  
少しずつ老後の事も決めておく

富山市 島ひかる

春や春 野の花あげよじぞうさま  
えにしだの花の色着る父の忌よ  
知性派じゃない母さんのあたたかみ  
いそいそと今日も出掛ける白い足袋

西宮市 牧淵富喜子

古希には古希の藤色美しい  
洗濯機五月の空に機嫌よし  
性格の違い認めてからの仲  
蛇口全開ケセラセラで菜を洗う

香川県 川崎ひかり

押し売りとは知らず大きく開けたドア  
片側にストレス溜めてる靴の底  
三十年車線変更なしの道  
車座のよさを知らない核家族

芦屋市 黒田能子  
梅雨空におかまいなしの孫のシヤツ  
留守勝ちでメモ用意して訪れる

よそゆきの顔してワイン飲んでます  
おしぼりの遊び疲れた手を包む

長岡京市 山田葉子

射る自信ないが二の矢はつがえとく  
おっとり構え逃げ道ふさがれる  
笑いじわ刻んだ老母の手もぬくい

あと一人待とか今夜は鍋だから

和歌山県 杉山精子

折り鶴が五十羽になる待ちぼうけ

秒針と対話している日曜日

結局は母の涙に勝利あり

運命の糸絡みつく始発点

出雲市 原章峰

男性ヘルパーの手に五月の陽が余る

たましいが点滅をする指の先

親不孝の順に骨壺抱きたがる

群の中から元気な父を探し出す

柏原市 大峠可動

生々流転バブル魔王の誕生で

陽は天に蟻は大地で笛を吹く

自己評価砂漠が好きで雑兵で

雲流る人の噂も流さるる

西宮市 亀岡哲子  
ライバルの自慢話を聞く余裕  
化粧してとうもろこしを持って余し  
堂々と花束抱いて来る男

トーストに歯形残して行つたまま

高槻市 守先伸子

あじさいの愁い深める雨しきり  
草笛を吹く夫の背に有るゆとり  
ぼけたふりしてたら事が納まった  
専業主婦でひたすら御飯炊いてます

鳥取県 奥谷彩子

呉越同舟 憎しみ消して岸に着く  
定退の二度目の靴も軽く履く  
古都の春あちこち寺で客を呼び  
満ち潮に乗せライバルの船送る

西宮市 岡本道子

値下がりを待つて逃がした句の味  
前列に座りあくびを噛みころす  
計画のない連休が五月晴れ

ひく線の距離が違っていた二人

西宮市 菊池トミエ

託児所の子の手を揉んで夕暮れる  
献立は五色取混ぜ母達者

紫陽花を見ているけれど人を待ち

淋しさは便り来ぬ日の夏燕

枚方市 森 本 節 子

夢の中しか出逢えない人惚び  
一日の始まりガスに点火する  
五月晴れ犬の寝姿すきだらけ  
朝掘りの筍炊いてる日の永さ

堺 市 桜 井 莊 次

安らぎを極め尽した佗び住居  
すんなりとうなずく人が恐くなる  
おふくろと一味違う嫁の味  
二枚目の舌が余計な事を言う

尼崎市 明 壁 敏 之

厄介な客を父さん連れてくる  
お流れと盃もらい尻尾ふる  
孫自慢鬼軍曹の影もない  
何時効くかわからん漢方薬を飲む

福岡市 井 崎 ミサ子

ささやいた声が届くか芽吹く鉢  
泣き落としきかぬ女になりました  
久しぶり交わす会話が止まらない  
思い出し笑いに鍋まで吹きこぼれ

尼崎市 岩 倉 キク子

臍に傷持つと家内の眼が怖い  
蟬しぐれ木立見上げて汗を拭く  
遠足は百足のように子等続く  
遠い日がほくろに残る幼な顔

今治市 越 智 青 園

車座で一服趣味がこぼれ落ち  
花びらを一枚入れて恋心  
誰とでも歩幅を合わせ父も老い  
仮面ぬぎ妻がいびきをかいて寝る

寝屋川市 太 田 とし子

三ツ紋着ればりりしい子に見える  
逢えるかも知れぬ思いの回り道  
母の日にそつとひそんでいる期待  
絵日傘を回してちよつとすねてみる

兵庫県 円 増 純 子

山峡に民話ひっそり生きている  
ねばられて夫の保険また増える  
こだわりがあるから村を離れない  
風向きが変るととたんになる無口

綾部市 藤 田 芳 郎

私なら大きい方を貰つとく  
さんま一匹火葬にされた長話  
先頭に立つ積もりなど無いかたつむり  
言うことは山程あろう桐箆筒

和歌山市 田 中 み ね

不器用で旨く使えぬ胡麻すり機  
連休をわが家で自由謳歌する  
成り行きで顔触れ変わる縄電車  
場慣れした見合いで男見定める

昔流言えば滅私で注ぐ愛

鳥取市 永澤裕子

學歷が物言わせてる回り椅子

下町の涙呑み込みビルが建ち

時効だと出した話に火が付きぬ

鳥取市 植田一京

雨止んで決断一つ腰を上げ

有難うこの一言に満たされる

退職後鎧なかなか脱ぎきれず

自分史の中の自分がいとおいしい

貝塚市 池田寿美子

結び目がすつきり解けてよく眠る

贅沢な迷いに惹かれひとり旅

帰り道の誘惑に負けビヤホール

ローカル線 隣同士の知恵を借る

岐阜市 渡辺杏村

クローラーで夏風邪をひくアホらしさ

ステテコで男冥利をかみしめる

明日から職業欄は無職の日

地下鉄の冷房車だけ混んでいる

鳴門市 八木芳水

だんまりと靴磨く妻のも磨く

歌わないカナリヤ餌は食べてます

負けた日の父は笑顔でとぼけてる

煩惱の迷いを捨てて顔洗う

生きている水がこんな輝いて

鳥取県 西浦小鹿

一人者 無口にしてる風祭

ハーモニカ吹いてこの道風のなか

夕暮れの小道に鍬が置いてある

熊本市 北川一進

素直さが欠けて結局損をする

寝る前にうなり出ししてる洗濯機

留守居して家の広さを見て歩き

鯉のぼりくられたまま座り込み

姫路市 福本好花

土壇場で一人になったちぎれ雲

金だけでないと言うてもやはり金

去るものは追わぬ気持が追うている

度忘れの声にはならぬもどかしさ

枚方市 海老池洋

来てすぐに帰る話の故郷の母

一城の主へメモはカップメン

ゴシップがこわくて風をやりすこす

藤村を読みたくさせた馬籠宿

高槻市 芦田静江

沙羅の花ひらくと浄土みえてくる

かすむ目にクツキリ近い東山

愛される駄馬で余生をとびたがる

縁遠いキャビア飽食とはいいいながら

寝屋川市 宮崎 菜月

母と来て十六年振りの彦根城  
懐かしいわが家の藤に頼ずりし  
青梅雨の滴り落ちる菜蕒を食む  
飴ひとつ封書の中に忍ばせる

寝屋川市 北岡 波留吉

夫の代理とてできない子沢山  
生まれつきのスマイルで波立てぬ嫁  
春雷に零して仕舞うたワンカップ  
駅前の花壇が癒す旅づかれ

熊本市 遠山 夏生

帯封の論吉靴で何処へ行く  
母よりも祖母が気遣う馴れぬ水  
平均寿命延びて傘寿の祝い膳  
給料は袋の頃が懐かしい

和歌山市 森 茜

みごもった三毛猫ゆうゆうと通る  
トンネルがついてくる富士さまたげる  
気くばりのつもりおしゃべり過ぎたらし  
小旅行帰ると爪が伸びている

川西市 田中 喜俊

連休のプランたてずにごろ寝する  
一気飲み缶入ジュースでまねて見る  
夜桜に春の夜風が肩に滲む  
独居です庭の草にはまいます

大阪市 今西 静子

影法師二つに分けたパトロール  
先生が好きで文学好きになり  
さよならの視野にネオンが点滅す

和歌山市 山口 三千子

水割の底に溜めてる捨て台詞  
愚痴一つこぼさないのも気にかかり  
フルムーン妻は禁煙席に乗る

熊本市 黒田 緑

暑い日が好きと夾竹桃の花  
ファッションとグルメを引けば残り何  
そう言えばそうかと思う頼りなさ

尼崎市 鈴木 良征

情熱にほだされたのか紅をひく  
移り気な女の舌を抜いておく  
口車にすぐ乗る雑魚の性を悔い

尼崎市 湊 修水

マンションにメザシのような鯉のぼり  
菖蒲湯で亡父の謡曲まねてみる  
よく見ればずるいのも居る蟻の列

鳥取市 大坪 天涯

子の夢を守る男の位置に居る  
子供っていいな仲良くすぐなれる  
平和ですひとりチビリチビリ飲む

松山市 丹下美津子  
ご苦労さまの一言を待つ年になり

女同士の話がしたく娘に電話

お土産の気品ほのぼの京和菓子

東京都 山口新子

日の暮れに正座してみる母として

あの人の親友に逢う紅ひいて

落しふた時々ずらすこらえ性

静岡市 永倉柳華

絵心はないが描きたい富士の山

長電話笑って泣いて拗ねてみせ

褒めていておいしい料理食べ残し

羽曳野市 芦田絢子

今ならば亡夫に百点あげられる

待避線に入ったままで日が暮れる

アンテナが揺れる誰かが呼んでいる

島根県 槻谷一葉

突風は心の隙をついて来る

老人会まだ入る気になれません

えんどうの花に安らぐ五月晴れ

佐賀県 江口万亀子

衣替えしたら日傘もほしくなる

民芸の盃下戸も買って行き

ほおずきが熟れると恋の使者が来る

京都市 小林英子  
十字架に曝されているのは男  
好きだから何を聞いても憎めない  
つばめ来る街も五月の粧いに

広島市 森田文

空いてきた席へひと駅だけ座る

十姉妹よわたしも妹おりますよ

鶯が五時まで啼いた鳥センター

尼崎市 佐野六浦

春風が湖面に映えて陽がゆらぐ

合格へ笑いを入れて鍋囲む

記憶にも無い言訳は話せない

尼崎市 吉永伊三郎

七階に住んで年金年りの顔

晒巻く男に惚れた夏祭り

お茶碗の底まで見せて子は育つ

尼崎市 前田いわお

孫の方が加減しだした腕相撲

夢描く器用な筆が欲しくなる

旅に出て男野心が先走る

出雲市 岸桂子

ブランクがみどりを乗せて揺れている

笛吹いて胸の空気を入れ替える

流木に触れるがごとく姑を抱く

兵庫縣 酒井靖子

花切手うきうきさせて封を切る  
生きる欲あるから地図を塗り替える  
味方ならこんな時には笑うまい

寝屋川市 井上すみれ

修学旅行から大人のような口をきき  
大人になつたんだ負けることも知り  
早帰り「バルサン中」と書いてある

芦屋市 根来敬

マドンナの言葉遣いが気に入らぬ  
うまの合うお方も好きな時代劇  
あかあかと照らされ過ぎて影がない

静岡市 浅子まつゑ

落ち零れ忘れた頃に芽吹く種  
点滴を見つめて無我の境に居る  
これで良し鏡と話しパフを置く

岡山県 江口有一朗

ポイ捨ての缶ポイ捨ての心見る  
悲しみに歩む私を影が見る  
未だ地図に書かれていない道に行く

岡山県 福原悦子

休耕はどうあれ父は農愛す  
ここだけの内緒に心弾ませる  
落書の残る柱に子の想い

熊本県 高野宵草

笑声が聞こえ喧嘩でない議論  
大食の癖もなおさず胃が悪い  
まだ母の味が楽しめるから故郷

福岡県 本田忠男

愚痴すてに行つた酒屋のあたたかさ  
妻の留守かなしい声の猫をだく  
欠点を個性に仕立て柔らげる

十和田市 阿部喜久江

世なおしにできて欲しい水戸黄門  
待ちきれず蓄の下で花見酒  
手術した関節痛む明日は雨

静岡市 小木久子

友への電話ためらわせてるものは何  
ウインドの明るい春着が呼びかける  
いらだちを鎮めてくれる君子蘭

佐賀市 古川一徳

肩書がついて友とは距離が出来  
ほめられて男冥利の酒の味  
勝負には負けても明日のある男

鳥取市 谷口百合子

名園の桜が散つても人絶えず  
犯人が分かるまで本を読み切つた  
二時間のコーヒー別れにくくなり

鳥取県 山本 正光

汗多く流した年金安すぎる

酒やめて家庭明るくなつて来た

聞かなくていいこと妻は聞きたがり

富田林市 山原 昭水

夫婦だなんどん食べたいまで一緒

盃をかわせば言葉などいらぬ

善人も防犯カメラに覗かれる

香川県 田中 スミエ

転校の孫が気になる菜種梅雨

塀のない気安さついつい地声だす

木蓮がきれいと言つては寄つてくれ

岡山市 中嶋 千恵子

心棒がゆるんで狂う夫婦独楽

善人の顔で耐えてる宮仕え

愛憎の想いで回す糸車

兵庫県 倉垣 恵美

老いてなお四つ葉のクローバーさがしてる

思い切つてスタートしましたかたつむり

ごはんひとつぶきれいに封ができました

静岡市 片平 静代

足腰が動く極楽かも知れず

会つて来た余韻鏡もうれしそう

吊り橋を渡ると過疎の村の顔

鳥根県 武島 ちよえ

雷の一喝テレビ黙らせる

プロポーズされてハンカチうろたえる

古里の山がいつしか消えていた

大阪市 勢理客 トミ子

暮しとはこんな汚れる換気扇

ゴミ袋君も社会の問題児

手作りの味を買うのに長い列

和歌山市 堀畑 靖子

陽の落ちた部屋に淋しさ増してくる

身を低くしてホコ先をかわしとく

食費切りつめて払っているローン

岡山県 土居 ひでの

ヤワラちゃん一步踏み出すバルセロナ

見え透いた嘘をまるめた低い腰

肩肘を張つて凡ミスばかりする

鹿児島県 大山 舞鳥影

倦怠期 料理の本はどこにやら

一枚の履歴書で済み雨読中

太陽は灯台守に眩しすぎ

兵庫県 北川 とみ子

割り切れれば伏せた過去から花が咲く

裏切りでない温もりの掌を握る

高望みしない余裕の玉手箱

いい夢を広げてるらしいい軒

岡山県 福原辰江

祖父ちゃん天気予報よくあたり

こだわりを捨てたら世間広くなり

島取県 権代康女

すばしい嫁が周りを掻き立てる

うわさって途中で赤い色もつく

ふる里はみんな味方をしてくれる

松江市 松浦登志子

子が巢立ち皿と会話が減りました

アルバムの父はいつでも笑ってる

幸福を絵にしたような写真集

今治市 渡邊伊津志

一つずつ約束のある茄子の花

大海の恐さをメダカ気にしない

人造藻 魚も人も騙される

藤井寺市 田中孝子

振り向かず草笛吹いて去った人

流水の軋みに想う春の詩

締切りを赤いポストが気にしてる

羽曳野市 福田悦子

母の日に母は若さをくれと言う

みどりの日昭和天皇目に浮かぶ

父の日に亡父の写真と酒を飲む

花生けただけで心の和む部屋

唐津市 浜本治幸

反省の猿に自由はあるだろうか

訥弁に人の良いのが窺える

明石市 小川酔月

歌ってる本人だけが悦にいり

午前二時スーダラ節が帰宅する

結局はどっちつかずの評論家

新潟県 高野不二

新聞が休みで眠る外はなし

暗証番号金のなる木にして暮す

メーデーに鉢巻がない豊かさよ

大阪市 吉川哲矢

名城や兵のうめきの聞こえそう

七歳に天衣無縫を教えられ

寺の児で弁当箱をのぞかれた

静岡市 増田扶美

もうりボン着けて喜ぶ子の育ち

棟上げの木遣り歌が空へ抜け

うまい話 乗ったばかりに悔いをみる

和歌山市 木村親路

社宅から人事の噂もれてくる

帰るかと思えば座り直すだけ

子には子の時刻表あり発車する

熊本県 増田 一 乘

お相手が欲しいか園児よくしゃべり

買ったより安いチラシに損した気

五階から真鯉緋鯉に見下ろされ

岡山県 後安 ふさえ

入院の相部屋あれこれ気を遣う

草餅がとどいて里の母達者

愛情も煮込んだ嫁の七分がゆ

岡山県 後安 江山

幸せが想い出させる亡夫の顔

今一番幸せですと母の日に

よい方へ取って感謝の日々にする

富山県 酒井 輝

幼妻まだ原宿に用があり

土地売って出す税金で名を知られ

定刻に戻る夫で出世せず

弘前市 須郷 井蛙

呼び捨てにするほど二人の仲進む

タクシーが来たと上手に酒を逃げ

犬に起され健康な日が続き

豊中市 みき わきみ

再入院美人ナースが覚えてた

ザラ紙の川柳雑誌がなれそめで

孫のようなバイト使ってこの稼業

豊中市 井上 直次

根掘り葉掘り聞いたが何もしてやれず

にこにこと笑って肚を読ませない

葬儀屋を苦笑させてる内輪揉め

静岡市 柳 沢 たま

お花見が楽しかったね花むしろ

重ね着を一枚脱いで春を知り

梅雨晴れ間干したい物が多すぎる

相生市 中塚 礎 石

知らせでは三途の川も汚染され

一徹を通した父にある笑い

ノックする向こうに夢がありそう

大阪市 清水 絹子

自分史の佳境にはいる祖母の章

無器用を絵にした亡父は今も好き

ハンカチの白に遠のく暮しむき

大阪市 尾崎 黄紅

仁丹の匂いこの人大正だ

助けたい命は金が掛ります

回り椅子だいぶお金も要りました

宇部市 中村 三良

コンパクトの底の方から拒否反応

無風地帯の中でゆく先見失う

自画像の不安の彩を塗り直す

和歌山市 山田博章

寝屋川市 豊福路子

例外という抜け道を知っている

晴朗の空を招いて除幕式(句碑建立)

上めざす背を太陽が押ししてくれ

晩学の時計はいつも遅れがち

薔薇一輪置いたら庭が歌いだす

足踏みがうまくなったら飛べそうだ

東大阪市 安永 晓子

和歌山市 榎原公子

一人膳病院食は淋しすぎ

正直に生きて壊れるものばかり

辞書が友 退屈せずに日が送れ

手の中の小鳥謀叛の羽根ひらく

お土産はなんでもよいは困ります

幾何学の橋が名所となる港

鳥取市 田賀 八千代

大阪市 世森 幸雄

賞味期限切れた女も春を待つ

還暦に手鍋の妻を忘れてる

四捨五入されてようやくここで生き

おかしくもないのに笑うときもある

春の香に満ちて女が咲きそろう

連休の初日ひとまず昼寝して

岡山県 牧野 秀香

廿日市市 森川 抜智

草笛がよんだあの丘みどり風

看護しに行つて昼寝をして帰り(妻入院)

クレーター対岸の火事では居られない

見舞客より病人がよくしゃべり

鳥の声朝の空気が清められ

天満宮 入試の願い引き受ける

鳥取県 鈴木 公弘

豊中市 田中道胤

連休の骨バラバラにして眠る

途中下車春夏秋冬紫香之碑

心配の種をアルコールに漬ける

抜かれたくない歯を二つ抜くと言う

長電話お風呂が冷めるまで喋る

蛇の目傘立たせて見たい花菖蒲

静岡市 大村 正雄

香川県 工藤 吟笑

ご自慢の喉を聞くのも義理のうち

悪口を言えば後ろで聞いている

面白い時に笑わぬ人もおり

戦友の面影惚ぶ古ハガキ

もの言わずトンボ帰りが特技です  
気兼ねなく一日過す寺詣り

東大阪市 指宿 千枝子

輪を描いてトンボと遊ぶ指の先

アルバムに預けてあります若い日を

夕焼けが明日を約束してくれた

兵庫県 西井 つや子

朝陽一ぱいお地蔵様も私も

お話が出来たいと庭の芽が伸びる

正直な鏡が笑う古希の坂

唐津市 福島 紀一

孫留学 東京の地図また広げ

雀まで近頃来ないと妻は言う

何もないと言いつつ妻の料理出来

岡山市 富坂 志重

方言で答えてくれる電話口

春の花蝶の口付け待つ天気

他人がほめる貴方は素晴らしいけど

泉南市 坂根 流水

傘杖に図書館通い常となり

目に見えぬ世間の情けに支えられ

潮騒の磯で小蟹と戯れて

鳥取県 橋谷 静江

欲のない顔で寝ている二日酔

趣味多く中途半端で終りそう

初めてのデートに遅れ悔いのこす

静岡市 中西 雅

若ものと歩幅がちがう老いの道

人生はまだ長いと思う歩道橋

梵鐘の余韻吸いこむ影ぼうし

大阪市 平井 露芳

環境悪いのに来たがる宇宙人

海汚したお詫び魚を箱で飼い

奥多摩の猿も都民の仲間です

鳥取県 中西 智恵子

母の日へ電話一つのプレゼント

棘のあるバラをいまだに愛してる

泣き顔を見せたくないから笑う

佐賀市 大坪 美佐子

索漠と砂をかむよな日々もある

朝顔が袋の中で芽を出した

しゃぼん玉屋根のあたりに飛ばしたよ

香川県 植田 チカエ

娘居て家中明るき春の服

紅葉の葉本の頁をまだ守り

玄関へ元気な孫が先に来る

唐津市 山門 幸夫

霧雨の傘に仁和寺花吹雪

藤天神亀も驚く人の波

ベソをかく孫に金魚屋サービスし

割箸でへのへのもへ字書くふたり  
鳥取市 西村 黙光  
駆け足で雲が過ぎゆく胸騒ぎ  
香川県 田中 ふみ

気が若く人に好かれる社交性  
骨休めスーパームぐりも趣味のうち  
高槻市 小林 紀美子

出不精も出かけてしまえばうそのよう  
朝毎にメダカ数えて安堵する  
和泉市 中川 楓

散らかっている部屋にいて寛げる  
中心に梅干がある母が居る  
池田市 木村 一 笛

気まぐれに愛の告白するでない  
古希のしわ盗らぬ狸は止めにする  
松江市 佐野木 みえ

鉄瓶の湯気ふと遠い日にかえり  
カーテンをレースに変えて梅雨晴間  
唐津市 山口 ふさ子

フグ刺しの皿絵くつきり盛つてあり  
日曜日隣のステレオ聴かされる  
和歌山県 藤井 春子

マイペース生きる歩幅を焦らずに  
施設の子仲間いたわる瞳が温い

花活けてすつと気持が軽くなる  
調子よい話の中に鬼がいる  
静岡市 三浦 つね

新しいファイト燃やして靴を穿く  
沈丁花匂いで曲がる白い杖  
岡山県 伏見 すみれ

春うらら補聴器ゆるする花便り  
新婚の唄がこぼれる流し台  
兵庫県 奥野 テル

青い空つくしぼうやとひと休み  
特産のねばりで勝負山の芋  
兵庫県 中野 とよ子

古傷も思い出になる同窓会  
宝物捨てて一段成長し  
神戸市 岩田 信義

カラフルな旅の下着が出番待つ  
春日和 我流の茶席古い二人  
米子市 小塩 智加恵

川幅を子らにしっかりと教えとく  
北帰行名残りはつきぬ昼の月  
鳥取県 美浦 美代子

病む妻の話相手と頼まれる  
早くから避けてスピード見送りぬ  
泉佐野市 大工 静子

寝屋川市 坂上高栄

一人居の気楽さにある隙間風  
賛成の起立責任取れますか

日記帖生きざま少し書直し  
代筆と知りつ届いたラブレター

唐津市 入江喜久亭

岡山県 杉本伊久栄

針に糸通らぬままにさびている

鳥取県 今本早苗

三世代三猿になり丸くすみ

岡山県 平田たけよ

大勢の人に囲まれても一人

出雲市 園山かおる

晴れやかに空を見上げる葱坊主

岡山県 平田たけよ

たれ下がる藤の風情が夏を呼ぶ  
鎌の錆おとしてくれる土がある

大阪市 山北三三三

干しざおも少し低目に老母の腰

羽曳野市 徳山みつこ

あり得ないことがあり得る恋の道  
追加した分で二人がもめる酒

静岡市 大石たき

春よさよなら筍ずしを今一度

島根県 福岡博利

人目には不服ないよである不満

八尾市 向井しづ子

嫁がきてうちにも母の日ができる

島根県 福岡博利

若人の春の装い嬉々として

和歌山県 上岡正直

とまり木のお茶漬の味知るや君

吹田市 西岡豊

蓼科の旅ゆくバスをのぞく富士  
たのしみは一人ぼっちでいるま昼

和歌山県 上岡正直

古ぼけたわが家の椅子のあたたかさ

吹田市 西岡豊

盃に落ち花一つ浮かべ飲む  
山腹にスカイライン見えかくれ

米子市 中野弘子

完納の方にあげます還付金

和歌山県 西村和成

雑草が威張っていますうちの庭  
お見舞でいのち大事と教えられ

米子市 中野弘子

着飾って出番待ってる舞台裏

和歌山県 西村和成

栄転はないと確信してる椅子

米子市 中野弘子

退屈を見抜かれ猫がじゃれてくる

和歌山県 西村和成

山腹にスカイライン見えかくれ

米子市 中野弘子

栄転はないと確信してる椅子

島根県 菅田かつ子

雑草が威張っていますうちの庭  
お見舞でいのち大事と教えられ

米子市 中野弘子

島根県 菅田かつ子

こんなとき付録の孫が付いて来る

島根県 菅田かつ子

お見舞でいのち大事と教えられ

米子市 中野弘子

申し分ないがとさらにげられた

島根県 菅田かつ子

お見舞でいのち大事と教えられ

米子市 中野弘子

人責めた刑は己に皆還り

鳥取県 伊吹富恵

母さんはうるさいけれど大好きだ

十和田市 小笠原敏夫

農具庫の案山子も春の音を聞く

ボケてなお気配りみせる育ち良さ

鳥取県 小西五十鈴

顔にすぐ出るので盗つと酒できず

髪染めて鏡にこころ弾ませる

大阪市 乾哲静

一枚の葉書で足りる親孝行

親子三代同じ新聞読んでます

東大阪市 松山隆

カレーの味教えてくれるレパートリー

偶数の仲間そろわず弾まない

大阪市 小糸昭子

いらいらは赤信号の長さだけ

この縄の向うに見える赤い花

米子市 木村春枝

千代紙の人形遊び其座の香に

バス旅行呉越同舟歌も出る

寝屋川市 籠島恵子

あつちに内証こつちに内証でくる荷物  
過ぎ去った時間の方を悔いている

兵庫県 安達厚

勘定の違いで感情もつれ出し  
同窓会強く生きてる顔ばかり

鳥根県 岩田三和

二千年前を伝える地名考  
戸車を変えて玄関客多し

大阪市 川原章久

拝啓と書かぬ若さの便りくる  
息抜きの夫婦ぜんざい碗二つ

唐津市 江川青琴

好天気もつたない日の医者通い  
吉野ヶ里近くにあつてまだ行けず

鳥根県 松本聖子

春を背にコーヒー一杯欲しくなり  
雑草に生きよ生きよと励まされ

広島市 中村要

見栄えこそしないが蝶の好きな花  
パチンコへ文化の音を聞きにゆき

広島市 元林光子

孫三人連れてハワイへ珍道中  
天使とはとても思えぬ憎まれ児

寝屋川市 土井英明

きつちりと回る地球に乗っている  
カラオケへ通う老妻わしゃテレビ

陽が登る頂上きわめ感無量  
いつも見る夢の中での片想い

唐津市 山下剛司  
姫路市 山崎治夢

壁に耳 障子に目鼻老いのくせ

頑固でも筋金入りの生き残り

静岡市 青柳金吾

舗装した路でつまづく老いの足

趣味の会胸に住みつく人が出来

鳥取県 石倉美恵子

名も知らぬ野花へはなしかけられる

月末も常とかわらね妻の舵

鳥根県 児玉幸子

お茶摘みの手からみどりがこぼれそう

青々と田園つづく過疎の村

姫路市 服部一典

奇麗事言えばみんな嘘になる

仮住まい新築の夢共稼ぎ

姫路市 福島姫女

頬かむりの消毒武装で笑わせる

初めての子の武者人形床飾り

鳥取市 近藤秋星

自棄酒と知らず酒屋は持って来る

真直ぐに来た道だから曲られぬ

家中を物めずらしげ帰省の子  
欲捨ててかかれば整理早くつき

唐津市 野崎ハル  
松江市 浦辺静江

あてはずれ雲の行方を追っている

母の日にアルバム広げなつかしむ

榎原市 西本保夫

身辺に何か騒いでいる予感

反対の質問孤独確かめる

鳥取県 橋本孝由

同級生へ本気になった片思い

病室でいらいらしても治らない

鳥取市 谷口侑里

旗色が悪いと黙ることにする

黙っているつもりが何故か口挟み

松江市 安食友子

この骨がきんさんの喉いじめたね

さわやかな朝にコールの雀たち

東大阪市 大平太一郎

熱い茶にほっとひと息峠茶屋

生きている限り現役愚痴も出る

枚方市 濱田良知

ボケたとは思いたくない物忘れ

句の載った新聞わざと広げとく

口止の話に羽が生えて飛ぶ  
母と娘が肩寄せ憩う兎小屋

岡山県 森下 正子

羽曳野市 山本 たけし

四方山の話で白む通夜の席  
植木市 値段負けよと長談義

兵庫県 玉田 三重

世渡りを上手に暮す口車  
申し分ない話にも娘が不満

大阪市 藤明 満子

ひかり号 連休ボケでちよつとすね  
ポップコーンをハトの群れに孫消える

鳥取市 岩田 浩岳

栄転の職場への足かろやかだ  
新しい背広まだまだだぎこちない

箕面市 木村 天弘

入社時に愛の芽が出た同期生  
母の癖シャッター押されて目をつむり

◆ジュニアの部

香川県 小五 田中 菜実子

窓あけて春風いっぱい感じとる  
雨の音お目ざめですかカタツムリ

ご芳志 黒川紫香氏から句碑建立を記念して金一封を拝受  
いたしました  
川柳塔社

奈良新聞川柳大会

とき 7月26日10時  
ところ 大神神社記念館  
宿題と選者 (各題2句)

「鈴」 石田 常念選  
「蔓」 鶴本むねお選  
「音」 福田 秋雄選  
「血」 宮口 笛生選  
「麓」 杉森 節子選  
「町」 石岡 正司選  
「強」 片岡つとむ選

席題1題・11時半締切

会費 2700円(昼食・発表誌)

◎欠席投句は500円同封  
〒630 奈良市北市中町71  
杉野 睦朗へ

第2回 全国紙上りんご川柳大会

題 「りんご」 葉書1枚1句(1人2枚)

住所・氏名・柳号・電話番号を記入

投句先 〒036 青森県弘前市元大工町50-15

大手門歯科内 川柳塔あおもり

締切 8月31日(月) 発表 11月5日(木)

選者 1次 川柳塔あおもり 波多野 祥二

2次 川柳塔社理事長 橘 高 薫 風

発表誌 川柳塔、川柳塔あおもり

表彰 入選句50名に青森りんご1箱を贈呈

主催 アップルフェア推進協・川柳塔あおもり

後援 社団法人 全日本川柳協会

# 川柳と健康水

同人アンケート

## お祭り大好き

林 荒介

お祭りが好きであちこちとよく出歩く。土曜日の十一時まで仕事をして、十一時四十八分の「やくも」の客となり、日曜日の夜は家の風呂に入る。まだ仕事があるから月曜日を遊べる身分ではない。こんな具合だから大方の大会は、句会場への往き来で終ってしまふ。ときには疲れて木曜まで無為に過すこともあるが、不思議と金曜になればしやんとしてくる。そして土曜日になるといそいそと出掛ける。大会があるからそのお蔭でなんとか参加するだけの体力を持続しているようだ。句作りよりも出合いがあり、触発され、刺激され、今の川柳を考えるような会なら満足して帰途につくことが出来る。ときには意に添わぬこともあるが、大会はお祭りなんだからと

変に自分を納得させる。自分の川柳を考える土俵は大会に参加するのが一番だと思っている。抜けた、抜けないは次元の違う問題だ。こんな具合だから来週もお祭りに参加しようと思つている。この句会巡りが私の健康法かも知れぬ。

昨年の夏まだ目の見えぬ小犬を拾いクマゴロウと命名した。喉のあたりに白毛の部分があるだけの見事に黒い犬だった。天気がよくて気が向けば一時間余り犬に連れられて歩く。標高百米弱の米子城趾に登れば大山は目の前にあり、背後の中海を夕陽が染めてくれる。

## 私と水

黒川 紫香

私の健康法と言えばお茶、あるいはコーヒ―より水を好んで飲むことである。

晩春いずも大会へお伺いした時、選者でも

ない私が、ご挨拶をするだけで別席へ座らされた。大会の世話をされていた一人が、温いお茶を入れて持つて来て下さった。有難く頂戴しようとする、それを見ていた堀江芳子さんが、

「先生にはお茶より水をあげなさい」

と制してわざわざ持つて来られた名水を汲んで出してもらった。それには古い話がある。

もう十数年前になると思うが、正本水客君の案内で木次の観桜句会に二人で出席した折句会前に初めて堀江ご夫妻の家へ立寄った。例によつて行届いたおもてなしで、まず風習による緑茶が出された。私は濃いお茶が苦手だったが、添えて出たお菓子が目かつたのでつい「おいしい」と言つと、つづけて二杯目が出た。初対面であるので遠慮もできず、頂くと三杯目が出た。これには参つて辟易している、側にいた水客君が笑いながら、「紫香君にはお茶より水の方がいい」と言つて、いつも水客宅へお邪魔をすると奥

さんが心得て「黒川さんには、お茶より水がよろしおまん」とまず水を出してもらっている話をして以来、芳子さんも私を見ると何より先に水を出して下さるようになった。私がお水を飲むのは、ごく自然に好きで小さい時から飲みはじめ、それが健康につながっていると思うようになった。今はそれほどでもないが、一日一升くらい飲む日がつづいた。

## 健康と川柳

### 仁部四郎

小学校への通学を親が本気で心配するほどの病弱であったのだが、戦中戦後に少青年期を過したおかげをかみしめている。粗食と旧制中学から新制高校の六年間を、往復八キロを毎日歩き、田畑や山林の仕事の手伝いをしたことが私の体力の貯金になってきた。

教員の健康は、教室や運動場で大きな声を出していると、最低必要な線は保てるものが、管理職になると「ねこなで声」が要求されてまことよろしくない。「ねこなで声」に意欲的ですます元気になる人もいるが、そういう人は、式辞も一分のスキがなくて、ほんとうに感心させられる。

川柳に手を染めてから十年以上の時間が流れて、作句の腕前はともかく心の健康の維持には効果的な時間であった。他流試合のつもりであちこちの句会へ出かけるたびに、会費等の諸経費で入選句数を割算する興奮を楽しんでいる。「思うこと言わざるは……」であるから、川柳は役にたつ。川柳に逃げるとは卑怯であるというお叱りがある方面からは受けが、川柳も芸のうちで、当方としては自分の存在を賭けているわけだから、そこに精神の緊張はある。そしてまた、「定年になったらボケ防止に川柳でも始めるか」というお馴染みのお声には微笑を返すのみである。

### 病氣と仲良く

### 山口美穂

今日は金曜日。ハンドバッグのほかに頭陀袋を持つ。この袋の中には、水着、バスタオル、ゴーグルが入っている。

「お母さん、ごめん。今夜はおそいよ。スイミング……。行つて来ます」と大急ぎで出かける。神戸は坂の町だ。国道二号線まで石屋川添いに公園の中を歩く。いい年のおばさんが、ヤングのようにウォーキングシューズをはいて、でももうヒールのある靴ははけない。

勤務を終えてからスイミングスクールへ。トレーニングのあとコーチの指導のもとに、五百米ぐらい泳ぐ。なかなかうまくならない。

特発性血小板減少性紫斑病（難病に指定されている）になって二十年近くなる。二年半の入院生活。看護婦の私がこの病氣になったことは、死にも等しい気持だった。不治の病と知っているから。今のようには働き、また泳げるようになるなんて想像もできなかった。

現在、血小板は5万（正常値は13万から35万）ぐらいしかない。医師からは頭の中で出血したら大変だからと言われるけれど、この程度の紫斑だったら大丈夫、と自己診断している。そしてプールの中へ仕事のストレスを捨て、とても爽やかな気持で帰途につく。泳がなかった週末は、宿題を忘れたような気持で病院で患者さんが「看護婦さんはいつもお元気で羨ましい」と言つて下さる。「ええ、お蔭様で」と言つておく。月一回、血液検査をして、いつも病んでいるけれど、心は元気で

病気を忘れていた。

川柳と病を友とし看護職

美穂

## 健康な川柳を

小島 蘭 幸

私は家にいる時は、ある部屋のいつも同じ場所にいます。書棚に背をもたれて、座卓に左肘を置いて、テレビを見たり、CDを聞いたり、新聞を見たり、本を読んだりしています。休みの日は、それこそ朝から夜まで一日中ボーとしていることもあります。

こんな私ですが、今日まで健康で来られたのは、川柳があったからだと思います。作句する時の集中力は、ともすれば怠惰になりがちな私の脳を適度に刺激してくれますし、雑詠の選句、原稿の清記、月末発送と忙しくすることによって、逆にストレスを発散しています。

そして何といつても、川柳の楽しみは大会参加です。いい作品に出合う川柳の旅は、私にまた、働く力を与えてくれるのです。だから自信と力を与えてくれる川柳は、私を少しずつ大きくしてくれるのだと信じることにしています。

すみれたんぼぼ私の夢が広がるよ 紀

浄土への日は花嫁の思い抱く シゲヨ  
前句は、中学生の作品です。後句は、八十歳を過ぎてから川柳を始められた方の作品です。どちらも素直で、明るくてキラキラ輝いています。

人間ドック絶対調の日を選ぶ 蘭 幸  
四十四歳になった私の作品です。一度、人間ドックを受けてみたいと思っているのですが。私は何歳になっても、心だけは健康な川柳を作りたいと思います。

## 無手勝流

藤村 女

私の健康法をテーマに原稿を書くよう依頼されましたが、健康法など考えたことはありません。疲れたら何も考えずに寝ることだけです。健康は生れつきだと思います。これと違って運動するでもなく、食養生も考えたことがありません。食べ物に好き嫌いはなく、こんな健康な体を生んでくれた両親に感謝しています。

小学校からずっと学生時代、陸上選手として他校との対抗競技にも出場しました。陸上、

バレーボール、卓球そして水泳と学生生活は楽しく、十年間一日も欠席せず、小学校・中学校と皆勤賞で卒業し、今日まで病氣知らずちよつとした風邪くらいで薬も飲むこともなく、八十歳を迎えました。食べ物は、肉や魚よりも野菜類が好きで果物は何でも、中でも柑橘類は毎日、甘い和菓子より豆やあられおせんべいが口に合い、やっぱり田舎者かなと思います。

私はO型、娘も孫娘もO型です。みなが楽天家で、あまりくよくよせず、何事もあきらめの早い私は余り苦にせず、何とかなるとどんな時でも泣言は言わず、どんな噂も聞き流して自分を励まして来ました。

健康な両親からは健康児が生まれますが、私の両親も九十歳半ばすぎまで元気でした。一本の木に例え、枝葉の栄えることを大変喜んでくれた両親でした。子供三人に孫十一人、曾孫二十一人の顔を見て逝きましたが、私はまだまだ孫の結婚も曾孫を見るまでは天の命に従い、足の丈夫な間と川柳句会へ月のうち十二、三か所、出掛けております。お小遣の続かきり、地方の川柳大会へも出掛けるつもりです。抜けても抜けてなくても、これも受け封じになると思っています。

子どもたちに迷惑を掛けないよう、川柳を

楽しみ、頑張つて体にはくれぐれも気をつけ  
て長生きして高野山へ。これが明治女の生き  
方です。

## 私の健康法

内海 幸生

「私の健康法」について随想を書けと言わ  
れて愕然とした。原稿を書くことについてで  
はない。私は、健康法なるものを持たないか  
らである。

「そんなものはありません」とも言えず、  
困つた。しかし、よく考えてみれば、ますま  
ず健康的に生きていくことは確かである。そ  
こで逆説的に探つてみた。

まず食へものについて、好き嫌はなく、何  
でも食べるようにし、特に米酢を多く採るよ  
うにしている。下手な栄養剤よりも、米酢の  
方がはるかに効くそうである。醤油さしに米  
酢を入れておき、サラゲやフライ、天ぷらな  
どにサツと振りかけるだけ。慣れると少々多  
くかけても平気になる。

信条としては、「心豊かに」をモットーとす  
るが、私ごと凡人にはとても難しいので、  
「人間万事塞翁が馬」を信じ少々ひどい目に

逢つても「必ずいい日が来る」と信じ、また  
少々いい目に逢つても、反動を恐れて有頂天  
にならないようにつとめている。悪い事をせ  
ず地道にやっておれば、お天道様はお見通し  
なのだ。

「山より大きな獅子など居るものか。つ  
まらぬことによくよするな。そう思つて暮  
らしていたらブクブク太つてしまった。

「これは健康的ではない」。反省

## ジヨギングと川柳

岩佐 ダン吉

「ああ、趣味は川柳です」。そして、あな  
たの胸を打つような句をさらさらと披露……  
なんてことは一生ないでしょう。

さて半年にも及んだ椎間板ヘルニアの手術  
と入院を終え、復職してやつと一年になりま  
した。元気なころは、「四、五日入院でもさせ  
てくれたら川柳も百句ぐらい作つたで」と  
思ったこともありましたが、どうして、どう  
して。

車椅子ぐらしに寝返りさえ激痛が走る中を  
むなしくベッドに横たわる日々。思ふのは、  
「もう元の体にはなれんのやないか」の不安

ばかりでした。

今は週一回の通院、先生は「しつかり、リ  
ハビリと歩行で腰に筋肉をつけること、体重  
を増やしたらあかんで」と言ってくれます。

昼休み、職場ちかくの大坂城で始めた一万歩  
の歩行が、いつの日かジヨギングにかわつた  
のは正月明けからでした。寒風の中をとほと  
ぼと歩く小生をすいすいと追いぬく白い息の  
ジヨギング組。「俺にもできんことあるかい」  
……ついに最近は一平均五キロの「ジヨギン  
グ症候群」となりました。

先生は「まあ無理せんかったらな、ええこ  
とやけど君も頑固やなあ」と笑っていました。  
でも本当は、最初の二キロぐらいは「いつ  
休もうか」ばかり、結局は再発への恐れと、  
「い途中でやめたらもう走れんのでは」。  
こんな思いも病気でしようかねえ。幸い本社  
句会で脇取をやらせてもらい、緊張と同じ姿  
勢での一時間余を無事に勤めて、「とちり」  
を除いて「少し自信もつきました」。

ジヨギングと川柳、これからはちま  
イペースでやろうと思つています。

川柳塔きやらばく忘年句会 12月6日午前  
11時から米子駅前・米吾ビル6Fで開催いた  
します。お越しをお待ち申しています。

# 銀河系

## 河内天笑選

名古屋市長 藤井高子

ハードルを下げてわたしの余命表  
常識で他人が夢を斬りに来る

藤井寺市長 高田美代子

父の忌ややっぱり雨になりました  
無駄骨かも知れない今日をひたすらに

倉吉市長 渡辺善句

春はうきうきすぐばれる嘘ついでいる  
産声は八十ホーンいや百ホーン

和歌山市 西村和成

多数決そんな野蠻がまだ通る  
食欲な蟻が迷子になつていて

堺市長 高橋千万子

秒針が心に刺さる待ちぼうけ  
俸せが恐いのなんてウソでしよう

松原市長 小池しげお

霊柩車追い越してゆく救急車  
辛抱した患者に抜いた歯を見せる

米子市長 足立由美子

顔のしみ眼鏡をかけて確かめる  
遊びから覚えた知恵は忘れない

鳥取市長 橋本孝由

アルバムに四角四面の顔がある  
古い二人金婚式で新芽出す

青森市長 工藤甲吉

年金暮らしゴルビーもままならず  
政治家の名刺なんかは欲しくない

鳥取県 新家完司

奥の手を出しなよ弱いジャイアンツ  
鍛えればなんとかなるか五十歳

富田林方 藤田泰子

青信号ばかりで眠くなつてくる  
泣き顔は写したことの無い鏡

箕面市長 椎江清芳

居士信士仏の里も金次第  
披露宴レンタル衣装幕が開く

鳥取市長 美田旋風

愛情に異変赤ちゃん減ってくる  
皿割って晴れる仲ならこわれまい

羽曳野市長 徳山みつこ

アルバムが一番立派はじめの子  
飽食に透けて見えてるこわい明日

大阪市長 榎本露児

中年が抱きつづける不発弾  
かき氷つついて女嫉妬する

岡山県 矢内寿恵子

沈む陽がエネルギーに明日へ燃え  
風の刑火の刑耐えて来た喜劇

西宮市長 西口いわゑ

浮かれてはならぬ酒だと言ひ聞かせ  
その底に仁王は笑顔ためている

鳥取県 土橋はるお

質屋から戻った帯を締めてみる  
善人の脇芽を取り木してみよう

竹原市長 信本博子

聞かれても歳は言われない赤い服  
頂上で引きおろされる夢ばかり

岸和田市長 古野ひで

老いてなお手さぐりながら道を撰り  
死亡欄まず齢を見る癖がつき

高槻市長 川島颯云児

職安に捨て値で首を売ってくる  
充電中らしい女房の高いびき

大阪市長 今西静子

祝い金見栄と惰性で包む額  
教育のひずみ大金行き来する

静岡市長 柳沢たま

老いの身へ届く手紙は役所だけ  
寂しさへホリユーム上げて見るテレビ

羽曳野市長 芦田絢子

駅名をみな誦んじて旅はせず  
狭い道ひろげ人情うすくなり

大阪市 松尾 柳右子

観客もこころ新たに入る中座

手料理が上手で夫婦肥満きみ

大阪府 靱山 隆

踏ん切りつかない牌が一つある

飲む会のハガキ財布へ四つに折り

奈良市 米田 恭昌

お別れに記念切手が貼ってある

鳥取県 乾 喜与志

母の日に父もならべて慰めよう

米子市 八木 千代

錯覚の延長線で咲き満ちる

八尾市 高杉 千歩

たわむれの愛よ恋よと売れ残り

大阪市 尾崎 黄紅

老いの恋終るとなりが越していく

熊本県 高野 宵草

ハンドルを握れば邪魔な奴ばかり

青森市 漆戸 凡凡子

医者だって死ぬさ聴診器をまるめ

西宮市 奥田 みつ子

友情もたつぷり煮詰めいちこじゃム

豊中市 安藤 寿美子

痛いこと言われた時はにっこりと

和歌山県 藤井 春子

紀の川の流れに沿って娘は嫁ぎ

今治市 渡辺 南奉

こだわっている間に水を開けられる

善人の仮面ぬげないまま生きる

唐津市 山口 ふさ子

台風の爪跡 林檎の墓深し

広島市 中村 要

投票をしたくないのに選挙権

唐津市 浜本 ちよ

すたこらと小雨にちり紙買いに行く

米子市 小西 雄々

脳死ではまだ弔電は打てません

唐津市 久保 正敏

念力をケラケラ嗤う木のスパーン

出雲市 竹治 ちかし

かくれんぼ隠れたままで日が暮れる

鳥取県 江原 とみお

水が清くて奥の手が出しづらい

枚方市 海老池 洋

あげ潮にいつまでのれる高笑い

鳥取市 西原 艶子

黙りこくくなって息子の恋すすむ

大阪市 川原 章久

鼓笛隊の先頭の娘が母になる

和歌山県 楠見 章子

ひと声をかけて世間を広くする

和歌山県 細川 稚代

サイフォンがポコポコ鳴って独りの夜

米子市 小塩 智加恵

それだけの人と思つて仕舞風呂

鳥取県 権代 康女

ふり向いて亡母と似た人見送つた

大阪府 稲本 凡子

長生きの秘訣時どき破ります

今治市 越智 一水

悪いことばかりでないぞ回り道

和歌山県 桜井 千秀

偉そうにしてはる偉いならしい

鳥取市 植田 一京

飲み助も哲学持つて飲んでいる

出雲市 板垣 夢醉

句読点打つて夏バテせぬように

川西市 松本 ただし

パンソウ膏効かなくなっている地球

大阪市 板東 倫子

逆差別もあるよセクハラの先走り

熊本県 黒田 緑

世の中をどう変えられる口説の徒

十和田市 斉藤 島

神木の杉にいたたく花粉症

豊中市 田中正坊

朝刊の笑顔絵になるやわらちゃん

和歌山県 古久保 和子

貸し農園 窮屈そうな葱坊主

鳥取県 土橋 螢

米を食う虫が外食ばかりする

黒石市 相馬 一花

米子市 茂理 高代  
お菓が糊癩玉も脆くする  
宇部市 中村 三良

山彦も帰つて来ない山の荒れ  
島根県 加本 義良

真直ぐな道に地雷が埋めてある  
鳥取県 上田 俊路

別れるときめて静かに傘たたむ  
西宮市 林 はつ絵

ライバルの花がきれいで見とれてる  
静岡市 沢田 きん

何もかも胸に納めて見て居る  
唐津市 山口 高明

両親が居るのに少年道を逸れ  
大阪市 神夏磯 典子

糠味噌は嫌いキッチン飾りたて  
兵庫県 奥野 テル

結び目は褪せてもかばい合うくらし  
岡山県 小林 妻子

借金を返す頑張りとも言えず  
尼崎市 春城 年代

人の死を惜しむにせわし起き伏しよ  
大阪市 藤田 頂留子

もう一寸待って見ようか花時計  
八尾市 秦 正子

お座なりの温い言葉に増す不安  
兵庫県 北川 とみ子

温かい言葉へ鬼も舞い戻る

海南市 三宅 保州  
井戸掘った人を忘れていませんか  
桜井市 岩本 雀踊子

風よけの亡父の大きな木が繁る  
出雲市 小玉 満江

ぬけ道を知っているのが気が軽い  
広島市 流 奈美子

敵味方しよせん人間ゲームです  
芦屋市 根来 敬

使い方知らぬ道具が矢鱈増え  
岡山県 福原 悦子

開き直って親子の想い響きあう  
倉敷市 小野 克枝

欲のない顔で眠っている妻よ  
松山市 谷 真風

ふるりの山の絵ならばすぐ描ける  
鳥取市 田賀 八千代

万華鏡すべて私の正体よ  
今治市 月原 宵明

名を知らぬから野草として抜かれ  
倉吉市 奥谷 弘朗

もの好きがいて世の中が面白い  
鳥取県 石谷 美恵子

ふくらんだ財布をわそわしはじめる  
和歌山市 山川 克子

正論を吐いて上司に疎まれる  
十和田市 阿部 進

信号が青でも保証ないのち

鳥取市 前田 一枝  
時折はきれいな嘘もついてみる  
大阪市 津守 柳伸

念入りの化粧へ自答繰り返す  
鳥取県 美浦 美代子

高望み痛み知るまで見守ろう  
守口市 結城 君子

べらのいろ褒めてそのあと煮てしま  
東大阪市 今岡 貞人

年寄りとして奉るのが気に入らぬ  
山 和歌山市 内芝 登志代

札束に溺れる弱さ嗤えない  
西宮市 亀岡 哲子

受話器から私の声が留守と言う  
和歌山市 堀畑 靖子

名ばかりの役職あくびしてる椅子  
米子市 田中 亜弥

ふりだしに戻り自分を問い糺す  
茨木市 堀 良江

お化粧を落とせばどんな顔だろう  
鳥取市 近藤 秋星

春たけなわ猫も朝から出たつきり  
唐津市 中村 弘

標識をつけた魚で逃しやり  
鳥取市 春木 圭一郎

スナックに焼け木杭が置いてある  
米子市 中野 弘子

特売日いつもなじみの人に会う

和歌山 山田 高夫  
善人と自認はせぬがお人好し

和歌山 山口 三千子  
警報が出ててもコールへ逢いに行く

大阪 渡部 さと美  
帰省子の家にはじつとしておれず

七尾市 松高 秀峰  
お開きにしようそろそろ荒れて来た

鳥取 谷口 次男  
野山駆け葉草採って自由です

岡山 千原 瑛  
いずみさんいい曲たくさん有難う

姫路市 大原 葉香  
腹立ててみてわが足麻痺つづく

姫路市 福本 好花  
パツと立つ噂で燃えた茶のみ友

守口市 森川 まさお  
下降する伊丹でやつと喋り出す

大阪市 中西 兼治郎  
檀家より花見る客の多い寺

富士宮市 渥美 弧秀  
夕映えの富士眼のあたり梅雨明け

広島 田村 新造  
歯ごたえはさすが地物の蛸の味

有田市 松井 かなめ  
潮干いてあおそ取る手に水温む

岸和田市 芳地 狸村  
むずかしい話をほぐす大阪弁

唐津市 浜本 義美  
マネキンが肌寒そうに夏を招び

大阪 山北 三三三  
腐らない食べ物なんて不自然よ

熊本 遠山 夏生  
長崎で雨待つ訳にゆかぬ旅

岸和田 三輪 通彦  
等級が消えて多彩なお酒の名

唐津 仁部 四郎  
一生をキリスト様と四つに組み

兵庫 中野 とよ子  
無口だが真実だけは曲げません

寝屋川 平松 かすみ  
神様がお住みの山も削られる

旭川 朝倉 大柏  
狂えない時計に同情してしまふ

兵庫 玉田 三重  
あたたかい言葉に貝も口を割り

松江 松浦 登志子  
太ったと言われ落ち込む妻であり

和歌山 青枝 鉄治  
誘拐とエイズがこわいバスポート

有田市 生馬 芙美子  
一つ知り二つ忘れて明日に向く

熊本 増田 一乗  
外孫のほっぺの温味忘れず

▼お願い 本欄への投句は、川柳塔用箋に

3句を連記し、毎月15日までに到着するよう  
川柳塔社事務所へお送りください。(選者)

第十一年度

夜市川柳の題と選者

第一回	話	高杉 鬼遊選	6月末
第二回	大きい	谷垣 史好選	7月末
第三回	筋	西出 楓楽選	8月末
第四回	子供	小島 蘭幸選	9月末
第五回	耳	小出 智子選	10月末
第六回	粗品	小松原爽介選	11月末
第七回	波	寺尾 俊平選	12月末
第八回	旨い	田頭 良子選	1月末
第九回	声	田中 好啓選	2月末
第十回	タオル	中尾 藻介選	3月末
第十一回	出る	橘高 薫風選	4月末
最終回	客	西尾 栞選	5月末

問合せ先

〒593 堺市堀上緑町二丁十六―三  
堺川柳会 河内天笑  
電話〇七二二―七八―四七〇六

# 尚香のむ 八木千代選

## 嵐の向こう遙かなり 出生地

西宮市 林 はつ絵

「嵐の向こう」の導入部から凄まじいほどの嵐のざわめきが、荒涼たる野原が、実景のように現れてきて、はつ絵さんと一緒に私まで彷徨うことになりました。今は遙かな出生の土地ながら、粉れもなく受け継いで土着性から離れることのない自分。激動の昭和中期を乗り越えた幼年期少女期、その頃の山なみ川の流れもすっしりと身の奥に据わっているのだけれど、今その故郷を望むとき、眠っていた出生の血が噴き出るように懐かしく騒ぎ出すのも事実。併し、現在地の此処こそ我が生の場所と思ひ定めたとき、やはり故郷は遙かなりと詠わずにいられない作者の感懐が、ぎりぎりの省略で実に見事に描き切っております。嵐に似た年代記だったのでしょいか。

## どの道を行こうか森を抜けてより

高根県 松本 文字

それは必死で樹海をくぐりこの暗い森も抜けることができた。それなのにこの虚脱感はどうだろう。ほっとしたのも束の間、私はこの平らな風景のどこを歩けばいいのだろう。方向性まで失ったのかと、文字さんの独白はつづきます。このまま一直線に行けはしないこと。それは過去の試練からも判っています。脅えが先に立ってどうしても足が踏み出せないのしよかね。同じ道を通ってきた仲間には熱くなる光景です。内心はびくびくしながらでもそれでも一歩なりと前に進まねば、抜けたと思ひこんだ森にまた引きずり込まれてやっとなかぎりません。迷い子になったと考えないで、神さまの眼鏡にまわってやっとなかぎりません。迷い子になったと考えないで、神さまの眼鏡にまわった貴女ですが、回り道だったとしても、案外な発見と優しい世界が待っているはずですよ。

## 背伸びしてわが骨壺の行方など

大阪市 北川 弘子

## 差出人不明 落ち着く場所がない

和歌山市 桜井 千秀

## 雨後の庭 生臭きもの遠ざけて

和歌山市 後藤 正子

魂がときどき狂うけど まとも

亡母の部屋にわたしのものが増えてゆく

血の気の失せた畳をかばう足の裏

サーブ権 握ったまではある記憶

祈禱書をひらくと風が吹いてくる

笑顔落として女の春はまだ寒い

書き終えて蘭のにおいの恋しかり

シャワーは全開 今日の一と日を越すために

しばらく時間ください 化粧あと少し

句説点は正確に打つペンの先

個性派のきゅうりパケツに盛られても

えんどうを剥く楽しさを知っている

包丁研いで大根の首切ってみる

母さんをかばうと父が礼を言う

工程も踏まずに恋は出来ません

触れるのと触れてみるのとの違いなり

桃だから高い所へ置いておく

安定剤に縋る弱さを抱えている

明日の陽をまだ疑ったことがない

夕焼けの道で遊んで熱くなる

その嘘を育て間違ひなく夫婦

稜線があるからみんな越えてゆく

娘よ少し私を越えてくれまいか

青空と私の挟間 鳥一羽

時には間違ひ電話にもほっとする

りりやんのほどけるように気がほぐれ

堺市 板野 美子

和歌山市 木本 朱夏

米子市 政岡日枝子

和歌山市 小倉 アサ

和歌山市 西山 幸

堺市 池 森子

和歌山市 福井 桂香

名古屋市 藤井 高子

米子市 鹿島 松子

宝塚市 丸山よし津

和歌山市 福本 英子

大阪市 西出 楓楽

岡山県 富坂 志重

米子市 新 正子

和歌山市 山川 克子

堺市 桜沢あかり

米子市 茂理 高代

尼崎市 春城 年代

和歌山市 榎原 公子

和歌山市 寺沢みどり

倉敷市 小野 克枝

米子市 中井 ゆき

和歌山市 田中 輝子

米子市 木村 春枝

大阪市 鈴木 節子

米子市 青戸 田鶴

大事なだいじな私の手もう皺だらけ  
大きな机 父が残してくれたいた  
春夏秋冬 城の姿は我が姿

きみどりに染めかえられて森を出る  
打球音グラウンド近き一人部屋

綱なしに三步先行く犬を伴れ  
もう歳と足かせ嵌めぬことにする

置物になる覚悟ができて焦らない  
再職へ古い帽子が大きめで

花野菜 大学教育受けた顔  
最後まで投げない匙を磨いてる

五人六人笑顔を貰う味方だと思ふ  
桜散るその去り際のあざやかさ

紙コップ一回きりの唇をうけ  
陽炎の如き愛抱き逢いにゆく

花びらに占っている外は雨  
君などと呼ばれる風の吹き返し

男性の化粧お公家がそうでした  
神様仏様 素通りしないでくださいな

がらくたの中から不意にオルゴール  
なにか満つものを求めて輪をくぐる

さわやかな火照りを旅の前夜から  
抵抗を少し感じて踏み切ろう

親と子のすきまを垣間見る休暇  
お隣の刺がぬけないのはわかる

素人に指し値で買えと言われても

西宮市 奥田みつ子  
米子市 石垣 花子  
大阪市 神夏磯典子

堺市 山本 半銭  
有田市 松井かなめ

米子市 林 瑞枝  
和歌山市 堀畑 靖子

大阪市 本間満津子  
羽曳野市 吉川 寿美

寝屋川市 宮崎 菜月  
寝屋川市 堀江 光子

米子市 金山 夕子  
富田林市 藤田 泰子

熊本市 永田 俊子  
西宮市 門谷たす子

松江市 安食 友子  
寝屋川市 岸野あやめ

茨木市 堀 良江  
岡山県 千原 理瑛

米子市 沢田 千春  
鳥取県 石谷美恵子

富田林市 片岡智恵子  
具塚市 池田寿美子

吹田市 栗谷 春子  
寝屋川市 籠島 恵子

鳥取県 羽津川公乃

約束はとうに忘れた藤の花

意のままにならぬ帽子が一つある

対岸の火事へ無言のテイ・タイム

追い追いに用捨するもの身のまわり

幕のない芝居何時まで演じる気

正直に言えばあなたにふられそう

目立たない人へひそかなファンです

連れ舞の蝶を画き足す神の絵図

急に逢いたくさせる緑の果ての人

自分史へ先ずはなよなよ苗を画く

想い出を逃がす五月の風の中に

めちやくちやを承知の愛を受けとりに

めがね拭いても拭いても曇る不信心

成長の記憶の中の紙兜

結び目が甘く零れた内緒事

にぎやかな感情線をもつ人よ

友を待つ時間に軽い本を読む

肩書きのピンをはずせば温かい

ポケットにジョーカー一枚 旅の空

子育ての赤いたすきは娘に渡す

春愁や西に東に子を想い

ゼロ幾つ並んで幕が閉じてゆく

木綿針かんにん袋縫い溜める

母逝って空気の意味が判り出す

投句先 〒683 米子市花園町14

お名前を書き忘れる方があります。良い句だけに惜しまれます。

倉吉市 淡路ゆり子

米子市 光井 玲子

大阪市 津守 柳伸

米子市 白根 ふみ

姫路市 丁坪サワ子

和歌山市 内芝登志代

和歌山市 森 茜

藤井寺市 高田美代子

岡山県 山本 玉恵

兵庫県 倉垣 恵美

羽曳野市 芦田 絢子

鳥取市 小谷美つ千

鳥取市 西原 艶子

大阪市 日阪 秋子

和歌山市 古久保和子

大阪市 渡部さと美

米子市 中野 弘子

鳥取市 田賀八千代

竹原市 信本 博子

芦屋市 黒田 能子

岡山県 矢内寿恵子

和歌山県 細川 稚代

兵庫県 酒井 靖子

香川県 新川マサエ

八 木 千 代



## 私の夏

松本文子

カナカナ、カナカナ……。七月も半ば、夕方になるとこの蟬の声が地の底から湧き、野を山を地球全体を覆うように私には感じられる。昭和六十年の七月、夫は亡くなった。茫然自失の中でこの蟬の声だけが耳鳴りのように残っている。一ヶ月後、ぼんやり眺めていたテレビにお盆の帰省客の様子が写っていた。両手一杯に土産を抱えた笑顔の人達……。くそと私は思った。(電車なんか止ってしまえ、飛行機なんか墮ちてしまえ、いくら待っても私の所へ帰ってくる人はもう居ないのだ)。

しかし私は翌日のニュースを見て仰天した。日航ジャンボ機墜落。私のせいだ。何という罪深い事をしてしまったのだろ。(許して下さい。一人でも助けて下さい)と私は必死に祈った。所が間もなくテレビに、隣町に住む、川上慶子ちゃんが手を振って助けを求

めている姿が写った……。―その慶子ちゃんは今、昨年高校を卒業し、福祉関係に進みたいと上京されたとの事である。

お盆には仏が帰るといふ。親しい仏に会う事は辛いものである。顔で笑って心で泣いてがうまく操作出来なくなる。そしてまた両耳をふさいでも聞えてくる耳鳴りのような蟬の声。忘れる事も慣れる事も逃げることもさえない。出来ない、私の夏である。

## 凌霄花

山川克子

愛おしきのうぜんかずら様  
夏ですね。さあ貴女様の出番ですよ。

一夏を激しく咲き誇り奔放に咲き乱れては青春を謳歌するような貴女様をみて、私はまた小さなこの胸一杯ノスタルジアに浸ります。痛く感謝しております。

貴女様の存在を強烈な印象を初めてこの胸に抱いたのは、たしか小学二、三年生の頃だったでしょう。私や妹はやさしかった祖母に死なれて淋しくてつらくて、両親にどこかにおばあさんを売っている所はないものだら

うかと、ねだり聞いて、遠縁のおばあさん宅を訪ねることになったのです。

そこはとても広い大きなお庭で、岩のような苔むした庭石へ谷水が竹筒を通してチヨロチヨロと、池の鯉が時々チャボンと鱗をみせて、その横に何と見事なのうぜんかずらが咲き乱れて私達には別世界のような光景でした。

「このおばあさんを売って下さい」。私と妹は大声で指さしましたが、やさしい伯母と丸くて可愛いおばあさんは、縁側でにこにこ座ったままで菓子をお勧めするだけでした。私達は泣きながら菓子をよばれて帰ったものです。

幾歳月や廃墟と化して今は雑木林のあの家の大きな庭石は？あののうぜんかずらは？それからものうぜんかずらにまつわる想い出は一杯ありますが、何故か私はこの花に魅かれてやみません。夏が来れば想い出す諸君今夏も又、狭いながらも私の庭では、のうぜんかずらが咲いてしばしをメルヘンの世界へと誘ってくれることでしょう。

### 川柳塔用箋(一冊二〇〇円)

送料 一冊二五〇円 二〜三冊三六〇円

※数量がまとまれば「ゆうパック」で

水煙抄

# 秀句鑑賞

—6月号から

三宅保州

夕陽みてふと引退を考える

木村親路

テッサンがまだ画架にある陽のかけり

松山隆

謎解きが出来ないままに陽が沈む

八木芳水

考える輩である人間は、煩惱の動物とも言われる。思索と悩みが夕陽をみて増幅される。そして成長してゆくのだろうか。三句とも哲學的な厳しさと反面、謙虚さがうかがえる。

人様に言われて直す髪かたち

北川一進

三越の買物袋買うて来る

大西文次

二句とも、世間体を気にして、見栄っ張りな人間模様が、巧みに詠まれている。

気が向くと北側の窓拭いている

足立由美子

北側の窓は目立たないが、けっこう汚れている。世の中、陽の当たらない場所にも目を向けたいもの。

じっくりと煮込めば答出るだろう

中尾まゆみ

急いで事は仕損じると言うように、時間をかけて煮込めば自ずと答が出る。しかし、その答がいつも正解と言いつれぬのも世の常。それなりに満たされていて気付かない

沢田きん

水も空気もきれいで、周りは良い人ばかり、家庭は円満—そのしあわせに気付かないと、不満と不幸がはじまるかも知れぬ。

平凡に次男の嫁で終りそう

籠島恵子

作者は諦めているのか、あるいは不満か、はたまた満足なのか、それともその何れものか。詮索はよそ。平凡に勝る幸せなし。

何時か読むつもり切り抜きまた増える

円増純子

切り抜きのスクラップをしている者には、全く共感させられる句。直接、役立たずとも切り抜きをする習慣が尊い。人生には一見無駄なようでも肥やしとなり糧となるもの多し。

ひび割れた茶碗 元には戻らない

玉置当代

人間関係もしかりと作者は言いたいのだろう。しかし、「ひび割れた茶碗は捨てて新しいのを買えばよいが、人間関係はそうはいかないところが難かしい」という含蓄まで作者は読んでほしいのだと思う。

古紙回収するかとみせて遠ざかり

海老池洋

誰でも経験があり、微苦笑させられる。タクシーしかり、車内販売しかり、必要なときは来ないもの。人生そんなにうまくはゆかないものという穿ちが効いている。

風邪ひきの最後を妻がしめくくる

尾宮弘治

この妻はきつと良妻である。家事放つたらかしの悪妻ではない。お風呂もきつと仕舞い風呂に入るタイプ。風邪まで家族の最後に罹る妻への作者の思いやりが込められている。生き態、訴えに共感させられる四句。

正論は正論として聞いておく

宮尾みり

印象のいい順番に敵となる

大橋政良

持ち駒のひとつの行方決まらない

小倉アサ

優しさを拒んでからの後遺症

秦正子

栄える

松永すすむ選



商売繁昌 天秤棒を祖と仰ぐ  
 栄転の春を装う花みずき  
 行列の店の隣は閑古鳥  
 過疎の村 繁栄賭けて山けずる  
 宿り木が栄える庭木枯らす気が  
 過労死という栄転の影法師  
 門構え栄えたころの遺産秘め  
 その昔栄えたころの鬼瓦  
 雑魚はねて栄える夢へ滝登る  
 客筋が上がるほんとのご繁昌  
 栄えると水も空気もますますなる  
 ひたすらに励む家訓でよく栄え  
 栄えれば寄ってたかつて漬しに来  
 栄えると招きもこない人が来る  
 社長の名が女になってから栄え  
 先代が栄えてすこし荷が重い  
 出土品 華栄伝える錆の青  
 駅裏にむかし栄えたころのどぶ  
 朝火事は栄えますよと他人さま  
 繁栄の企業の影にいたピエロ  
 栄転を送って独りコップ酒  
 栄枯盛衰のれんは何も喋らない

繁栄にひと役買ったまねき猫  
 栄える日本難間山積し  
 廃船は栄えたころの夢の跡  
 牛の像鼻なでられて宮栄え  
 国栄え動物たちが抗議する  
 国栄え嘆き聞えるゴミの中  
 弥栄を祈る家紋の鬼瓦

俊子 苦勞した母の手足に勲章を  
 ひでの 碑だけ立つ昔栄えた跡がある  
 哲矢 栄える国どうなっている芥の山  
 彩子 商敵にされてる繁盛してる舖  
 朴竜 行商のころを社長は忘れない  
 洋 繁栄の裏に難問ある日本  
 水煙 栄えると電車の駅もよってくる  
 高夫 萬栄え句碑に人柄惚ばれる  
 雄々 佳

あやめ 窓際で過去の栄光偲んでる  
 しげお 地下茎が栄えすぎたか鉢が割れ  
 規不風 ふるさとも栄え方言も聞けぬ  
 あずき 山の青 去年の枝が葉を育て  
 やすお その昔栄えた都は土の下  
 シマ子 人  
 富喜子 紋瓦むかし栄えた城下町  
 正雄 地  
 薫 大ソ連栄えた歴史夢と消え  
 和子 天  
 恭昌 栄達の野望を捨てて土を練る  
 杜的 栄える日本に矛盾感  
 章 軸

水 晶

小田川智重子選



清芳 兼治郎  
 博子 三和  
 治幸 典子  
 枯梢 正子  
 旋風 紀一  
 雀踊子 明水  
 倫子 多賀子  
 通彦 舞鳥影  
 愛論 久仁於  
 章久 正坊  
 タミ 谷 清柳

ご神体滝が水晶玉を撒く  
 水晶の指が目立っている茶席  
 水晶珠は喜んで椅子に二人いる  
 一度だけ水晶古い信じてる  
 北風の冬の軒端は水晶下げ  
 中天に水晶盤を見た戦地  
 重そうに水晶を吊る首飾り  
 水晶に縁なき農婦畑を打つ  
 水晶の恋を十九の想い出に  
 水晶のような心で好かれたい  
 まるで水晶そんな清楚な君が好き  
 水晶のような瞳でみつめられ  
 水晶の紫はまた亡母の彩  
 紫が似合う女のアメジスト  
 水晶の光に亡母の若き見る  
 水晶のような男で無位無冠  
 水晶が欠けた日からの物思い  
 水晶の光が心まで透かす  
 水晶の悲しいほどに透きとおり  
 精巧なガラス水晶にも勝る  
 水晶玉一つ一つに悔いがある  
 水晶にまさる記念のガラス玉

信義 狸論 愛論 智如恵 ハル 柳五郎 ろ亭 房子 四郎 姫女 みね とし子 章 正敏 洛醉 正坊 枯梢 旋風 理瑛 希久子 和子

集 路

ガラスでも水晶に見えるお人柄  
澄んだ夜の星つないだか水晶の輪  
売る牛の水晶の目が泣いている  
水晶体にこり真心が見えぬ  
水晶の判にも沁みている苦勞  
仏にも見える水晶念珠くる  
幼児の水晶体にある未来  
水晶玉覗けば心透けそうな  
水晶を透かせば過去が見えますか  
愛らしい瞳水晶などいらぬ  
紫水晶乙女の夢をかきたてる  
水晶の心を澄んだ瞳にもらう  
泡水晶遠い昔を語り出す  
水晶の数珠くる心騒ぐ日は  
一步一步磨いて水晶に近づこう

水晶の輝き少女が脱皮する  
来世ではダイヤになるといふ水晶  
水晶の瞳に嘘はないだろう  
水晶が溶けて軋がる連の露  
煩惱の手に水晶の数珠冷える

水晶の涙を母がすぐこぼす  
水晶の瞳だな少年信じよう  
欲のない汗は水晶だと思つ

アメジストつけると翔んでみたくなる

あやめ  
あずき  
京子  
文子  
保州  
多賀子  
通彦

洋  
公子  
哲矢  
博子  
寿美子  
杜的  
達子  
ひでの

可住  
虹汀  
サワ子  
富喜子  
俊子

シマ子  
南奉

山田高夫

提 灯

寺井東雲選



提灯がメラメラ燃えてからドラマ  
竿燈に灯が入り祭最高潮  
提灯に子の名が並ぶ地藏盆  
提灯の家紋に今も威圧され  
安らぎの海へ提灯また浮かぶ  
提灯を吹き消し敵の出方待つ  
近ごろの提灯風をこわがらぬ  
赤提灯ここで上役めつた切り  
盆提灯点して仏と対話する  
盆提灯吊すと集まる先祖達  
提灯に釣鐘だった我が出合い  
老化した提灯暗くて先読めぬ  
提灯屋親子揃って字が達者  
吊るまでの苦勞知つてる赤提灯  
うっぶんを赤提灯で吐き捨てる  
昼提灯あれはキツネの嫁入りさ  
盆提灯去年と同じ位置におく  
提灯もランプも知らぬ長い足  
赤提灯男の虫を引き寄せる  
提灯持ちが趣味で今だ片付かず  
頼まれた提灯持ちの軽い舌  
提灯が揺れて夜桜人の波

重人  
やすお  
達子  
雄々  
アサ  
信義  
南奉  
佳雲  
多賀子  
サワ子  
鉄治  
喬水  
白光子  
好花  
白峰  
愛論  
正雄  
ちかし  
颯云児  
恭昌  
清芳

提灯の光で非行防止する  
提灯の明りが派手に踊りの輪  
おだてられ提灯持ちにまたされる  
マラソンの提灯持ちは白バイか  
提灯の善し悪し決める太い文字  
提灯は要らぬ闇夜も知つた道  
山門に提灯みたいな蜂の巣が  
提灯を持たせてもらう役がつき  
提灯を潜って来たな目が濁る  
提灯の破れは父のあばら骨  
赤提灯泣きたい心見抜かれる  
提灯にローソク消えて豆電球  
提灯を持つたばかりに拘置所へ  
台風一過提灯の灯にすがる  
提灯をかざし名優見得を切る

豊  
洛醉  
旋風  
和成  
狸村  
有一朗  
はるお  
章  
京子  
あずき  
正直  
幸夫  
杏村  
俊子  
一乘  
公弘  
正坊  
大柏  
兼治郎  
とし子  
三宅保州

# 初歩教室

題—無職

吉岡美房

今回の「無職」という題は意外なむずかしさがあったようです。というのも、皆様の投句の殆どが定年退職後の無職と、主婦業という無職及び老境に入った無職に片寄ってしまったことです。「無職」にはこの外にも、倒産や解雇で失職した人や、定年後再就職しようとして出来ない人、自らの意思で真つ当な仕事につこうとしないアウトロー等々一杯あるわけですが、このような句が非常に少なく驚いています。出題に問題があったのかも知れませんが、誰でもが最初に思いつく事象から一歩進めて違った所を見付けて句にして頂きたかったと思います。従って添削句として取り上げるの出来る限り幅の広い「無職」を対象にしたつもりですが、どうしても最初に申し上げたような句が多かったことをおこわりしておきます。

それでは添削した句から発表します。

毎日が日曜今日は何するか

洋

(時差呆けのような毎日定年後)

定年となり牙を抜かれた顔になる

美代子

(定年後牙を抜かれた父の顔)

待ちかねていた筈なのに無為な日々

嘉子

(待ちかねていた定年で無為な日々)

職退いてあの人の掌に戻る

はる子

(職退いて夫わたしの掌に戻る)

定年という無職に生きるパンの耳

敬

(定年の無職優雅なパンの耳)

無職になった停退の日の赤御飯

志華子

(定年の無職を祝う赤御飯)

無職でも税金だけは納めてる

美智子

(年金に無職いじめの税がある)

無職になり名刺の空白うらさびし

節子

(真つ白な名刺無職という安堵)

無職の靴は夢気分旅気分

みつこ

(働いた無職の靴へ恩返し)

無職でも結構忙しい自治会長

辰夫

(定年の無職自治会待っている)

定年の今は無職の鉢いじり

軒太楼

(年金の暮して四季の花咲かす)

定年が職を捨てさせ今無職

ふみ

(定年がこんな元氣へ来てしまふ)

職なくて背中軽いフルムーン

タミ

(定年でやっと掴んだフルムーン)

ある日ふと手持ちぶさたになる無職

美恵子

(真つ白な一日と会う定年後)

定年の日から靴音低くなる

和子

(定年の日から無職の靴の音)

町内の役で追われている無職

とし子

(町内の役追いかけて来る無職)

定年の後も時間に目を覚まし

慶三

(職あった頃の時間に目が覚める)

いつの日か無職となる日恐れてる

旭

(定年の足音聞いて策がない)

年金に頼って暇をもて余す

杏村

(年金にもたれて余生趣味に生き)

無職なのに案外忙しカレンダー

静子

(無職とも言う主婦業の忙しさ)

受け皿に無職がデンと腰を据え

君枝

(受け皿の夫の中に住む無職)

何成すも思いのままの今無職

姫女

(幸せな無職の今が逃げぬよう)

カルチャーが多忙無職が翔んでいる

和枝

(カルチャーで華麗に翔んでいる無職)

主婦業の無職と書くはふにおちぬ

秀香

(主婦業を無職と書いて黄昏れる)

パール弾けアルバイターの無職

彩子

(失業を妻のバイトに支えられ)

子育てに徹し大きく書く無職

君江

(母になるための無職に満ち足りる)

過労死を笑い飛ばしている無職 芳郎

(過労死が羨ましいぞ職がない)

職業欄無職と書いて老い哀し 忠雄

(職業欄無職のままで老いて行く)

古稀も過ぎどんな進路も諦めぬ 明吉

(働いて来たから古稀にある無職)

老二人無職ぐらしも幸せだ 孝由

(幸せな無職を子等に支えられ)

老母は主婦老父は無職で家事の補助 九

無職だが曾孫の守りと台所

(胸張って曾孫の守りという無職) 志重

無職でもパチンコプロで食う世相 隆

(日本にだけパチンコという無職)

フリーター無職にあらず現代版 治夢

(フリーター親は無職としか見え)

無職とは味わう者だけわかり 好花

(無職だけわかる心と酒を酌む)

隣組無職の人が多くなる 幸枝

(過疎に住み無職ばかりの隣組)

無職でも時間は来ると腹がへり ひかり

無職でも昼はやっぱり腹が減る 章久

(無職でも一日三度腹が減る)

連休へ無職の身分の外 眞幸子

(連休を悠々自適やりす)

連休と騒ぎ過ぎるよ無職なり 眞幸子

(無職から見ると連休騒ぎすぎ)

猪口一杯無職の父が嗜みしめる 春風

(酔い切れぬ酒と無職の父で居る)

無職でプライドばかり高く持ち 職

(プライドの高い無職をもてあます)

無職でも生きる権利を持つ野犬 幸夫

(野良犬に無職の僕が勞られ)

無職でも新車に変えるドラ息子 ぶさ子

(職の無い息子に新車買過保護)

見栄を張る職についたと通夜の席 幸枝

(父の計に無職の不孝詫びるのみ)

農業は老いても無職にならず 侑里

(子の継がぬ農が無職にしてくれず)

名人芸腕は無職にしておかぬ 金吾

(名人の腕を無職で放つとかす)

受継いだ家業無職にしてくれず 一乗

(定年の無職羨む自営業)

無職時に受けた甘言生き字引き 太一郎

(職のない時の情けを糧とする)

明日からは無職となるか靴みがく 高栄

(明日はもう無職最後の靴みがく)

カタログにない生き方をする無職 章子

(マニユアルにない人生の失業者)

犯罪と無職の名前コンビ組み 美千子

(肩書きは無職と書いて逮捕され)

職業欄こだわりながら書く無職 忠治

(アンケート無職の不満書き足らぬ)

売り逃げた土地で無職のお大尽 しず子

(売り逃げた土地で無職という長者)

日本一の所得無職の人でした 弘子

平成の無職億万長者とか ますみ

(ミステリー長者日本一無職)

定年へあれこれ職をもって来る 芳水

天下り無職のままで放つとかず 保夫

(定年の無職を笑う天下り)

無職だと公称しても荒稼ぎ 義男

(議員辞め無職に億の保釈金)

着想・表現ともに立派な句

気楽さとわびしさ同居する無職 嘉子

職安で男が鼻毛抜いている 清流

主婦業は立派な職と妻が言う 幸雄

無職でも孫に小遣い期待され 普

荷をおろし無職の明日に夢がある マサエ

無職故明日にでっかい夢を賭け 方子

老人になるのは早い職さがす 忠男

混雑をさけて無職の旅ごよみ 絢子

私の句

失業に五月の天が高すぎる

ああ無職髭がゆっくり伸びてくる

◇ 題「無心」—7月15日締切(9月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

■句集紹介

林 瑞枝句集『傘の浜』

政 岡 日 枝 子

私たち「きやらばく」の先輩、林瑞枝さんが句集『傘の浜』を発刊されました。同じ会の会員として、心からお慶び申し上げるとともに、句集の紹介をさせて頂きます。

何も飾らなくても美しい瑞枝さんを表わすかのように、純白の表紙、割愛された序文、「どうぞ読んで下さい」とやさしく微笑んでいる写真。

続けて『傘の浜』へと入っていく。

許し乞うかたちで座る繭のなか

満願の答え与えて樹は枯れる

冗談の過ぎると思ふ死の眼を開けよ

やはり父想い、母思ふ句が目をひく。

端切れ集めてわが衣擦れを聞いている

塩壺の咎のひとつがまだ消せぬ

そして近年亡くなられた母上に対しては、

自分自身を重ね合わせた深い哀感がみえる。

音大を出たこおろぎのオペラだな

社交ダンスの好きなタンポポの綿毛

おんな兵士のブラジャー月に干してある

瑞枝川柳の真骨頂である。私たちにないこ

ういう発想の句に出逢うと、限りなく嬉しく

なってくる。

そしてこの発想の土壤となっているのが、

彼女の生まれ故郷の「淀江」にあるのです。

ふるさとに傘の花咲く絵が消えぬ

古代史をくすぐる壁画出てしまふ

神将の声が山脈より届く

淀江は海と山を持った山陰の町。遠くに

は、その砂浜で特産の和傘を花が咲いたよう

に干す風景、日本百撰に選ばれた「天の真名

井」の名水、さらにずっとずっと古代にさか

のはって、法隆寺と並ぶ最古級の仏教壁画を

出土した上淀廃寺、これらが永遠に瑞枝さん

の胸から消え去らぬ原風景なのです。

そして、この原風景を元に

一匹の犬と出会ってからの地図

草矢飛ばして私を呼んだのは夫か

北斗星めざして彼と逃げおおせ

陽を背なにして王様の椅子がある

ご主人の荒介さんも作句されるようになって

からの川柳脚は、知らぬ者がないほど広

範囲にわたっている。

米櫃の中から覗く明日の絵

真魚板に欠伸を刻む朝を刻む

思いあがりの心を洗う洗い髪

誰もが持っていて、誰もが知っている主婦

業の顔がこのあたりで覗く。

たった一人の遅れを庇うてきた仲間

八方美人の百歩の遅れ憎めない

自由気ままに、遊び気分で歩いている私た

ちは、先輩としての瑞枝さんにすっかり甘え

きっている。

次の作品は、瑞枝さんの内部をこよなく引

き出している、それでいて、表面の軽さもな

く、生きている息づかいが聞こえてくるよう

な私の大好きな句を集めてみました。

百葉箱は静かに狂うものを抱く

昔も今も遅れて牛を追うわたし

おんなにも利き腕はあり海を抱く

斜交いの風にゆらいだ馬の脚

わが胸のひとりの影と蛇の目傘

いっぴきの蛇が流れる生き伸びよ

ひとりぼっちの椅子にしゃぼん玉が降る

これらの外にも、佳い句がたくさん集めら

れているが、瑞枝さんの分身とも言える句を

ご紹介しします。

シナリオを一步踏み出でちちよ ははよ

どこに出しても恥じることのない瑞枝さん

の川柳です。どうぞ読んで下さいませよう。

## 切り絵の味

# 『傘の浜』鑑賞

東野 大八

ふるさとに傘の花咲く絵が消えぬ 瑞枝  
林瑞枝さんの句集『傘の浜』の題名を見て  
思わずニッコリした。私の住む岐阜は提灯と  
和傘の産地である。よく目にする和傘生産工  
場のあたりの風景は、まさに傘の花である。

私はこのからかさの中で育ち、紺紺の青春  
記を、蛇の目傘やもみじ傘の情緒に彩られて  
過しただけに、和傘は大好きだ。しかし今は  
無粋な洋傘に圧倒されているのは寂しい。  
想えばその懐かしい雨音に眼を上げると、  
眼にも鮮やかな藍や黄や朱や緑の、油紙に透  
して走る雨粒の幻想的な感触。この情緒たっ  
ぷりな傘下の世界に「じゃのめ」でおむかい  
うれしいな」の童心にまで還してくれる。  
夜目遠目傘のうちーの情味の粹。

瑞枝さんのこの句集は、そうした一切の、  
人間感性の哀感を惜しみなく、聴かせてくれ  
ている。

迎え火に噎せて寄り添うちちとはは  
青と黄に姉妹は同じ絵は描けぬ  
朴歯下駄むかしの兄が居て呉れる  
こうした血縁の絆の濃さに強いのは母  
母が逝く七つの海を風にして

柿の位置まさぐり母は死を告げる  
いっぴきの蛇が流れる生きのびよ  
母はその娘の「女の一生」にとつての原風  
景であり、その娘の女としての生涯の心証を  
見つけて熄むことはない。

姿見の帯に女の川がある  
愛という一字が華奢な絵となりぬ  
おんなにも利き腕があり海を抱く  
遍歴のお伽ばなしをしてあげる

樹も人もすこし曲って絵となりぬ  
女手で壁くりぬいて通りやんせ  
端切れ集めてわが衣擦れを聞いている  
私は林瑞枝という姓名を眼にしたときから

なぜか長く、瑞枝を「瑞絵」という文字の思  
い込みで過した。それはこの人の作品が（絵  
の句が散見したことにもよるが）至極、絵  
画的であって、その絵は「切り絵」だと解釈  
していた。

「切り絵」には必ずどこか、孤独な寂寥感  
が漂っているように思うのだが、瑞枝の川  
柳作品にもそれがいえる。鑑賞する人にもよ

ろうが、私はこの持ち味がとても好きである。  
なぜなら、それはあの傘下の空間の郷愁に通  
じているからである。『傘の浜』の句集名に、  
思わず頬がゆるんだのもまぎれもなく、その  
感触からきたものだ。

とにかくこの句集をじっくりと鑑賞した。  
ここにあげないいい句が他に沢山あるが、最  
後につきの句を並べておく。

明日の絵に知足の椅子をふたつ置く  
足裏も綺麗に洗い会いに行く  
枝きらめいて雑木林に子が産まれ  
相聞の風にただよう象の鼻

## 川柳塔社常任理事会（6月1日）

▽紫香氏から川柳塔唐津支部十周年記念川柳  
大会について報告。さらに第7回川柳塔社  
勉強会を9月10・11両日、徳島市で現地の  
おっばこ・白鳥・大川川柳会と合同で開く  
ことを提案、了承。

▽特別参加の堀端三男氏から全日本川柳和歌  
山大会の分担について説明、協力を要請

▽薫風理事長から社団法人・全日本川柳協会  
の設立許可について報告。

▽11月の常任理事会は1日が日曜日にあたる  
ため、10月31日（土）に繰り上げて開催。

■句集紹介

合同句集『さわらび』

春城年代

今年四月、川柳えんぴつさわらび会から、句会百回記念合同句集『さわらび』が発刊されました。おめでとございます。

女性の方ばかりの句集で、川柳歴一年足らずの方から二十年にもなる方まで二十六名、七百二十句をつぶさに拝見して、それぞれこまやかな女の熱い思いが滲み出ているのに深い感銘を覚えました。

その中で四人のお名前は「水煙抄」で存じておりましたが、お目にかかったことはなく舟渡杏花様以外の方は、全くお蔵もご性格も知らぬままで、拝読させていただきました。杏花様は川柳塔の同人でもいらっしやいますし、西宮北口川柳会の林はつ絵様の妹さまで以前からよく存じ上げておりました。姉妹揃って才媛の名高く、良き先輩として尊敬いたしております。

さわらびの皆様のを通して、あれこれ思

いをめぐらせ、私の心をノックした句を次に記させていただきます。

○

気の弱い男のような昼の月 石倉 須磨  
シャガールへ手紙書いてる春の闇

万骨の曠野に埋まる父ひとり 伊東 志乃  
井村たか子

梅雨末期火玉のごとく夕日墜ち 大西 桂子

炎天へ私ひとりの交差点 北村キヌエ

いとしきものみな遠くいる花八つ手 窪田 敏子

訃は不意に柿がたわわに光っていた 鹿間あき津

別れるも出合うも愛の沙羅双樹 島 ひかる

百までは生きられぬので樹を植える 城生つる子

愛の巢へペンペン草が生えはじめ 高畠 五月

符返らず一枚の地図を焼く 舟渡 杏花

風となら契れる深いふかい闇 村上比呂子

絵に描くと嘘ほろほろと花になる 山崎美和子

女は海夜叉も仏も胸に抱く 松井 泰子

私の心を魅了した句は、もつともつとあつたのですが、頁数に限りがありますので、割

愛させていただきます。

第3回・きたぐに

誌上川柳大会

課題

「空想」 佐藤 正敏選

「茶」 桜井 長幸選

「塗る」 加藤 翠谷選

「磁石」 浜野 奇童選

「果たす」 池田 可宵選

「着る」 小境よしはる選

「腕」 中谷 道子選

「眼鏡」 山田 良行選

締切 8月末日

発表表 11月号誌上

応募方法 各題2句、原稿用紙または便

せんに住所・氏名を明記、投

句料千円(小為替)を同封の

こと。発表誌を送ります。

表彰 最優秀句賞のほか合点第一

位から第十位までに北国川柳

社賞を贈る。

応募先 〒920 金沢市正田町口1337

福岡竜雄方

北国川柳社

本号からいよいよ従来の同人制度を廃して別項の如き新組織とすると同時に、紙質を変えて一大飛躍の増刷をなし、市内の各書店に配本を断行した。これは永い間の懸案であっただけに萬遺漏なく続けて行けるものと思っ

ている。従来の同人組織を捨てたのは段々膨脹してゆく社の事業の運行上に支障が多いからで、新制度は全く合名会社が株式会社になつた形である。又社に対する全責任を自分が背負つて立つ点から見れば個人商店の形である。此変態的新組織がどこまで続くかは疑問であるが、目下の処は尤もいと信じて六月中旬に旧同人会議で合議の上決議したのである。旧同人は特別社友となり、賛助員及客員は本社の推薦によつてお願いしたものである。右は昭和2年8月号の路郎が書いた編集後記である。それは組織の大改革といえるもので、創刊時から見れば、頁数は二倍以上、執筆陣の充実ぶり、質量ともに数倍といえる程になつたにもかかわらず、定価の一部三十銭は創刊時からの据え置きだから、経済的

負担は限界であつたであらう。販売の促進とともに読者の義侠的援助への期待もあつたと推測出来る。

賛助員は、池沢樂居・岡本一平・長崎柳秀末広嚴太郎ら十三氏、客員には、西原柳雨・岡田三面子・川村花菱・吉岡烏平・武笠山椒小出楢重・木村半文銭・柴谷柴舟・蛭子省二森東魚ら十三氏で、特別社友の数は、新組織発表とともに新たに入社した人々と退社した人の均衡がとれて、元の同人数と略変化がなかつた。辞めて行つた人に、佐々木黙闇・塚崎松郎・石賀(のちの林田)馬行・黒木英豆井上刀三の五氏で、今年になつてからも、

湯上りの母親の顔なつかしし 松 郎

元日からとは平凡な男かな 〃 〃  
薄情を一つ二つと指を繰り 〃 〃

マリ投げをしている街を子と通り 〃 〃  
のような、センスあり温かみのあるやさしい句をもつた創刊時からの同人塚崎松郎、そして、馬行・英豆・刀三といへば、斬新な作品だけでなく、それぞれ一家言を持つた論評

を書き続けていて、若手三羽鳥の趣があつた三人だけに、まことに惜しまれてならない。

路郎は、作品において、また雑誌社の経営にも絶えず棘の道を歩き続けた。作品がいささかでも前衛化すると、「先生の句には従いて行けまへん」との声がちらちらする。現在のように豊かで余裕のある時代ではなかつたので、殊に地方では川柳誌一冊を売り捌く重みは大変なものであつたのだ。私が昭和32年川柳雑誌社を訪ね、路郎先生に初めてお会いした当時は、「川柳は十七音字を基調とした批判詩である」との路郎と、「川柳は常識である」とする北川春巢との調和が均衡してスムーズな経営状態を呈していたようだ。後年、編集メンバーの事情で、河野春三を編集長に迎え、掲載内容が尖鋭化した時期には、目に見えて経営は悪化した。今それを想起すれば、路郎は昭和2年の組織改更に際して、自分の指標とする斬新な詩性派と敢えて袂を分かち、常識派に歩み寄つた気がする。後年の川柳職業人宣言の芽も此の頃からのものであつたと思えるのだ。

この時期、きやり吟社主宰の村田鯛坊は周魚と改号する。剣花坊の川柳復興期以来多かつた雅号の坊は、日車や周魚にならない姿を消して行つたのも時代の趨勢であつたようだ。

# 老地樹壇

原稿は川柳塔社事務所へお送りください  
 毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原  
 稿用紙に清記をお願いします。 編集部

川柳東大阪

森下

愛論報

そば殻の枕に母の声がする  
 若死の母伝説を子に残す  
 生む痛み叱るいたみも母の海  
 忘れてた故郷に母と言う言葉  
 おふくろの味に戻ったグルメ旅  
 寺ばかり回るグルメの京のバス  
 胃薬をいつも持っているグルメ  
 グルメ旅お腹こわして帰る破目  
 断崖の花に男が憧れる  
 憧れのスターのほくろ美しい  
 憧れがバブル弾けて夢になる  
 憧れの名取になって知る苦労  
 下馬評が高く期待に沿い兼ねる  
 期待され過ぎてエリート息が切れ  
 もう走ること遅刻もない余生  
 ジョギングがだんだんえらい歳になる  
 真夜中の気になる走りピーポー車

孤舟 湖風 雀踊子 頂留子 愛論 美子 勝美 信治 元紀 雅士 白屯 二南 柳宏子 晋吾 文秋 喜風

寝たきりの母にこの足あげようか 度

川柳後楽吟社

從野 建一報

人間を人間が飼う銭が飼う  
 生きていて良かった素敵な人に逢い  
 春愁の夢の余りが吐息する  
 国訛り強い意見の手が震え  
 子はやがて親の戦歴知るだろう  
 毒舌の父が愛飲どくだみ茶  
 露天風呂の中から水平線眺め  
 栄転の跡に草枯れ花が枯れ  
 セピア色髪があちやらの国かぶれ  
 芸術の舞台終幕など無い  
 うたた寝の非番ドラマがつながらず  
 言い訳はしない女の含み針  
 満開の桜へ無聊かこつのみ  
 あなたと別れた橋をひとりで渡りきる  
 島からの出世頭は大工なり

川柳クラグわたの花 片上 英一報

時計の音とまりそれから不眠症  
 梵鐘を聞いて未熟を噛みしめる  
 音たてて崩れた株を少し持ち  
 大きな音ふすま閉めない孫が好き  
 山歩く春のはじける音がする  
 報恩講あとはカラオケ早変わり  
 弾の音いつまで世界争うの  
 リラの花ふれて音する春あらし  
 陌草園釈迦へ甘茶の杓の音

草風 浄美 柳五郎 博友 拓治 美智子 道博 吟平 青銅 正秀 挑風 佐加恵 健一 照路

シマ子 美津留 一風 春子 泰成 道子 君江

寝静まる突如騒音救急車

気をつかう二階へ義母のあがる音

花開く音も聞こえるひとり旅  
 参道の杵つき餅を昼にする  
 盗人の音に気付かず夜が明けた  
 物音におびえる兆し見ぬ団地  
 雑音を気にせずまたも立候補  
 諍いの後に夕餉の重い箸  
 箸止めて今年はずうタイガース  
 春本を回し読みした友白髪  
 精一杯お洒落したのに知らん顔  
 ドラマをば叩くピエロの泣きぼくろ  
 故郷に連絡を待つ父母がいる  
 ベルが鳴る連絡網が呼んでいる  
 鍵っ子へキーキとメモの走り書き  
 ししおとし聴く赤坂の高い酒

川柳塔おっぱい吟社 木村 明人報

和解する方の握手が美しい  
 鮮やかな花だが垣根高すぎる  
 ケトバシた石につつますく身の不覚  
 いつまでも若くありたし古い妻  
 心まで優しく変る娘の和服  
 父さんを持たせてばかり妻の趣味  
 苦しさに耐える笑顔がいじらしい  
 ウグイスの声につられて咲く桜  
 言いたい事ハキ出し合える夫婦仲  
 四国路は遍路の鈴の音で和む  
 サイギキ捨捨てねば核の廃止なし

トシエ ますみ 朝子 晩子 明子 みき子 一雄 初子 幸枝 龍 正子 弘直 千枝子 英一 章 鬼遊

迷視子 明人 ひとり 正雪 マサエ かおり よしみ 小葉実子 放任 吟笑 迷貫

桃の花貰い菜の花ほしくなり  
病む兄が私の足音待っている  
訃報より先に届いた第六感  
今日も雨バブル嘆いて泣く空か  
野良犬が両手をついて思案顔

三幸川柳教室

三七

保州報

中心を見つめて歩む丸木橋  
中心で馬鹿になりきる旗頭  
中心は小石ひとつが描く波紋  
中心に居るから熱くなりすぎ  
中心のポストで本音明かせない  
中心の渦から抜けてよく眠る  
軸足が動くと丸い絵が描けぬ  
奥様は例外ですと乗せられる  
赤門へ例外たちのしのぎ合い  
例外と心許した日の不覚  
例外を許すゆとりのある器  
ささやかな例外赤いバラを買う  
例外に驚きはせぬアウトロー  
例外は許さぬドンの太い眉  
例外はつくらぬ主義の自動ドア  
飽き性で例外なのはあなただけ  
山頭火奇行をつづる旅日記  
例外を認めて緩みだした箍  
エリートに例外もある都落ち  
ちぐはぐなままで響かない和音  
ちぐはぐな事してピエロ芸にする  
テトラポットがちぐはぐにする波の唄

千枝子  
みね  
和子  
保子  
義男  
正一  
桂香  
町子  
正雄  
当代  
精子  
百合子  
西  
鉄治  
博章  
恵子  
初子  
靖子  
親子  
公子  
千秀

ちぐはぐなバツチワークに似た暮らし  
ちぐはぐな生きさま僕の歎異抄  
声にお受けしますとまだ言えぬ  
万歳をするまで待とう天の声  
少数の意見が何時も放つとかれ  
三面記事声なき声が胸を突く  
朝市の魚も跳ねる荒い声  
押し入れを開くと亡母の声がする

岩美川柳会

羽津川公乃報

やりくりの家計は妻が舵を取る  
世帯慣れ赤字の波をうまく越し  
母の舵ひろい大きな愛をもつ  
青写真通りに舵がままならぬ  
百歳の重み渡世の舵を取る  
女房に舵は任せて高軒  
舵取りも二人三脚波静か  
面舵いっぱい回し心のドア叩く  
荒波を乗り切る舵は夫が持つ  
誰が舵取っても我が家火の車  
面舵にみんな協力するという  
日米韓舵の取りよで世は平和  
二兎を追う舵の指針が定まらぬ  
舵まかせ浮世の旅もあと僅か  
風に舵まかせポンポコリン踊る

昭枝  
高夫  
孝子  
信子  
章子  
幸子  
さち子  
朱夏  
單幸  
善幸  
美代子  
美恵子  
照女  
芳江  
公乃  
八千代  
由多香  
喜与志  
螢  
巖藏  
忠良  
大漁  
静生

いずも川柳会

吉岡さきえ報

手もみ茶の香り一杯仏様  
甘茶曼まだ生きる欲たくわえる

房子  
多賀子

お茶筒を開くと世間見えてくる  
いいことがあるぞ茶柱から明ける  
底ぬけに明るい友と茶がうまい  
城のある街で余生の茶をすする  
恍惚が合掌だけは覚えてた  
合掌の眼裏にある温い笑み  
出るぐちをぐつとのみ込み手を合せ  
合掌の私を真似るもみじの手  
合掌の姿で花の芽が伸びる  
合掌が神と仏を困らせる  
地を這って雑草なりの夢をもつ  
夢の世界で愛の虜になる私  
描かれた夢を未練が追っている  
子が描く夢に日本の明日があり

佳句地十選 (6月号から)

井上照子選

手を抜いたとたんくずれてゆく積木  
雑草も育てる大地春となる  
氣短の善湯豆腐に逃げられる  
記念日は妻をいたわる日と決める  
産声は通訳いらぬ声で笑く  
母さんの笑顔に苦情など言えぬ  
今日生きる出発点の顔洗う  
母さんが居ない無口の夕ご飯  
ひと言を信じて渡る丸木橋  
天へ向き希望が背伸びする蕾

宣子  
萬的  
大鷹  
幸子  
秋人  
柳宏子  
きみ子  
満江  
頂留子  
千嘉子

ポランテア マリオネットに夢たくす  
 身構えた時から夢が逃げて行く  
 食うだけの欲に不漁の海は瘦せ  
 浮き沈み欲の数だけしぼられて  
 欲張りをいつもこらしめる童話  
 欲深く書棚に並べ読みきれぬ  
 市民賞の半分は妻の我慢賞  
 妻という門番がいる旅の宿  
 大正の妻で軍歌なら歌う  
 いい妻が押せば車は軋まない  
 栄光の蔭にしつかり者の妻  
 気疲れをいやす濃いめのお茶を待つ

南大阪川柳会

金井 文秋報

満江 壽美子 青湖 文子 壽美子 芳子 草丘 小鹿 義良 かおる 朱紅 代仕男 作二郎 信治 凡子 文秋 智子 悟郎 柳宏子 柳伸 度 頂留子 勝美 善信 憲太郎 直子

意欲だけ空回りする齢になり  
 理にかなう話に貫禄まけをする  
 入学の極秘に恐い刑事沙汰  
 一口で機嫌がわかる味加減  
 タイエツト句の味覚が邪魔をする  
 理屈抜きあなたの背について行く  
 意味ありげな手紙返事がまだ書けず  
 ふる里に実家に兄嫁いる敷居  
 同じ味形こわれたお買得  
 花それぞれ味を愛でつつ通り抜け  
 持ち味を發揮せぬまたそがれる  
 不揃いの家具だが想い出溜めている  
 無理言うて意のある所汲めと言う  
 長雨と裏山怖い家だった  
 倅せは味まで嫁と合うてくる

城北川柳会

吐田 公一報

萬的 真柳 喜風 友美 新造 トミ子 文子 雀踊子 千梢 章久 文江 シメ子 庸佑 岩信 久子 寿美礼 ふみ 頂留子 温子 典子 満津子 千世子 ただし 倫子 登美子 八重子 静子

愛情で女がほぐすもつれ糸  
 ライバルが社長室から出て来ない  
 いらいらと振るサイコロは謀反する  
 日本さえ叩いておれば票になり  
 いらいらは赤信号の長さだけ  
 雪に弾く津軽三味線の糸  
 大海に続く小川と疑わず  
 車間距離おくから友情長続き  
 かあさんがいらいらしてる試験場  
 言い訳をしない男の太い眉

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

白峰 柳影 達子 秀夫 昭子 史風 ゆみ子 一枝 静歩 公一 緑良 信秋 栄美子 輝子 稚代 忠雄 吞天 武雄 精勝 好笑 柳和子 登志代 紀久子 寿子 英子 アサ

何もすることがないのも苦行です  
 苦行にも耐えた大樹は仰がれる  
 苦行十年磨いた剣にある殺気  
 苦行した者だけが知る花の私語  
 難行苦行行く手も同じ道続く  
 つまらない苦行と他人あざ笑い  
 自叙伝に苦行の文字は消してある  
 難行苦行それでも奥へとかぬ手  
 寒空に水垢離をとる母の愛  
 コンビ組むひとを探しに森へゆく  
 火加減手かげんかまどに学ぶ母の勤  
 大仏が腕を組んだら恐かろう  
 遣伝子の組替え地球変えるかも

川柳塔鹿野みか月句会 土橋

保州 高夫 鉄治 佐代子 柳宏子 豊太 光代 公子 信子 幸子 三男

呆けるから酒止めるなど酒豪言つ  
 困いなどいらぬ親しい二人です  
 昏寒し困いの外はまだ知らぬ  
 真四角な困いで独りめしを食う  
 スーツ選る童顔チラリのぞかせて  
 袋帯うれしい涙止まらない  
 犬小屋に表彰状が掛けてある  
 ほんとうの涙は船が消えたから  
 女の身帯でしっかり引きしめる  
 阪神が強くて野球おもしろい  
 うるさい程自慢しているクラス会  
 虹色の賞が光っている未来  
 美しく老いて静かに船で逝く  
 子沢山うるさいけれど幸福だ  
 かくれみので困うと人が逃げてゆく  
 たまゆらの慰め朝寝許される

八尾市民柳會

宮崎シマ子報

黙光 八重子 美つ千 公弘 孔美子 和子 はお みさ江 節子 弘子 きみ子 三千代 明美 早苗 隆風 螢

燦然と光る美人の偽ダイヤ  
 寶石の前で心を覗かれる  
 踏み殺すつもりで虫が掌を合わせ  
 百度石踏んだ数だけ罪が消え  
 子も同じ轍踏む愚かなる絆  
 今売ればなんぼの損か値踏みする  
 影踏み遊びわすれた都会の子  
 糠に釘芯の強さは姑ゆずり  
 糠に釘そんな男と暮している  
 美女の肌骨をた過去ある糠袋  
 説教もどこ吹く風の糠に釘  
 糠袋持たせて見たい柳腰  
 哲学者失恋ばかり繰り返す  
 オカリナを聞くと哲学的になる  
 父の背が私にくれた哲学書

京都塔の会

松川 杜的報

正坊 正坊 福子 栄 諷云児 白漢子 杜的 英子 百合子 芳子 葉子 英一

おっとりとしている天女かも知れぬ  
 偏差値も知らずおっとり子を育て  
 おいでやすおっとり京の言葉好き  
 届かない棚に気になる箱がある  
 キープした洋酒が棚で欠伸する  
 神棚の横つちよでこけしかしこまり  
 通勤の疲れが溜まるマイホーム  
 この人の為なら跳べる水たまり  
 ストレスが溜まるのと太るうちの猫  
 おっとりさみえてもキヤリアめざして  
 腕組んだまま飛び越す春の水溜り  
 追伸に打算が顔をだす手紙

胸中の打算言葉の端に出る

打算的の男に明日の顔が無い

打算的な女で小金貯めている

溜め池の跡とは言わぬ分譲地

捨てること下手で溜った粗大ゴミ

思い出があつてがらくた溜めている

巧言の裏にかくれている打算

打算など毛頭ないという善意

エイプリルフールさくらは六分咲き

蛇口からハミングもれる水の音

アメリカは傷つき易くなっている

神さまも一息受験すみました

詫び状に誤字が五六ヶ有りました

余白塗る少しピンクを交せてみる

椿咲く庭のガラスを拭いている

孫叱る声も受話器へ流れ込み

静岡川柳塔

永倉

僕川報

人生の道草たまに役に立ち

招かれて指名気になる披露宴

考え事階段一つ踏み外れる

昼寝して小さな幸をうなされる

雑草を見てと抜きたくなる私

投稿へ気遣う誤字へ繰る辞典

秒針を見つめて無我の境にいる

出しもせず来るかと待ってる筆不精

ゆつくりと遊んでおいでと労わられ

愛と憎 綾なす糸が解けはじめ

柳華

師の見本苦節十年まだ踏めぬ

百合子

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

角丸く削り水晶印刻師

建てた小屋見れば詰った不用品

喉仏拾つて泪また泪

物語唱和し歩く平家村

間違えて早咲きの花雪に遭い

飲んべーは赤提灯と恋をする

絵巻書は買わぬ誓いの一人旅

アルバムへいい顔一残しとこ

新採の授業に集まる父兄の目

長雨の後の太陽目にはじく

山吹の黄が呼んでいる二三日

さよならも言わず手を振る駅ホーム

まだまだと思つた句会すぐに来た

煙草屋のあるじ禁煙客に告げ

顔中を口だけにしてよく笑い

女人禁制杜氏も土俵もまた依怙地

川柳ささやま社

遠山

可住報

迷惑と感じぬ父の海がある

珍しい品食べ方がわからない

珍物はひとりたのしむことにする

着ぶくれて大きく見せるエビフライ

真実を沈めて水が澄んでいる

柿の種より魅力のにぎり飯

ひらめきが欲しくて水をかき回す

あの日からうきうき茶碗二つおく

師の見本苦節十年まだ踏めぬ

百合子

聊かの土地にも魅力断ちきれず

うきうきと羽根を伸ばしていい仲間

水ぬるむひとりの部屋にあるいくさ

うきうきと女結びが蝶になる

雪解けの水に流した冬の愚痴

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

村おこし一役買った茶摘み唄

どん底に落ちて覚えた反戦歌

色即是空モノの池にも歌がある

仕舞い風呂妻には妻の唄があり

軍歌より知らず無色の道を往く

若葉いろいろわたしの色がみつからぬ

カラフルな葉に頼り生きのびる

色直してから肩の荷が下りる

漕いでます色さまざまな浮世舟

昼見れば薄汚いねネオン街

それぞれの色で家族の和を保ち

島を発つ子にたつぷりと島の唄

たつぷりと鯉のたたき土佐の浜

植え替えもきかずたつぷり水をやる

たつぷりと時間はあるが金がない

未練たつぷり男の方にある別れ

ご馳走はたつぷり食べて瘦せたい娘

山越えを前にたつぷり食べておく

花みずき 恩師の句碑に添えて植え

あれも夢これも夢でも夢植える

沙羅双樹植えて悟りを開かんや

不器用に植えても亡父の樹は茂る

師の見本苦節十年まだ踏めぬ

富喜子

エキオ

ヒサ子

和子

文平

可住

英子

正とし

いわゑ

しげお

武庫坊

みつ子

房子

二南

キク子

萬的

芳子

ひろ子

トミエ

能子

正坊

透太

千世子

はつ絵

江美

義子

哲子

富喜子

いつかいつかと父は娘のため桐を植え  
植え変えた花から明日の夢もらう  
一波乱まだおこりそう以下余白  
親しきは割箸割ってあげるほど  
豊かさに溺れていびつな円を描く  
こりこりと沢庵噛んで卒寿です  
序列から離れゆつくり掛ける椅子  
天皇の鉤へ目が寄る植樹祭

川柳岩出

小倉 アサ報

坂道でそつと背を押す手が温い  
ランドセル机の上で春を待つ  
運命の出合い花見が縁となる  
坂登る自問自答の膝がしら  
地図にない坂道生きる人の道  
花見席夜まで長い新社員  
大正のロマン漂う春霞  
春を待つ人の心に生きる張り  
六十路坂まだまだ杖はいりませぬ  
あとひとつ未練を残し春はゆく  
花と恋みんははしやくか春のうた  
嬰兒まで花を見詰める仕草する  
花見だよ九官鳥の朝の声  
花見酒天下を取つたよつな酔い  
弱者に一日早い通り抜け  
坂道でこっそり妻の手を借りぬ

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

晩学の法律論をぶっている

夢之助

女 風云児 香子 道胤 杜の津 よし津 紫香

綾子 紳一郎 和子 精子 昌子 達子 千鶴子 英子 正義 幸子 正直 悦男 春子 瑞穂 忠雄 与呂志

晩学の灯にとどく妻のそば  
晩学に詰めこむことが多過ぎる  
晩学で固い頭が応じない  
晩学がふんばっている呆け防止  
これからやのに晩学などと誰が言う  
辞書ばかり買つて晩学穴埋める  
五月晴れ故郷はまだ置炬燵  
サッカーボール宇宙に届く五月晴れ  
ドアマミラーで見られてるとは知らぬなり  
子の夢をふくらましている鯉のぼり  
ささやかな夢を砕いた雨が降る  
寝てる子によい夢見てねと語りかけ  
優勝の夢が膨らむタイガース

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

幕間で音色を合わす楽士たち  
今日だけは石になりたいしやくだから  
人様と話が合わず石になる  
石海に投げてでも知らぬ顔してる  
ふるさとの話している庭の石  
記念樹を一本庭に追加する  
手入れせぬ菩提寺の庭園は森  
ふるさとの庭木に登る少女の日  
老婆が独り庭は猫の学校に  
寒い朝庭化粧したよに霜柱  
亡母は今石の帽子でやすらかに  
石投げたあたつた人を娶る気か  
石仏の道案内で生きて行く  
石一つ投げず無冠の父なりき

十四郎 紫香 いわお 向西 キク子 尚利 弘治 定人 六浦 鹿太 勇次郎

庭石の苔がこの頃しゃべり出す  
石組みに父祖の手形の跡がある  
石に座し自責に落ちる夕焼けか  
ははの忌の石と一対一になる  
石段を登り大きなものに会う

倉吉川柳会

渡辺 善句報

上司にも上司があると慰める  
あけすけの女で奥の手は持たぬ  
甘辛を知ってるわりに頑固です  
ストレスが緑の風に洗われる  
奥の手も出さずに勝ってしまったよ  
仕事より上司ゴルフで忙しい  
もぐら叩き嫌な上司によく似てる  
母の日のブレゼントには肩たたき  
胡麻すりを使いこなしている上司  
金持ちが奥の手ばかり使っている  
みどり茶にひと日の疲れ忘れおり  
一枚の絵に緑色つけ加え  
緑もえるともつと生きたくなってくる  
嫁が来て我が家の味が変りだし  
ミニ穿いて上司の前をうろつくな  
いろいろと味つけて出す旅ばなし  
風の向い隣の味も読めてくる  
母の日もおんなじ位置で豆を煮る  
転動へ上司のくせも聞いておく  
母の日はいつも不思議に良い天気  
ぜいたくな味を覚えた猫の舌  
緑の風を胃袋にたらく詰める

康志 ひさ子 秋草 よしえ かつみ 京子 玲子 正雄 秋人 千代子 寿満湖 雄々 艶子 御前 石花菜 とみお 独歩 和枝 由多香 完司 秋女 善句

川柳高知

川竹

松風報

古傷に触れない友の思いやり

栄珍

過去はみな余生の糧と生き続け

朱坊

痛ましい過去が縁切り寺にある

佳風

前歴も過去も問わんと言ふ仕事

京子

過去の事言ふまい明日も陽は昇る

功

過去を知る男も来てる披露宴

圭風

歯の痛み一割増しの水加減

さち

自分史のページを一つぬり替える

千恵子

分身のように柳誌を持ち歩き

菊野

化粧瓶数だけ厚くなる化粧

春枝

晩婚の二人散歩に手をつなぐ

有佳

和を保つための適度の車間距離

竹萌

舶来の犬に相手が見つからず

憲一

鎖にも馴れて飼犬ふてくされ

かず子

あたたかい言葉は犬も知っている

幸

コマ切れを買うのに犬がダシにされ

松風

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

静かに揺するたそがれのぶらんこ

とみお

静かすぎる一石投げてみたくなる

節子

お静かに春告鳥が啼いている

螢

いつか咲く花を静かに待っている

たつみ

爆弾を抱いた男で静かです

松盛

静かすぎるソツと覗いてみたくなる

孝恵

静寂の森で嫉妬がそだちます

玲子

静けさに凡夫不善をかんがえる

明治

妥協ぐせついで静かに老いてゆく

白峰

冷静になれば自分の勇み足

温子

午前二時静かに爪を研いでいる

幸子

茅の屋根ひとりの音のなかで老い

紫映

喉が哽れますお静かに願います

喜与志

ライバルの静かになった日が怖い

柳風

しとしとと静かな雨が胸にふる

早苗

静かに降る雨が肩身をせまくする

梅朗

静けさが金にならない過疎にいる

善政

母も娘も無口静かに雪つもる

野草

静寂のひとつとき白砂の竜安寺

杜的

人形もほっとしている静けさよ

典子

気味悪い程国会は静かです

小生

ふるさとは静かなタムの底にある

喬水

補聴器をとれば静かなる自然

みほの

こたわりを捨てて静かに髪をすく

ひさ子

何方さまの道も静かでないらしい

信子

精力も気力も静かになつて老い

弘朗

川柳たけはら

森井

青居報

花びらでこもピンクのじゅうたんだ

小千枝

球ひろいばかりこれも訓練で

中史子

大事な時にいつもおなか痛くなる

蘭幸

正面に座るとまぶし長女二女

菁居

お彼岸だ祖先の霊にあいにゆく

ナスエ

まぼろしの速き恋ありねぎ畑

喜美子

繕つて堪忍袋艶を見せ

喜久恵

折にふれ下宿へ投げる牽制球

静佳

お地藏さん少うし齢をとりました

栄恵

成行きを知っているのは風ばかり

一枝

春まつりどれも祈願のあで姿

麻代

石段を登れば仁王にぶつかる

浪子

世は動く明日が見えないこの頃よ

夏喜

瀬戸内の平和をサメに咬みつかれ

勲

困ったな大事な話咳止まらない

愛子

アメリカを駈け足で観た子の土産

淑子

優しさが嬉し優しい電話する

貞子

今日のジंकス守って赤を着ておこ

千代美

花冷えよじつとひざつこ抱いている

比呂子

椿落つはつとおどろく石の貌

不朽

春の風笑い袋をそつとくれ

房路

知恵の輪が解けて心が広くなる

一路

子には子の器がありし靴洗う

笑子

静水忌胸のビデオを巻き戻す

静風

ねむれない一夜がありぬ灯をともし

政己

洗濯をいつましようか菜種梅雨

伸子

気まぐれな毬が弾んでいるも春

みつ穂

美意識が違ふ夫婦でおもしろい

正宏

毎年の桜おんなじ貌でない

白狐

安芸の島が笑う日待つきつと来る

蝸牛

川柳塔まつえ吟社

恒松

叮紅報

アルバムの思い出ポロリ転げ落ち

雀踊子

アルバムの中の私はぬけ殻で

たつみ

アルバムの中の一人を敵とする

幾子

アルバムをめくれば私若返る

房子

アルバムに孫誕生の手形おす

登美也

アルバムに実らなかつた恋も貼り

与根一

絆から逃げだしたいと思う時  
 もつれ糸ほどけば絆保たれる  
 一石の波紋へ絆たしかめる  
 水子仏笑えぬ絆抱いている  
 この絆切つてもきれぬ鯉のぼり  
 時刻表見て旅行した気分になり  
 ファッションでひと悶着がある旅行  
 旅先で親しくなった国訛り  
 手放せば風船だつて旅に出る  
 行くまでがたのしみ旅はくたびれる  
 旅行するまえに心が旅をする  
 昼休み旅行の話しやべつただけ  
 仏さま新茶ですよと声かける  
 一服のお茶ふるさとが温かい  
 お煮ぐも漬物も出るお茶どころ  
 ロス無惨お茶のむわが家温かい  
 いい気持ち朝茶一服亡夫に上げ  
 さわやかな笑顔の裏に雑魚の意地  
 堂々と生きて弁舌さわやかに  
 咲くよりも散り際がよいさわやかさ  
 気分爽快言いたい事を言つて来る  
 新調の服さわやかに朝を発つ  
 さわやかな話を聞いた葱坊主

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

登志子 軒太楼 雄々 多賀子 太伸 友子 静江 祥庵 満江 ちかし 邦代 寿美子 煩惱児 文子 長三 米子 太泡 静恵 義丸 鶴丸 舞吉 叮紅

平凡に生きて人生総決算  
 風みどり巢立ちを送る母の目よ  
 五十路の決算孫が増えただけ  
 決算の辻褄あわせの役目です  
 決算期靴音までが冷えてくる  
 決算はどうであろうとよく食べる  
 決算へバランスシートのつくりごと

翠洋会

井上

照子報

民子 鈴江 かつ子 聖子 博利 清泉 白汀 照子 満子 しいつ 絹子 兼治郎 淑子 かりん 登志子 照子 春子 宣司 さと美 蛙 ひろ子 宏子 拓生 楓楽 慧梢 英一 恭昌

朝顔の色知らぬまま種を播く  
 種のない西瓜の嘆き知つてるか  
 蒔いた種の最後見とどけたいものだ  
 過ぎ去れば笑い話ですまされる  
 胸底にひびくものあり恋らしい  
 船出す息子へ親馬鹿旗をあげ  
 良く生きた海で浮かんで二週間  
 親の愛じつと見守る助け舟  
 又とない体験でたありがとう  
 忙しい世に逆らつて船の旅

川柳ねがわ

高田 博泉報

光子 正坊 楓 すすむ みつ子 千歩 東雲 綾子 正雄 鬼遊 来まり かすみ あやめ 一途 勇太郎 恵子 時弘 亜成 光子 一鬼 高栄 波留吉 雅文 覚然坊 とし子 英明 三郎

不適當と本音の部分削られる  
世の中の大きなルールに削られる  
歯並びを誉められている歯を磨く  
ささやかな幸せ妻が酒を待つ

よい大工来たなと思うかなくなり  
演技かつき雰囲気酔い踊り出す  
ステージのここが死に場所斬られ役

削られてこけしは北の顔になる  
親の目にまだ青春の荒削り  
ステージを自分の庭のように舞う

神経を削り合ってる嫁姑  
明日を見よう明日を見ようと好奇心  
子定した花見へ花が待っていない

柳宏子  
英王子  
速水  
博泉  
三千子

川柳大阪

高須資金太報

豊かさに馴れて長寿に悩む国  
豊作のキビの疲れは焼酎で

親の脛これが限度と見せておく  
腹割って話し足許すくわれた

自適には遠く定年つつましい  
新緑に負けず眩しい二人です

新緑に溶けて生気を洗い出し  
羽曳野で金銀帯びた剣出る

武器帯びて海を越えてはなりません  
善人の裸は何も帯びてない

額縁がないからピンでとめてある  
仲良くて頑張つとるか額縁の父

酒煙草やめて命は葉づけ

藍子  
菜月  
おさむ

勝一  
度洋

良三  
磯

博泉  
速水

三千子

柳宏子

鉄心

柳弘

しげお

希久志

雅果

青道

比呂志

敏

一つしかない命だよ大切に  
気休めの言葉と知っている命  
命綱信じ合ってる夫婦独楽  
額縁の裏に内緒の金がある

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

引受けてもう悔いている早合点  
菖蒲湯で亡父の背中を思い出す  
映画館軽い軒が耳につく

盃を重ねてしぶく出る小唄  
ハプニング越えて祝盃に酔っている  
盃を回して絆たしかめる

未成年でも盃欲しい入試パス  
着る人がよくて安物よく見える  
安物の金魚天寿を全うし

安物の自負曇天を嫌い抜く  
安物をセンスの良さでカバーする  
褒められて安物ですと言ひそびれ

厄介をかけたに死んだいい親爺  
厄介な話は逃げる粗大ゴミ  
厄介な話まぎらすタバコの火

厄介な向岸から来た客人  
厄介をかけた青りんご熟れてくる  
厄介な自転車ばかりある歩道

厄介をかけた息子が見てくれる

川柳塔とつとり

怒っても子供熱ってパソコンを  
栄養も洗い落として米を食う

岩原

喬水報

愛蔵

天平  
与呂志  
笑風  
金太

尚利

修水

六浦

勇次郎

澄子

敏之

弘治

すみ

鹿太

歌子

石舟

正治

向西

過去洗いプラトニックな恋をする  
いやなこと洗い流して趣味に生き  
スナックに生命を洗う水がある  
過去洗うきれいな涙溜めてある  
美しい錯覚だった恋洗う

難聴が進み静けさ深くなる  
もの静か妻反撃の機会待つ  
心静かにあらん限りの神だのみ

静かなら静かで隣気にかかる  
おぼろ月影が静かに結ばれた  
静かな夜誰かに電話したくなる

サメが棲む静かな海が怖くなる  
梵鐘の余韻にうまいお茶をのむ  
米だけで食えない農婦バイトする

僕の胃は米が一番適してる  
やはり主婦今日の終りに米を研ぐ  
敗戦のお粥に米が浮いていた

昨日よりいい日にしたい米を研ぐ  
米と塩だけは切らさぬ母である

川柳藤井寺

高田美代子報

阪神が勝って機嫌のよいビール  
頭からのれん分け入る関東煮  
頂点の男のんびりひげをそる

百歳の人気のんびりから多忙  
あわてないスペイン氣質憎めない  
のんびりと釣竿光る春の川

街の灯も春のんびりとたそがれる  
肩書もこだわりもとれ太公望

利武

繁男  
公輔  
信子  
寿美子  
キミ子  
トミ子

孝由  
政子  
圭一郎  
艶子  
帆雀  
山人  
粗粒  
明美  
俊路  
輪多朗  
一京  
旋風  
笹

春のんのんサテとのんびり猫の伸びのんびりと蟻を見ている無精髭露天風呂敷ものんびり昼寝するのんびりと歩く見えないとこが見えのんびりと孤独知ってる花の冷え  
 桃栗三年柿は待ちくたびれた頃  
 票を読むことにたけてる議員秘書  
 読むつもり本を枕に春うらら  
 先読んでつまずく石がたんとある  
 一杯を酌いで相手を読む女将  
 裏を読むその裏側を敵も読む  
 深過ぎて独り相撲になった読み  
 医学書を読むとだんだん胃が痛む  
 裏ばかり読んで心が痩せている  
 遺言書読めば絆が連れ出す  
 答えもフノーとわかっている無心  
 手の内を読んで射程距離にいる  
 春の季を読んで桜は北へ咲く  
 高飛車に出たが相手が強すぎた  
 抜擢の辞令へ椅子が高すぎる  
 お隣の棟より少し高くする  
 打つ手皆打って枕を高く寝る

川柳 柳 柳

河内

月子報

その話中心はずれていませんか  
 考えるのが下手で安住してる井戸  
 わだかまり洗い流して仲直り  
 考えた末中年のトラバーユ  
 考えが古いと孫が遠ざかる

春 蘭  
 柳 宏子  
 頂 留子  
 真 砂  
 志 華子

寿 美  
 志 洋  
 和 夫  
 昭 子  
 与 呂志  
 和 子  
 みのる  
 智 久  
 悦 子  
 ケイ子  
 たかし  
 晋 晋  
 修 六  
 婦 美枝  
 政 代  
 吸 江  
 森 子  
 義 一  
 宗 一  
 美 房  
 しげお  
 一 屯

半袖を着て長袖も持って出る  
 中心を少し外して生きている  
 日本が中心にある世界地図  
 洗う茶碗大中小と皆達者  
 洗うものない一日のストレスよ  
 絵葉書の川へ目高を探しに行く  
 内弁慶友のひと押し待っている  
 押し合いの中で力を抜いてみる  
 泣き顔をきれいに洗い出迎える  
 残り物なくてうきうき皿洗う  
 あと押しをしたりされたりして夫婦  
 ためらいの背を黙って押ししてくれ  
 首 胸 手 同じ順序で洗います  
 白線の外へ押し出す愛もある  
 強いのが下位で野球が面白い  
 考えた拳句の馬鹿になり切ろう  
 手の長い人に押されて買いそこね  
 押しつけの親切ほとほと持てあまし  
 押しのけて座りたい日もある電車  
 横車押す時男命賭け  
 子には子の考えがあり道を選ぶ  
 核ボタン押す手に悪魔のりたがり  
 風に打たれ若葉に打たれてる詩人  
 単純なこと考えて雲見てる

夏がきて格段目立つ首の皺  
 格段の覚悟が要るぞ午前様  
 化粧して君は格段美しい

岸和田川柳会

芳地

狸村報

さよ子  
 文 時  
 恵 空

武 助  
 狸 村  
 道 胤  
 福 一  
 柳 影  
 作 一郎  
 夏 子  
 春 香  
 小 雪  
 星 子  
 かりん  
 半 銭  
 楓  
 榎 梢  
 東 雲  
 凡 子  
 千 万子  
 紀 美女  
 満 州  
 与 呂志  
 妻 子  
 小 鹿  
 天 笑  
 月 子

区別などあるわけがない母の愛  
 偏差値で区別されてはたまらない  
 宗教的区別分裂するソ連  
 粗品にもABCのランク付け  
 棚ぼたのチャンス待つて日が暮れる  
 どっちもが喋る機会を探してる  
 ええ機会やからとやいとすえられる  
 辞令発表喜ぶ顔と青い顔  
 五つ子の名前を母は間違えず  
 いろいろな世代がうつる掲示板  
 何となく好感もてる丸い顔  
 知らん振りする好感は本気だな  
 好感が持てそう歪もっていく  
 ごひいきは我が家揃うた舞の海  
 好感の持った拍手に無口なり  
 好感をもてあましてる日記

高槻川柳サークル卯の花 辻白溪子報

野ほとけの顔にやさしく散るさくら  
 指切りをさせて静かな子供部屋  
 坪庭の男静かに策をねる  
 葱坊主静かに本棚整理する  
 逃げのびて鱗一枚すつ刺がす  
 表札は偽名と知らぬ郵便屋  
 プライドを持って鏡に励まされ  
 妥協ぐせついて何かを見失う  
 ニさんの部屋にも一つある鏡  
 分校閉鎖風もないのに花が散る  
 残業残業とうとう桜見ずじまい

ひ で  
 一 弥  
 萬 的  
 柳 宏子  
 す みえ  
 月 子  
 天 笑  
 康 介  
 富 志子  
 狸 村  
 通 彦  
 浪 速子  
 小 紋  
 白 光子  
 武 助  
 ダ ン吉  
 ス ミ子  
 節 子  
 静 江  
 稲 子  
 恵 美子  
 正 坊  
 乙 女  
 よ 志子  
 紫 香  
 萬 的  
 杜 的



## ■各地句会だより

# 川柳ねやがわ

高田博泉

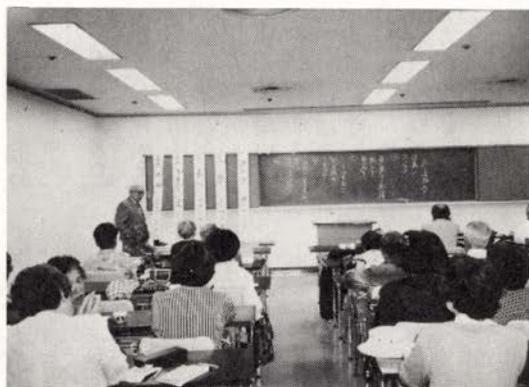
昭和五十年一月五日、高鷲亜鈍氏（故人）

の呼びかけで、橘高薫風氏を指導者に迎えて三井団地で産声をあげる。大半が素人ばかりで、当時は十名から十五名程度、川柳塔の先輩方にはずいぶんとお世話を見えられた。お替り立ち代り、誰かが指導を見えられた。お陰様で、皆さんの上達も早く、メンバーも少しずつ増えてくるようになった。発足後二か月目からは、たとえ五名でも休まないを原則に毎月第三日曜日の午後を句会の日と決め、今日まで続いている。

第四十三回目からは、団地の集会所から現在の寝屋川市立総合センターに会場を移し、川柳人口も急激に増えてくる。もちろん地道な努力が実を結んだと言えるが、里小路氏を中心に素人養成の場、花の輪句会、老人クラブへの指導と川柳に興味をもってもらうため

の努力は今でも続いている。発足当時は、会費収入で句報を出すのも困難で、手書きで細々と発行したものだ。大会を企画すれば赤字が出る始末で、会の運営も大変だった。五月句会で百九十四回になったが、常に四十名以上の参加が見込めるようになり、運営上の心配は、まずなくなった。

川柳ねやがわの持味は、特殊事情がない限り、毎月第三日曜日に必ず開いていること、年一度の大会も十一月三日と決めてあるので



割合い句会日を覚えて下さっている方が多いよ。だ。平常月は宿題三題・席題一題と自由吟、また自由吟以外の四題の秀句を並べて互選をし、月間賞を決めている。選評リードを西田柳宏子さんをお願いしているが、ベテランの分かりやすい説明と天性の技術で、出席の皆さんから意見を引き出させてリードしてゆく。初心者には勉強になる場として好評。

毎月の入選句を記録しておいて年間賞（カップと副賞）を、また五位までには記念品を用意している。皆勤者も毎年十名くらいはおられ、昨年は十年連続皆勤者が出た。

指導者には橘高薫風、黒川紫香、西田柳宏子氏と、川柳塔の先生方をお迎えできるのも大きな魅力のある句会になっており、皆さんの作品もだんだんレベルが高くなってきている。会員も五十名は下らないまでになったが、何と言っても女性の参加者が増えてきたことが、会員の輪を広げてゆく大きな要因のように思う。

十五周年記念句会を催した折には百名以上の参加を得たが、次の記念句会も企画して川柳ねやがわの輪をますます広げてゆきたいと考えている。第三日曜日の午後には必ず句会が開かれている。みなさん、一度のぞいてみませんか…。

# 本社 六月旬会

六月八日(月)午後五時半

メンズフアッションセンター

折から国をゆるがしているPKO問題取材に、朝日新聞社から記者を迎えた旬会になった。そのため席題「PKO」に取組むことになり、出席の八十九名は正面からこの問題を見据える機会が得られた。

「おはなし」は高杉鬼遊氏。司会の言によると、同氏はひと月ほど前から言葉数が少なかったという。察するところ、今日に備えてネタをしゃべってしまわないように、という配慮だったらしい。持ち前のユーモアをたっぷりと盛り、蘊蓄を傾けたよもやま話に、三十分楽しませてもらった。

その後、全日本川柳和歌山大会を六日後に控え、野村太茂津氏から、最後のお願いがあつた。柳界発展のために、一年前からこの大会へ向け準備をすすめてきた人達のために盛会をひたすら切望するのみである。

初出席は西宮市の山本義子さん

月間賞は小池しげお氏(松原市)に輝く。

(司会—東雲) (受付—みつ子・照子)  
(清記—楓葉) (記録—ダン吉・月子)  
席題「PKO」 河内天笑選

PKO 夫唱婦随と言つとれず  
国民のねむりをさますPKO  
PKO 陛下は何と仰せです  
三猿も乗り出してくるPKO  
神さんは横向いてはるPKO  
隣国の神経尖るPKO  
大正の男に嫌なPKO  
ゴリ押しと意地でもつれるPKO  
真剣な議論へ時をかけられよ  
PKOの審議棚上げして牛歩  
金だけの貢献やつたらあかんのか  
弟は戦死してますPKO  
金婚に不安が走るPKO  
PKOあの日の悪夢蘇る  
自衛隊 平和の為に尽すべし  
大国日本の面子もおますPKO  
PKO 発車ブレーキ利きますか  
大国の美学を煽るPKO  
遮断機を上げたらあかんPKO  
自衛隊やらねば誰がやりますか  
九条へ違反PKOのエゴ  
PKOもう赤紙は見たくない  
PKO 進軍ラッパ聞えそろう  
暗い青春 振り返らせるPKO  
暗闇を通る無気味なPKO

薫風 義子 冬栗 満津子 文秋 薜兒 萬的 寿子 狸村 金太 英子 正坊 東雲 保州 美代子 東雲 雅文 みつ子 杜的 照子

PKO 今度選挙が面白い  
PKO 見守っている兵の墓  
PKO いくさ覚悟で決めなはれ  
PKO 家庭の中も右派と左派  
孫たちの未来気になるPKO  
PKO 世界を愛の輪でつなぐ  
PKO 何故愛の手に躊躇する  
ロボットに頼んで見てはPKO  
PKO 国民投票して決めろ

吸江 敏 鬼遊 朱夏 (小)英子 射月芳 悟郎 満津子 道胤

PKO 危険な角を曲りきる  
PKO 先進国と言っ重荷  
母としてPKO Fに異議があり  
この道はいつか来た道PKO F  
千人針 知らぬ世代へPKO  
自衛隊の応募が減ったPKO  
箱船に積むか積みぬかPKO

薫 芳子 智子 勝晴 透太 白溪子 はつ絵 保州 天笑

一億にPKO という踏み絵  
PKO 日本はいくさアレルギー  
兼題「指輪」 桜井千秀選  
指を抱くおんなの指輪よく光る  
指輪外すと少し自由になれそろうな  
指輪外して家裁のドアを強く押す  
男運悪いと思つている指輪  
小粒でも確かな愛がある指輪  
ラストダンス派手な指輪がよく光る

鬼遊 智子 武庫坊 正坊 諷云児 萬的

二人だけの秘密を知っている指輪  
 エンゲージリングに夢は駆け巡る  
 指輪などいらぬ現金おくれやす  
 税務署を出ると指輪をはめている  
 指輪交換しあわせごっこ開始する  
 自信過剰の男が嵌めていた指輪  
 男と女のドラマ知ってある指輪  
 その時は身元証明する指輪  
 本物にしては翡翠が大き過ぎ  
 指輪など知らない指で母達者  
 華やかな指輪ときどきうわすする  
 働く手 指輪で飾ることはない  
 女にしてくれた指輪が手放せぬ  
 残り火が指輪捨てよと唆す  
 エンゲージリングいつかは枷となるだろう  
 天をさす指に指輪などいらぬ  
 イミテーションの指輪ロマンを抱いている  
 しょうもない指輪をたんと持っている  
 税務署へ行きます指輪替えてます  
 或る不信 指輪くるくる回り出す  
 一カラットの指輪の愛がゆれている  
 どの指に嵌めよう亡母の形見分け  
 (備英)子  
 イミテーション指輪でけじめつけられる  
 ライバルが何時も指輪を変えてくる  
 六月の女が嵌めている真珠  
 指輪キラキラきつとあなたは寂しがり

杜的 文秋 冬葉 靖子 幸子 昭子 柳伸 道胤 萬的 義子 満津子 雀踊子 美幸 朱夏 透太 月子 いわゑ 重人 天笑

それからのノラは指輪を欲しがらぬ  
 くすり指 指輪はひとつだけでよい  
 信じ合う愛の指輪は美しい  
 つながれた指輪に四季の彩がある  
 愛醒めてそろそろ値踏みする指輪  
 指輪一個の呪文にずっと縛られる  
 逢うひとの好みを知っている指輪  
 兼題「焼く」 江口 度選  
 おいしいと言われたパイを今日も焼く  
 お焼香の順に不満が少しある  
 独り居の徒然のまま焼く毛虫  
 幸せは朝の玉子を二つ焼く  
 哲学の道で八ッ橋焼いている  
 お隣もスキ焼らしい換気扇  
 文束を焼き黒髪を切り落とす  
 焼芋の好きな女で情がある  
 名人の目に気に入らぬ焼き上がり  
 やきもちを妻に入らべん焼かせたい  
 なす焼いて隣へ生妻走らせる  
 平凡な今日を喜ぶ焼なすび  
 灯油かぶってマッチ擦るのがこわくなり  
 亡き父を焼いてる煙の淡いこと  
 穀を焼き少しセンチな煙になる  
 世話を焼くほとんど趣味で焼いている

楓楽 月子 狸村 森子 柳伸 美代子 千秀 御前 信敬 芳子 風云児 寿子 洋敏 柳宏子 冬太 金葉 典子 天笑 敏 房

幸せを守ってくれた御札焼く  
 玉碎の島でヤングの日焼け止め  
 山女焼き山の民話に酒を酌ぐ  
 焼き捨てた手紙未練がたんとある  
 焼き捨ててくれと追伸ある手紙  
 父さんの方が上手な目玉焼き  
 嫁く娘がひっそりと焼く古日記  
 父を焼いた煙を今日も忘れない  
 焼き捨てて思いの残る読まぬ文  
 難民の目に焼きついている恐怖  
 手を焼いた子に背負われて行く余生  
 焼跡の記憶で曲がるばくの背骨  
 いい人が来そうな予感パイを焼く  
 いか焼の匂いまつりとちちははと  
 朝焼けがきれいだ先は思ふまい  
 焼き鳥の串を数えてうす笑い  
 プロポースは今だ鉄が焼けている  
 煮ても焼いても食えぬわたしの影法師  
 備長で焼いて欲しいと言うつなぎ  
 出る釘の頭に焼きが入れている  
 忠告の手紙を焼いている涙  
 焼け肥りまだ燻っている噂  
 毛虫焼く虚しきものは花の芯  
 回り道させる炭火で焼く鰻  
 猫の鼻びくともさせずかます焼く

志洋 重人 武庫坊 (小)英子 三男 (備)英子 志洋 幸子 シマ子 保州 風云児 美幸 靖子 柳弘 正坊 楓楽 透太 しげお 友照 満津子 薫 小路 度

兼題「出る」 五置 重人 選

出る杭を最初に打ちに来る同志 (翰) 正子  
 出る時は泣かぬと決意した靴だ 文子  
 見あたらぬ出口を探す影法師 雀踊子  
 出るところへ出るとは悪い方が言う 美房  
 出直して来ますとセールスくじけない 頂留子  
 今出たと出前これから出るらしい 寿美  
 軽い浮気を期待して出る宿の下駄 萬的  
 口出しを横でするからややこしい 昭子  
 ライバルの出方しだいで腹を決め 頂留子  
 高飛車へ妥協の案が出そびれる はつ絵  
 出るだけの汗を流した鬼の面 悦郎  
 新茶からお国なまりも飛んで出る いわゑ  
 鳥籠を出窓に置いてひとり住む みつ子  
 振り向いてほしい私の出る幕だ 太茂津  
 熊の出る山を歩いている不安 狸村  
 おばあちゃんがテレビに出てる事故現場 典子  
 出る幕へまるい台詞を溜めている 千秀  
 芽の出ない僕を笑っている日記 丹吉  
 出稼ぎがリンゴの歌を恋しがる 芳子  
 出る釘を打てば私の負けになる 森子  
 出ししぶるよつに自販機のお釣り 杜的  
 うちの娘も出るとこは出て出花です 道胤  
 猫だけがいつも迎えに出てくれる 丹吉  
 お車料出るのでちよつと顔を出し 岳人  
 父さんが出るのと無口になる電話 芳子  
 出廻らしのお茶に本音を知らされる 朱夏  
 踏み出した一歩の重み知っている 房子

欲みな捨てたら迷路出られるか 幸  
 出しゃばりの男の影が見当らぬ 萬的  
 借金に来たのに酒と寿司が出る 風云児  
 殻を出て走る夢見た蝸牛 正坊  
 寝返りを打って出てゆく深い森 寿子  
 肩書を取る と出番のない名刺 保州  
 あんない人が選挙に出るといふ 美房  
 にんげんに戻る呪文が出てこない 幸  
 うれしさへ涙は同じ色で出る 薫  
 メルヘンの塔は時どき魔女が出る 照子  
 夢いっぱい積んで出て行く白いバラ 森子  
 ときどきは輪を出て自分たしかめる 楓  
 天 楽  
 風見鶏やがてこの娘も旅に出る 度  
 出動簿おしてあくびをかみころす 重人  
 兼題「針」 里 小路 選

針持たぬ娘も列にいる針供養 針持子  
 梅安の殺しの針は裏の顔 梅安  
 兄弟をつないだ母のしんし針 縫い針に女心がこめてある  
 小物つと釣れぬと擬針知っている 針持子  
 針持しと落ちて母の座りだこ 針持子  
 針ほどの罪 肩書へ絡みつき 針持子  
 針持てぬ娘の荷物にもお針箱 針持子  
 針のある言葉に僕は凍った 針持子  
 針の山 鬼が作って鬼が踏む 針持子  
 美しい針目に亡母の顔がある 針持子  
 針で隅つつき大事なこと忘れ 針持子  
 返し針 入念にして断つ思い 針持子  
 刺繡針 無心に裸婦と向い合う 針持子  
 針を呑む覚悟が庇う母の嘘 針持子  
 針千本飲む指切りをもつ忘れ 針持子  
 針のないことばが刺さる裏表 針持子  
 編針が孫の背丈に追いつけず 針持子  
 女房に針吞まされることばかり 針持子  
 ルージュ濃くひいて見せないふくみ針 針持子  
 針と糸バッグへ祖母母 わたくしも 針持子  
 針仕事好きな娘の評判記 針持子  
 父ちゃんが上手に針を使てはる 針持子  
 こんやくが痛い言うてる針供養 針持子  
 針 佳  
 北を指す針が時どき拗ねている 針持子  
 針のない時計をもつて猫と住む 針持子  
 正念場 針一本も逃がせない 針持子  
 針山は錆びて女は外が好き 針持子

真夜中を狂わずに待つおんな針

人

森子

おばあさんになったと思ふ針の穴

智子

地

針仕事 妻はやさしい顔になる

靖子

天

花時計 針は幸せ考える

照子

軸

寝そびれて時計の針がわずらわし

小路

兼題「凄 い」 西尾

栞選

赤坂で凄い話を飲みながら

重人

想像の凄い美人が振り返る

達子

凄いいこと考えている倦怠期

靖子

凄んでも凄まなくても夜は明ける

敬子

凄いほど月が冴えてる通夜の道

薰子

開けた戸へバックの妻の凄いい顔

温子

無一物になって笑顔のすこい奴

信義

凄いのがギネスブックを盛りあげる

ただし

ミンボーの女で見せる凄いい顔

道胤

靈感師 先祖の凄いい修羅を言ふ

友照

もの凄いいこと言つてはるおちよほ口

朱夏

ロス暴動 弱者の凄さしかと見た

露児

山小屋で聞く雷は物凄いい

紫香

片っ端から趣味の程度でない凄さ

年代

凄いいニュースもマンネリになる怖さ

昭子

全部あげると女が凄いいことをいう

螢

阪神の今年へ言葉みつからぬ

楓楽

花柄の大屋政子を凄いいと思ふ

露児

凄いい事言つてはいるが気は弱い

房子

凄いい数が続く円周率無限

雅文

屋久杉の凄さ注連縄張つてある

萬的

左遷地に凄いい美人が居る噂

透太

本当の凄さを知っている無口

房子

土壇場で敵を味方にさせた女

房子女

停年に凄いい離縁が待ち構え

悟郎

部屋割りに凄いい軒が一人居る

小路

ぜんざいがとつても好きな凄いい奴

岳人

もの凄いい顔でトイレへ行つたきり

月子

細腕とはいえぬ女将の保釈金

たず子

不倫願望そんなに凄いいことですか

靖子

いつになく凄いい荒れてる父の酒

飄云児

凄いい風 手抜きの仕事気にかかり

トメ子

住

物凄いい顔 只今化粧中

保州

カウント九でまた立ち上がる薄さい

度

原爆の凄さを語る義務がある

三男

すこい美人すこいサーピス凄いいつけ

満津子

凄絶な生涯だった多喜二の忌

正坊

人

妻の研ぐ包丁 凄いいほど切れる

雀踊子

地

木簡に凄いいくらしの長屋王

狸村

天

徹文の凄さを李白からもらう

しげお

軸

ものすこいやんかギャルにとりまかれ

栞

全日本川柳和歌山大会秀句

6月14日 和歌山県民文化会館

「はるかに」

塩見 一釜選

さくらばはらはら今日がはるかな過去になる

玉木 柳子

春雷をはるかに聞いてひとりきり 長岡笑子

「陽」

竹本瓢太郎選

耕してこの地の温む陽を愛す 岡部 暖窓

太陽に唾をかけている驕り 原田 北涯

「城」

西尾 栞選

ころし文句におんなの城は落とされぬ

内田 結実

城主末裔 税務係に籍を置く

大久保卓次

「砂」

北山 紀世選

逆転がはじまっている砂時計 寺尾 俊平

砂嵐止んだらわたしも旅に出る 河内 月子

「和む」

小林由多香選

晩酌の父頂点にして和む 月原 宵明

定位置に母居るだけで輪が和む 堀端 三男

「宴」

卜部 晴美選

ピリオドを拾う宴の真ん中で 田中 万里

面子とはつまらぬものよ花の宴 小松原爽介

「加減」

萩原 柳絮選

無器用に生きて手加減などしない 古久保和子

先頭を走り加減を見失う 山本ひさゑ



# 原 独仙氏を悼む

久 家 代 仕 男

ご家族皆さんの手厚いご看護にもかかわらず、去る四月十九日にご逝去になったとの報に接したこと、残念の上もありませぬ。私が独仙氏と知己を得たのは、昭和二十四年の暮れのころかと存じます。

当時、氏は大和紡に勤務のかたわら、職場川柳「大和紡」を復活され、私たちは食糧事務所に稲穂川柳会の発足を見、共にいずも川柳会創立者故尼緑之助先生に師事し、ご指導を仰いでいたことであります。

しかし、そのころ、すでに独仙氏は長老格として尼師の信頼を一身に集めておられ、温厚・磊落・洒脱のお人柄は、後輩からも独仙さんの雅号で敬愛され、会の運営には欠くことのできなない大きな存在でありました。ことに尼師とは師弟の境を越えた温かいご関係にあり、尼さんと話しかけることのできる唯一の存在でありました。

省みますれば昭和四十八年、尼師が大阪の

川柳塔から路郎賞を受賞されますや、率先して師の句碑建立を提唱され、自ら建立委員長の大役を受けられ、神社庁、環境庁等の諸認可手続に奔走され、彼の国立公園日御碕の景勝地への句碑建立に貢献された功績は称えて余りあるものがあります。

県に川柳協会の設立を見るや、長年にわたる監事の要職を全うされ、いずも川柳会の節目の大会には常に大会委員長の大役を務められるなど、その功績を認められ、いずも川柳会創立六十年記念大会には、川柳塔社から永年にわたる川柳会の補佐役として隆盛に寄与された貢献に対して、破格の表彰状を授与されましたことは、記憶に新しいところであります。

明年度は、尼師の句碑建立二十周年の記念大会を会として計画に組み込んでおり、是非ともご無理を押ししてでもご参列をと、誰もがこころ待ちにいたしておりましたことを思い

合わせ、残念でなりません。

そして独仙氏のあの大らかな屈託のない笑顔と語り口、釣り、投網、玉突き、ゴルフ、ゲートボール、興に入れば三味、大鼓、尺八と多趣多芸。誰からも愛された氏の面影は、生涯、會員の眼裏に焼きついて離れないでしよう。

私たち後輩は、氏のご尽力と多大な功績の数々を鑑に、これを汚さぬよう会の継承に尽す所存であります。どうか安らかなるご冥福をお祈りいたします。合掌 釈独仙居士

## 第7回 川柳塔勉強会

とき 9月10日(木)・11日(金)

会場 香川県大川郡白鳥町

日程 一泊二日(徳島泊)

①大阪―深日―津名―鳴門―徳島

②徳島―白鳥―高松―岡山―大阪

経費 約三万五千円(交通費・宿泊費 食費ほか)

定員 四十名(先着順)

締切 7月末日

申込先 川柳塔社事務所または

黒川紫香・川島諷云児へ

# 暑中お見舞い申し上げます

## 川柳塔社常任理事会

							常 任 理 事	副 理 事 長	副 主 幹	理 事 長	主 幹		
小池しげお	川島 諷云児	河内 月子	河内 天笑	神谷 凡九郎	奥田 みつ子	榎本 吐来	板尾 岳人	阿萬 萬的	西田 柳宏子	野村 太茂津	黒川 紫香	橘 高薫風	西尾 栗
	吉岡 美房	宮園 射月芳	宮口 笛生	藤井 一二三	吐田 公一	春城 武庫坊	西出 楓楽	辻 白溪子	玉置 重人	田中 正坊	高杉 鬼遊	塩満 敏	小出 智子

# 川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小島蘭幸方

暑中お見舞い申し上げます

平成四年 盛夏

会 会  
計 長

山古古岩藤古石岡三森時岩小  
内田田本解谷原本宅井広本島  
ほ房比太文静節淑清不菁一笑蘭  
か呂子虚晴風夫子水朽居路子幸  
一同子子

暑中お見舞い申し上げます

# 西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館  
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

西	門	奥	奥	上	朝	秋	黒
口	谷	山	田	田	山	元	川
いわゑ	たず子	美智子	みつ子	佳秋	千世子	てる香	紫
吉	山	丸	藤	春	春	林	
田	崎	山	村	城	城		
笑	君	よし津	ノ	武庫坊	年	はつ絵	
女	子		女	坊	代		

暑中御見舞い

申し上げます

去る四月二十三日の句碑  
建立除幕並びに記念川柳大  
会の折は、各地より多数ご  
声援並びにご参加を得、賑  
やかに催すことが出来まし  
た。本当に有難うございま  
した。厚く御礼を申し上げます。

盛夏

黒川紫香

暑うおます

正本水客  
黒川紫香  
阿萬萬的  
松川杜的  
辻池白溪子  
小島しげお  
川島諷云児  
藤村メ女  
竹内花代子  
松川芳子  
奥山美智子  
茂見よ志子  
笠嶋恵美子

尼崎  
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後1時

サンシビック/尼崎三階  
(阪神尼崎駅西南三分)  
各地句会案内を御覧下さい

尼崎  
おはま川柳会

例会 毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五十八  
尾浜公民館

尼崎  
小園川柳会

例会 毎月第二、四水曜日午前10時

尼崎市若王子三二二二一  
小園公民館

暑中お見舞申し上げます

# 八尾市民川柳会

## もくせい川柳会

村三満榊星春額辻玉田滝栗江上一安黒橘	上宅仲本野城田川置中北原口田瀬藤川高	とつきさ登武明慶英正博富明登福寿紫薫	くえく路代庫庫坊吉子子坊史子光実一美子香風
--------------------	--------------------	--------------------	-----------------------

定例会句会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

三輪通彦	田中文時	中野恵空	宮園射月芳	楊井二南	内田一弥	真崎浪速子	半井甘平	深日白光子	福浦勝晴	阿萬萬的	西田柳宏子	橘高薫風
植山武助	藪野ケイ子	原さよ子	古野ひで	清野こう	島崎富士子	林春栄	高橋操漕	岩佐ダン吉	芳地狸村	米本小紋	小林すみえ	

## 岸和田川柳会

暑中お見舞い申し上げます

暑中お見舞申し上げます

川柳ささやま社一同

季刊 川柳展望 主宰・時実新子

誌代（年間） 4,840円

〒563-01 大阪府とよの町ときわ台3-4-17  
天根夢草方 川柳展望事務局  
電話 (0727) 38-1845  
FAX (0727) 38-6770  
郵便振替 神戸 5-49710

南大阪川柳会

会 員 一 同



「川柳はびきの」に五十回連載

# 初歩教室の集大成

榎本吐来著

## 吐来の川柳初歩教室

題字 西尾 葉

序文 橘高 薫風

編集 塩満 敏

\*B6判百二十ページ

\*発行 一九九二年六月十四日

\*頒価 千五百円

\*送料 三百八十円

\*発行所 川柳塔社

暑中お見舞い申し上げます

# 川柳クラブわたの花

大阪・八尾

西田	田中	高橋	高橋	杉村	白井	川崎	片上	小澤	大内	内田	指宿	井上	生島	高杉
一花	トシエ	初子	明子	龍襄	貞子	友甫	英一	泰成	朝子	千枝子	しのぶ	ますみ	鬼遊	
鷺見	吉村	山本	山下	安永	粂山	宮崎	宮崎	水谷	松本	松葉	平川	服部	秦川	二瓶
章風	一俊	美津留	暁子	隆子	シマ子	弘直	そみき子	の江	君幸	幸枝	春子	正子	すすむ	道子

兒田武三吉高楠高赤菊高福中中吉笠  
 他島中部崎田田田木地津元島原岡原  
 一与孝敦伴つ治昭美和繁三みの志比呂美吸  
 同呂志子子子子子子子子子子子子男郎る洋志房江

## 川 柳 藤 井 寺

### 姫路 川柳化粧櫓の会

平成四年 盛夏

暑中お見舞い申し上げます

川島春蘭	駒井はる女	植村客遊子	保西岳詩	大原葉香	北山越山	松浦大鷹	松浦輝月	丁坪サワ子	服部一典
中塚遊峰	丸尾はる子	福本好花	福島姫女	美原嘉	本多茂章	菅原朱玉	内海美代	山崎治夢	玉田三重

Y F C 文化センター  
川柳セミナー

西	小	浅	盛	中	岸	大	坪	人
尾	島	野		田	野	塚	田	見
	治	房	ス	悠	あ	節	紅	翠
葉	子	子	ズ	水	や	子	葉	記
					め			

サークル 檸檬

橘	伊	木	池	友	新	楠	大	松	片	田	藤
高	奈	内	尾	碓	開		澤	本	岡	形	田
薰	ます	キ	登	雅	千	美	三	今	智	美	泰
風	すみ	ミ	美	子	代	子	四	日	恵	緒	子
			子		女		子	子	子		

東大阪市川柳同好会

会 長 <sup>カク</sup>片 <sup>オカ</sup>岡 <sup>コ</sup>湖 <sup>フウ</sup>風

会 員 一 同

暑中お見舞い申し上げます

# 熊本川柳会

黒田 有働 芳緑  
鶴田 謹 仙  
遠山 夏 爾  
北川 一 進  
高野 宵 草  
永田 俊 子  
宇野 昭 代  
大川 幸 子  
岩切 康 子

暑中お見舞い申し上げます

## 花の卯の川柳サークル高槻 — 同

暑中お見舞

申し上げます

# 城北川柳会

連絡先 〒675-01

加古川市平岡町新在家二〇〇六一八

吐田公一

電話(〇七九四)二二一三六八一

暑中お見舞い申し上げます

平成4年 盛夏（1992年）

# 山柳塔わかやま

ありがとうございました

第十六回全国川柳和歌山大会は、皆さまの絶大なお力を戴きまして、華やかに、盛大に挙行、大成功裡に納めることができました。

衷心より厚くお礼申し上げます。

橋本市 紀水川柳会  
由良町 川柳ゆら  
日高町 萩の花川柳会  
岩出町 川柳岩出  
和歌山市 川柳塔わかやま

# 柳界展望

編集部

市名譽市民・米寿記念祝賀

会が6月23日、ロイヤルホ

テル「光琳の間」で開かれ

本社から西尾主幹、橋高理

事長、西田副理事長が出席。

★第19回堺まつり協賛・堺

市民川柳の会が10月10日午

後1時から堺総合福祉会館

で開かれる。会費1000

円で、各題選者は、順番

三宅保州▽神▽牛尾緑良▽

火▽長江時子▽辛い▽大路

美幸▽付合い▽西川景子▽

輪▽奥山晴生▽運▽小松原

爽介▽墓▽河内天笑

▽同人消息△

■高橋千子さん（本社理

事・堺市）は5月13日から

18日までショップ南海堺で

開かれた日本工芸盆栽翠山

会作品展に2点を出品、堺

市議会議長賞を受賞した。

■松本文子さん（同人・島

根県）は島根県海外研修事

業団「女性の翼」の一員と

して6月10日から10日間に

わたって訪欧した。

▽出版△

■岩田三和句集（日本

現代川柳叢書第27集・A5

判108頁・詩歌文学刊行会発

行）。柴田午朗序文。

■川柳句集「あすか」中尾

飛鳥（B6判214頁・番傘折

鶴川柳会発行）。磯野いさむ

序文、一万八千余句から七

百五十句を自選、5編の随

想とともに収録。

■末村道子川柳句集「吾亦

紅」（噴煙叢書第9集・B6

判134頁・川柳噴煙吟社刊）

## ▼訃報▲

■上田綾子さん（本社同人

上田佳秋氏夫人）6月10日

肺がんのため死去、62歳。

告別式は同12日、西宮市の

満池谷会館で行われ、黒川

紫香副主幹らが弔問した。

## ▼訂正▲

■5月号P75上段4行目

「藤井雅子」→「藤井春子」

■6月号P50下段2行目

「嫁ぐ娘へ父は金魚に餌を

やる」（父百句）の作者名は

福本英子の誤りでした。

同P84中段7行目・初

歩教室の添削句（山菜の抱

く一日春の山）は（山菜の

招く一日春の山）の誤りで

した。

## 日川協が社団法人に

社団法人・全日本川柳

協会は5月7日、東京で

設立総会を開いたが、6

月3日、文化庁から設立

を許可され、同14日、和

歌山市で第1回総会を開

いた。役員には、会長に

仲川たけし、理事長に山

田良行のほか、常務理事

5名、理事13名、監事2

名を選任、本社関係では

西尾菜が常務理事、橋高

薫風が理事に就任した。

なお、これにより日本

川柳協会は発展的に解消

し、新組織に移行する。

川柳 東大 阪	25日(土)午後6時から 秘密・水・近い・姐御	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳	26日(日)午後1時から 用心・駆ける・キス・(情)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円（62円切手5枚）、各題3句以内  
原稿送り先（締切・毎月20日 予め決定している場合は何か月分でも結構です）  
〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

## 7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(水)午後1時から 来週・火花・太い・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2丁16-3 河内天笑
尼崎 いくしま	3日(金)午後1時から 冗談・仮面・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川柳塔 まつえ	11日(土)午後1時半から 予想・焼く・噂	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	12日(日)午後1時から 軽快・劇・削る・(計画)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	13日(月)午後1時から 昔・まぶしい・呆れる・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚 各題2句
八尾市民 川柳会	14日(火)午後6時から コップ・野心・賞・棚	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
高槻川柳 サークル 卯の花	16日(木) 正午から 包丁・夜・うわさ・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 各題2句
富柳会	16日(木)午後1時から 責める・さざ波・拾う	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南海 川柳会	17日(金)午後6時から 開店・暗号・スランプ・手頃	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳 ねやがわ	19日(日) 正午から シャワー・値打ち・握る・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川柳会	20日(月)午後1時から 銀・旗・狂う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	20日(月)午後5時から 権利・狭い・手強い・値段	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
岸和田 川柳会	23日(木)午後6時から 機先・工夫・景品・紅茶	岸和田市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助
京都 塔の会	24日(金)午後1時から 肉・拭く・無用	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜の 句会費 400円 投句料 62円切手3枚

# 編集後記

とがよいのであろうか。私はそうは思わない」

★「人間が健康を發展させていくには、三つの原則があると思う。①バランスのとれた栄養を、いい環境の中にとること②労働と休息との正しい配分③生体の鍛練。この三つである」——

編とも、『森林浴』を提唱した今は亡き異色の生気象学者、神山恵三のことばである。

★「ここに遺言状がある。本堂にしまっておき、一山興亡の一大事が生じた時、一山の大衆が大般若経を誦し、筐を開けるがよい。大事の解決方法がたちどころに分かるであろう」——これは一休禪師の遺言であつたという。さて一大事が起こり、その遺言状を開ける時が来た。そこには「なるようになる。心配するな」と書かれていた。

(正)

☆ある本に面白い例えが載

つていた。「紅茶に角砂糖を入れると、紅茶に溶けてるだろうと思つて

いる。このように砂糖は個性を失うことなく、紅茶といふ他の個性の中に生き、とも溶け合つて、それぞれ

の個性を生かす」(み)

◇夫婦茶碗妻の茶わんの強いこと——という川柳があつた。夫婦共々健康でなければと思つているが、人間ドックの検査結果にまず肥満度は19%、妻のは21%、黒丸がしてある。二年に三度位のペースで診てもらつて

いるが、数値はさほど變つていない。ややこしい単位の数字も似たり寄つたりであるが、自分の体は自分で知つている積りである。私

表題は健康十訓。(し)

は肝臓と腰痛、妻は心臓と足痛の病気で逝くことにならうと思つている。

◇壇家寺本坊に額が掛かり次の事が書いてあつた。

一少肉多菜

肉を少なく野菜を多く

二少塩多酢

塩類を少なく酢を多く

三少糖多果

砂糖を少なく果物を多く

四少食多飢

少なく食べてよく噛んで

五少衣多浴

なるべく薄着風呂に入る

☆白い色は、他の色を美しくする不思議な力があるよ  
うな気がする。梅干しも白  
い小皿に載せると、うきう  
きと喋り出しそうになる。  
同じ食卓でも、白のテーブル  
ルクロスを掛けると、ご馳  
走に見えて食欲をそそる。  
白の小瓶に無雑作に挿され  
たタンポポも可愛い。白は  
色ではないとも言われるが  
他の色とは違う白と言う一  
つの個性を持つている。

☆人はさまざまで、その顔  
も個性も一人として同じ人  
間はない。その違つた顔  
異なる個性を持つた人間が  
一つの国、社会、家の中に  
生きている。時には、一つ  
の個性が自己主張をして、  
他を押しつぶそうとする。  
当然、争いとなり、憎しみ  
苦しみが生まれる。それぞ  
れの個性を失わずに、周り  
と共存できないだろうか。

☆ある本に面白い例えが載  
つていた。「紅茶に角砂糖  
を入れると、紅茶に溶けて  
るだろうと思つて

いる。このように砂糖は個  
性を失うことなく、紅茶と  
いふ他の個性の中に生き、  
とも溶け合つて、それぞれ  
の個性を生かす」(み)

◇夫婦茶碗妻の茶わんの強  
いこと——という川柳があつ  
た。夫婦共々健康でなけれ  
ばと思つているが、人間ド  
ックの検査結果にまず肥満  
度は19%、妻のは21%、黒  
丸がしてある。二年に三度  
位のペースで診てもらつて

いるが、数値はさほど變つ  
ていない。ややこしい単位  
の数字も似たり寄つたりで  
あるが、自分の体は自分で  
知つている積りである。私

表題は健康十訓。(し)

は肝臓と腰痛、妻は心臓と  
足痛の病気で逝くことにな  
らうと思つている。

◇壇家寺本坊に額が掛かり  
次の事が書いてあつた。

一少肉多菜  
肉を少なく野菜を多く  
二少塩多酢  
塩類を少なく酢を多く  
三少糖多果  
砂糖を少なく果物を多く  
四少食多飢  
少なく食べてよく噛んで  
五少衣多浴  
なるべく薄着風呂に入る

六少車多歩  
車に乗らずよく歩く

七少煩多眠  
くよくよせずによく眠る

八少怒多笑  
あまり怒らずよく笑つ

九少言多行  
おしゃべり慎み実行する

十少欲多施  
欲望をひかえ施し多く

表題は健康十訓。(し)

は肝臓と腰痛、妻は心臓と  
足痛の病気で逝くことにな  
らうと思つている。

◇壇家寺本坊に額が掛かり  
次の事が書いてあつた。

一少肉多菜

肉を少なく野菜を多く

二少塩多酢

塩類を少なく酢を多く

三少糖多果

砂糖を少なく果物を多く

## 作品募集

9月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句)	西尾 葉選
水煙抄 (10句)	黒川 紫選
銀河系 (3句)	河内 天笑選
茴香の花 (3句)	八木 千代選
吟題 (3句)	「遠い」
「ようやく」	三輪 通彦選
「円」	辻川 慶子選
「無心」 (3句)	金村 青湖選
初歩教室「無心」 (3句)	吉岡美房担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

10月号  
 課題吟 「コピー」「修理」「緩い」  
 初歩教室 「途中」

## 路郎忌 本社7月句会

日時 7月7日(火) 午後5時半  
 会場 メンズファッションセンター3階  
 中央区内本町1-1 電06・941・1918  
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

兼題 「血」「望む」「そのまま」「約束」「大切」

席題 1題 当日発表 各題2句以内

会費 500円

投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと

柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、

橘 高 薫 風 選  
 西 口 い わ ゑ 選  
 西 山 幸 選  
 藤 井 一 三 選  
 山 本 翠 公 選  
 西 尾 葉 選

## 本社8月句会 7日(金)

兼題 「袋」「消える」「待つ」「怪しい」「土」

## 夜市川柳募集

第2回「大きい」 谷垣 史好選  
 ハガキに3句 7月末締切  
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

## NHK川柳作品募集

課題 「名前」 森中恵美子選  
 ハガキに3句 7月10日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43  
 NHK大阪放送局  
 「ラジオセンター」川柳係  
 発表 7月26日(日)ラジオ第1放送  
 午前11時5分から

## 西日本文字放送作品募集

課題 「走る」 橘高 薫風選  
 ハガキに3句 7月15日締切  
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
 大手前ウサミビル3階  
 西日本文字放送 川柳係

〒545  
 発行所 大阪府阿倍野区三好町二丁目一〇一六  
 印刷所 藤原童心社  
 編集兼 西尾 葉  
 発行人 藤原 童心  
 平成四年 七月一日発行  
 平成四年 六月二十五日印刷

定価 六百元(送料56円)  
 半年分 三千八百円(送料共)

川柳塔社

電話 (06) 691-1456  
 振替口座大阪8133368番

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで  
住居の事なら何でも相談できる店

## TJ 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14  
TEL (06) 330-0006(代)  
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21  
TEL (06) 388-6166(代)  
FAX (06) 388-6886



白島海岸

潮騒のリズムに  
身をゆだねて  
心地よくくつろぎを

国立公園 隠岐の島

きん ぶ そう  
旅館 金峰荘

施設のごあんない

収容人員 45名  
客室 13室  
舞台付広間 42畳  
駐車場 乗用車10台  
冷暖房完備

〒685 島根県隠岐郡西郷町  
TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330